ユビキリ

紅雨椿葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユビキリ

【Ｎコード】
Ｎ３４０３Ｘ

【作者名】
紅雨椿葉

【あらすじ】
穏やかな鬼と仏頂面男の日常話。戦闘シーンが七話目から少し入ります。　（＊作者頁に書いてある、ブログで連載している小説の転載です。作者本人によるものであります。）

ユビキリ　ノ壱

昔々あるところに、一人の鬼がおりました。
とても強い力を持った鬼でした。
いつまでも若く、そして美しい鬼でした。
まるで人間のように知識を求め、食べ物でも利益でもなく、絆を望む鬼でした。

「栄雅さま」
「どうした」

灯りの匂いが、ふと揺らいだ。
命令調に慣れた若衆姿の男の問いかけに、闇に溶けた声が答える。

「五本杉の橋の向こう、楓谷の近くの渋山に住んでいるという鬼は、やはり実在しているようです」
「楓谷の住民の噂は本当だったか・・・・・して、被害を受けたという報告は？」
「いえ、それは特にあがってきておりません」
「ならば気にする事もないだろう」

労いの言葉をかけようとした栄雅だったが、声の微妙な気配を感じた。
書いている途中だった書状のある一文を書き加え、筆を置く。

「何か他にもあったか？」
「目撃証言が幾つかございます」
「ほう。それはどんなものだ？　見たら腰を抜かすような怪物だったか？」
「ええ。そう申しておりました」
くくく、と嘲りを込めた笑いが出そうになったが、声はそれを遮るように、ですがと続ける。

「腰を抜かすほど、美しかったと」
「美しい？」
「この世のものではないかのような、幻のような美しさだったと。そのように申しておりました」
「それはそれは」

一度見てみたいものだと言いかけ、しかしすぐさまそれは心のうちに隠されてしまった。
魔の者に関わって良いことなど一つもないのは、古今東西知られていることだったからだ。
その願いは、たとえ一番信頼している部下であろうとも、漏らしてはならぬことだと判断した栄雅は、声を下がらせた。

「美しい鬼、か」

どうせならば、今わの際に一目見てから死にたいものだと思いながら、書いていたはずの書状を押しやり、寝所へと足を向ける。久しぶりに深く眠った栄雅は、夢の中で見た美しい鬼がこちらへと刀を振り下ろす夢をずっと見ていたが、とても安らかな顔をしながら眠っていたという。

時は流れ、栄雅は楓谷のほうへと視察に行く事になった。
鬼のことを聞いてから八年は経っている。
鬼のことなど皆の口に上らなくなって久しかったが、住民の奥底には確実にそれはまことの話として浸透しており、楓谷の近くの渋山に入ろうとするものなど誰一人いなかった。
栄雅も実際鬼のことなど忘れていた。楓谷など、自分が治める領地のうちの一画に過ぎない。
退屈で厄介な仕事を終らせると、遠乗りに出ようと言い出した。というのも、ここ最近は気の詰まる事ばかりだったからだ。
澄み切った青空が広がり、村では猫がまどろみ、子どもたちは楽しそうに遊んでいる中、安らぎを感じるどころか自分だけが仕事をしているような気分になってしまい、遠乗りでもしないとすっきりしない。
しかし「誰もついてくるなよ」という栄雅の言葉に、家来たちは頷いたものの、いつもの影はついてきている筈だった。
それがとうに慣れてしまったこととはいえ若干鬱陶しくもあり、全て忘れるようにして馬を飛ばしていく。
飛ばしていくうちに、辺りは背の高い草に囲まれた草原へと出て行く。
暫く進むと、突然馬が嘶いた。

「なんだ・・・・・・？」
馬は蛇に噛まれたか、恐ろしいものにでも遭遇したかのように動揺していた。
制するために手綱を幾ら引いても落ち着きやしない。

「・・・・・・ッ！」

ぐい、と体が引っ張られるように感じた。急に加速していく馬の動

きに慣れるまで暫くかかったが、全速力で走っているうちに落ち着いてきたのか、疲れてきたのか、ようやく速度が落ちてくる。
小さな泉を見つけたので、近くの木の近くで降りると、汗を拭いてやりながら水を飲ませていく。
すぐに帰らなくても日が暮れるまでには時間がある。
それに一人でいられる時間など滅多にないのだ。別に烽火などを上げる必要もないだろう。
栄雅は微苦笑しながら、草むらへと腰を下ろした。

「おい、おいて」
「・・・・・・？」
「死んどるんか。それとも死ぬ気なんか？」

柔らかな声音に促されて、ようやく意識が浮上する。
それにしても心配の欠片も感じられない口調だ、と若干筋違いな恨み方をしながら身を動かした。
ようやく起きたかと安堵する声が聞こえ、遠ざかる気配がする。

「俺は死んだのか。それとも今から死ぬのか？」

起きぬけのぼうっとした頭から出た言葉ではあったが、それは相手の笑いを誘うには十分だったらしい。
困ったように笑いながら、目の前の人物は首をかしげた。

「さあな。好きにするといい。ここらには熊が居るらしいけ、歩いとったら出くわすこともある」

焦点が合うにつれて、視界が開けていく。
柔和な顔立ちをしていて、利発そうな薄緑の目の輝きがこちらを見

返している。何より銀の髪が目を引く、立派な体躯の青年だった。

「異人か？」

「異人に会うたことがあるんか？」

「まあな。しかし、どれも茶色い髪をして、瞳は水を含ませた青色をしていた」

そのどれとも違うと告げると、じゃあそことは違う他の国から来たのかもしれないが、と含みを持たせる言い方をした。

「人間よりも長い事生きているから、きっと妖怪の類なんだろうよ」

ふふ、と笑うと、こちらを試すような目で見返した。

けれどその目も、自分がここにいることを責めるでも疎ましがるでもなく、ただ面白がっているのが感じられて、どこか親しみやすさえ覚える。

「狐が化けているわけじゃないのか？」

「長い事この姿じゃけんのう。尻尾の出し方など忘れてしまった」

やはりくすくすと笑われながら返されてしまった。

そこでようやく栄雅は、渋山に住むという鬼を思い出す。

「楓谷の近くにある、渋山に美しい鬼が住むという。それはもしかして――」

「美しいかは知らんが、ここらに住んでいる鬼なら恐らく私のことじゃろうね」

「・・・・・・一体どこの出だ？　訛りがいろいろ交じっているような」

鬼はますます笑いを深めた。

「気になったか？　それはすまんな。長い事色んな土地を歩いてきたから、言葉もよう分からんようになってての。通じておるんじゃから、ええだろうに」

「それもそうか」

疲れたように笑う栄雅の顔を見ながら、鬼は「アンタ変わっとるなあ」と一言だけ呟いた。

「何がだ？」

「普通なら、『嘘だ』とか『ばけもの』とか言って逃げ出すか、恐怖のあまり声も失って立ちすくんでおる事が多いのよ」

たまに子どもの中には恐れも知らずに近寄ってこようとする者もいるけんど、と遠い目をした。

しかしその子どもとはすぐに会わなくなるだろう。

鬼が触れたなら穢れたと言われて、隔離されるかもしれない。一緒にいることを見られたなら、子ども諸とも襲われるかもしれない。

もしくは食べられたと思って放置されるかもしれない。村に戻ったとしても、鬼子として忌み嫌われるようになるかもしれない。

どれも「かもしれない」というものだったが、その子どもが辛い思いをする事になるのは間違いなかった。

栄雅は一通り考えて、そっちこそ変わってるだろうと返す。

「俺が思っている鬼は、人を頭からバリバリ食ってしまうような、おまけに牙も角も生えている外見も中身も恐ろしいものだったのに」

「じゃあ鬼じゃないのかもしれんなあ。鬼の出来損ないじゃ」

「出来損ない、か」

栄雅はふと笑った、つもりだったが鬼はこちらを不思議そうに見つめてくる。

「・・・・・・？」
「おまん、悲しい顔で笑うの。無理して笑っておると、いずれ笑えなくなるぞ」
ぐ、と詰まった顔をした栄雅だったが、笑顔なぞどうでも言いと返すと、鬼は悲しそうな顔をした。
「他人のために笑うんは優しいんかもしれんがね、自分のために笑えんいうことは辛いと思うよ」
まあ、笑いたい時に笑う事が叶わんなら、お疲れさんとしか言えんがね。
そう言って、鬼は笑った。
人好きのする顔だった。
これじゃあ、仏頂面をしている自分の方が鬼のようだと栄雅は自嘲を込めてまた笑いたくなったが、そうしたらまた、この鬼は悲しそうにこちらを見つめてくるのだろうか。
「好きな顔をするとええ。何も年中自分の顔を見張ってろとは言っとらんじゃろ」
こちらの心を読んだかのように、鬼は言う。
――笑うべきか、戸惑うべきか。
終いには自分の気持ちさえ分からなくなってしまって、栄雅は拗ねたように口を尖らせた。

ユビキリ　ノ弐

「ごめん」
「かかさま、えーがさまがやって来たー」
「こら、いらっしゃったとお言い。どうもすいません」
「いやいや、子どもの言うことだからな。それより具合はどうだ？」
すっかり痩せてしまって声も弱々しい女ではあったが、そう聞かれたコウは「大分楽になりました」と笑顔を見せ、すっくと立ち上がった。
「うちの人を呼んで参りますね。もしよろしければ、粗茶ではありますがお菓子とご一緒に。暫しおくつろぎください」
どうぞ、と上座を示すと、栄雅の傍にいたがる子どもを急かしながら、部屋を出て行く。
部屋に飾られた野の花に、あの幼い子どもが摘んできたのだろうと見当をつけて、微笑ましい気持ちになる。

「お待たせいたしました。便りが遅れまして、申し訳ありません・・・・・・」
あくまでも内密の相談だった。
このところ栄雅はといえば、領内の村々を回ってその土地の状態や、民の間での流行病の有無、個人の健康などを気遣う事を専ら常としていた。
そうして時折個人の家に上がらせてもらうのである。
しかしそれは歓談を楽しむという雰囲気ではなく、双方とも企みごとを話すような、ひっそりとしたものだった。

「なんじゃ、また来たのか。おんしも相当に暇じゃの」
「おまんと言ったりおんしと言ったり・・・・・・統一しろというのに」

鬼は「通じておるんだから、どうでもええじゃろう」と呟きながら、茶を淹れてくれる。

「おんしも相変わらずの仏頂面やね」
「それこそどうでもいいだろう」
栄雅は不機嫌そうに茶をすする。すると鬼は「それもそうか」と小さく笑った。

最近は専ら、鬼の住処である山小屋に暇を見つけては逃れるようにしてやって来ていた。
その度にちょっと呆れたような顔をして見せるが、鬼は栄雅の訪問を喜んでいるようにも見える。
それというのも、いつも山の幸で作った菓子や、料理をふるまってくれるのである。
鬼はどこからどう見ても成人男子にしか見えないのにとても器用で、ましてや鬼とは思えないほど丁寧な動作をした。

「全くなあ。城にいると息が詰まる」
「隠居の親父さんはどうしとるのかね」
「隠居とは名ばかりのものよ。俺に厄介ごとを全部押し付けていいところだけ攫っていく、鳶のようなお人だ」
「若いうちに苦労はしておけというから、そういう存在もある意味では貴重なもんじゃ」
しみじみと言う鬼が、このときばかりは少しだけ憎らしく思え、声の調子が僅かに刺々しくなる。

「人事だと思って。いいな、鬼は。人のしがらみという奴からは解放されている」
「しがらみ、ねえ」
「・・・・・・」
「・・・そうでも、ないんやけどね」
「・・・・・・？」
その時、鬼がふと見せた憂いの顔が、栄雅には強く印象に残った。

ユビキリ　ノ参

その日の空は、灰色に塗りつぶされていた。
いつものような青はどこにも見えず、昼間だというのに夕方かと思えるような薄暗さである。
栄雅の後に付いてきていた少年は不安そうな顔をして背後を振り返った。
振り返られた数人の共は、落ち着かせるような笑みを浮かべるも、内心では彼らも早く帰って休みたいものだと栄雅を見つめる。

「土産に何か狩っていってやりたかったんだが・・・・・このぶんじゃもう駄目だろうな。仕方ない、土産には何か酒でも買っていくか。明良、それでもいいか？」
「はい、兄上。ご無理をいって申し訳ありませんでした」

父に何か土産を持っていってやりたいと言い出したのは、栄雅の弟である明良だった。
僅かに赤みが差した頬をしていて、精悍な顔立ちの栄雅とは違って幼さが垣間見える。
人好きのする性格で、いつも明良が笑うと、藩の者たちに関わらず、栄雅さえも気持ちが和らぐのを感じていた。弟ながらとても可愛いと思う。
そしてそれは彼らの父親とて例外ではなく、特に明良は父親の大のお気に入りだった。
その父親の愛情を知っているからこそ、土産を持って帰りたいと言い出したのだろう。それならば、明日十三になるというのに未だに可愛い可愛いと持て囃されて、少々甘えたがりのある弟に男として

手本を見せてやろう。そう思って一緒に狩に出たはいいが、そうこうしているうちに一気に天気は悪くなってしまった。
遠くの山では一瞬雷さえ見えるような天気である。
引き返そうとしたときにはすでにぽつぽつと雨が降ってきていた。

「そういえば、明良。お前は明日十三になるのだったな」
「はい」

何度も元服するその日を待ち望んだ。それは既に分かっている事だったが、噛締めるように確認する。
早く兄上のお役にたちとうございます、と屈託のない顔で笑う明良の顔に、とうに忘れたはずの怒りと寂しさが胸のうちに一瞬掠めたが、それをなかったことにして、木陰で馬を止めた。
雨をしのげるような大木ではあったが、共の者たちまで入れるほどではない。
少々不機嫌そうな顔をしながらも、内密の話でも有るのかもしれないと暫し明良と栄雅を離れた所から見守る。

「これをお前に預ける事にする」
「これは・・・・・・？」
不思議そうにそれと栄雅を見比べる弟の手に、押し付けるようにして渡すと、遺言だと一言だけ返す。

「――兄上！」
病でもあるのかと心配そうな顔をした明良だったが、首を振る栄雅を見て、そういうわけではないことを知る。

「遺言というか、やらなければいけない仕事を覚書みたいにして連ねておるだけだ。とはいえそれでも誰彼構わず見せてはならない、

完全なる秘密事項だ。大切な秘密を預ける事で、成人する事の重さと、藩主としての苦労を思い知らせてやろうと思ってな」
悪戯めいた兄の笑いに、ほっとしたような笑みを明良はようやく浮かべた。
そういうことですかと困ったように頭をかく。

「これは大変なものを頂いてしまいました」
「しかし、それは俺に何かあったときに始めて開け」
「・・・・・・？」
「遺言といったのはそういう意味よ。仕事というのは自ら見て学ぶものだ。父上からも聞けるだろうが・・・・・、俺のやる事を間近で見ていった方が早く身につくだろう。いいな、明良。俺に――私がたとえ病で倒れるような事があっても、すぐさまお前が代われるようにいつでも準備をしておくのだぞ。いつ何時であってもそのような心構えでいけ。それでこそ川本家の男子だ」

公務の時以外では、自分の前で自らを俺という兄が「私」といった事で、これは栄雅としての藩主としての言葉なのだと気づく。
兄の諭しに明良は笑みを消し、真剣な顔で頷いた。
満足そうな顔で栄雅も頷き返すと、ようやく二人は共の者を引き連れ、急いで屋敷へと引き返していった。

ユビキリ　ノ肆

「兄上・・・・・・藩主というのは大変なものですね」
「そうだろう・・・・・・・ようやく気づいたか」

億劫そうに立ち上がった栄雅は青白い顔をしていたが、傍に控えていた家来の一人に、二人分の葛湯を持ってこさせるように言った。それというのも、連日の執務で同じように忙殺されて青白い顔をしていた、甘い物好きの明良を気遣っての事である。

「すいません、兄上。本来ならば私が・・・・・・」
「余計な気を回さないでいい。弟なのだから、弟らしくたまには甘えていろ」

元服の日から十と少しばかりの日にちが経っていたが、それまでは幼子のような甘さを見せていた明良の表情は、見違えるように大人びていた。
それでも冷血になったとか、傲慢になったとかいうわけでもなく、頼もしさを醸し出している。
将来はきっと、藩主である栄雅を支えていく立派な若人になっていくだろうと誰しもが予感できた。
そのような周りの期待も薄々感じているのだろう。本来ならばそこまでの必要はなかったが、明良は栄雅に四六時中くっついて、藩主とは何たるかを学び取ろうと尽力していた。
それがまた微笑ましさを感じさせる。

「さて、これで今日の分は片付いたな。明良、お前も疲れただろう。後これで急ぎの用事は終るから昼飯でも食っていろ」

「いえ。お付き合いいたします」

これからやる用事が実は一番手間がかかり、厄介だと明良は分かっていた。

それを見越して栄雅も休んでいいといったのだが、どうやら明良はあの時の栄雅の言葉どおり、すぐさま藩主に代われるようになるほど有能になろうと、学ぶ姿勢を崩そうとはしなかった。

その気持ちを察して栄雅はそうかと言ったきり、好きにさせておく事にする。

「ううん・・・・・」

「お疲れ様でした、兄上」

肩の関節をほぐすようにしながら遅めの昼餉をとっていると、すらりと襖が開いた。

承諾も得ようとせずにそんな真似をする人物は、この土地では最高位の栄雅を除いて一人しかいない。彼らの父親、兼良である。

「宇井との話は終ったようだな」

「父上」

「どうだ、明良。栄雅から学ぶ事はいろいろと多かろう。数日栄雅の傍で生活を見ていてどう思った？」

父親だからとはいえ、栄雅に敬称もつけないことに一瞬戸惑った明良だったが、栄雅の目配せを見、無礼には気づいていないふりをして、にっこりと笑った。

「はい、父上。やはり兄上には到底及ばないという事が改めて分

かりました。民と直に接しておられる兄上はとても大変そうで、一緒に回る私さえも若干疲れを覚えるほどですが、得るものは多いかと存じます。兄上を支えていけるよう、一層精進しようと新たに日々誓う毎日で」

「そうかそうか」

楽しそうな明良に兼良は、笑みの形に刻まれた口元の皺を一層深くした。

目の前の二人を見て、栄雅は薄っすらと微笑んだが、対照的に兼良はそんな栄雅を見て一瞬顔をゆがめる。

そしてその一瞬を栄雅は見逃さなかった。

「これをあまりこき使ってくれるなよ。勉強熱心なのはいいが、そのせいでわしの屋敷には最近とんと姿を見せんようになってしまったからな」

「それはすいませんね。明良が離れたくないというものですから」

いい加減に子離れをしろと毒づきたくなったが、ぐっと押さえる。あくまでも笑みの形を崩さなかった栄雅を見て、ふんと鼻息荒く部屋を出て行く。

土産代わりの小さな菓子を明良にやるのも忘れず、風のように去っていった。

「兄上・・・・・・と父上は、何かあったのですか？」

「さあて。虫の居所でも悪かったんだろうさ。だが、そういうことを父上の前では言うなよ」

腑に落ちないといった表情だった明良だったが、これでお終いだと書き物を始めた栄雅の横顔を見て、小さくため息をつきながら自分も食事を片付けさせた。

ユビキリ　ノ伍

明良の元服の日から丁度一月がたっていた。
相変わらず明良は屈託のない笑みを浮かべながら栄雅の行く先々へとくっついてまわっている。
しかし、纏まった空き時間が出るたびに、栄雅はいつもどこかへふらっと外に出て行ってしまうのだが、その行き先を明良は知らされずにいたので、とうとう聞いてみる事にした。

「兄上はいつも休みのたびに遠乗りに出かけられますが、一体どこへ行っておられるのですか？」

藩主の弟とはいえ、藩主の仕事を全て教えられるわけではない。
段階的なものもあるし、決して少したりとも漏れてはならない秘密の仕事もあるだろう。
だからそのせいか、問いはあくまで控えめにこっそりと投げかけられた。
それはいつものように馬の状態を見極め、遠くへ出かけようかとしていた直前であった。
ちなみにこの時はいわゆる秘密の会合の日だった。

「内密の話し合いがある。お前がもう少し藩主の仕事に慣れてきたらいずれ連れて行ってやるとしよう」
だから今は見逃してくれと困ったように笑んだ、栄雅にしては珍しい表情に、明良は内心驚きつつも、「分かりました、行ってらっしゃい」と明るく送り出す。

「なかなか・・・・・・この生活を続けていくにも無理が出てきたのかもしれないな」
「しかし民の心をつかむまでもう少しといったところです。次は主だった一族との連携を図ることを更に強化していけば、兼良様の影響力も幾らか弱まるかと」
「だな」

最近になって何度ついたか分からないため息を、栄雅は億劫そうにはいた。
既に馴染み深い影とは別に、最近では更に気配が複数増えていた。それは兼良の手の者だったが、既に手懐けている。

「――全く父上も、既に隠居の身だというのに精力的だ」
「一度権力を捨てられたはずでしたのに、惜しくなってしまわれたのでしょうか」
「いや。俺に厄介ごとを押し付けたいだけだろう」
難儀な事だ、と主従揃ってため息をついた。
といっても影がため息をついたのかは分からなかったが、恐らく雰囲気でそうだろうと栄雅は思っていた。

「あーあ、何とか終った。くたびれた」
「栄雅様。誰が見ているか分からないのです。どうかお口を閉じてくださいませ」

たしなめるように言ったのは潜んでいる影のうちの一人だった。
自分よりも幼い声にふっと苦笑いを零しながら、栄雅はぐんと背伸びをすると、一つ大きな欠伸をする。
困ったように再度名を呼ぶ影に、少しだけ老成した声が間を取り成

すように口を挟んだ。
「弓影。辺りには誰もいないようだ。私たちがいる時くらい、肩の力を抜いてみてもいいだろう」
自分の味方をしてくれた声に、栄雅は嬉しそうに笑いながら、弓影に反論する。
「透影の言うとおりだ。それに誰かがこっそりと見ていたら、本当はお前が対処しなければならないだろうが」
欠伸してたら、さり気なく自分から目を逸らせるように工夫するとか、と提案した栄雅に、今度は透影がこちらに矛先を向けた。
「栄雅さま、気を抜かれるのも結構ですが、何よりもご本人の意識が大切ですよ」
栄雅ははいはい、と気の抜けた返事をした。
本当に分かっておられますか？　と少しだけ怒気を滲ませたような透影の声が、やはり姿を見せずに木陰から響いてくる。

見事なものだ、と栄雅は毎度の事ながら舌を巻いた。
気配を察する事が出来ないのは、小さい頃から変わらない。
しかし透影は、父親から自分が幼い頃よりつけられている御守と護衛を兼ねている人物で、兄であり父であり師であるかのような存在だったので、どうしても遊ぶ時や勉強の時は渋々姿を見せてくれる。
一方弓影の方は、自分が元服した折に忍びの里に直接交渉して呼び寄せた人物であるせいか、最初の対面の時に一回、任務を申し付ける時にたまに姿を見せるくらいで、後は声のみでの交流しかない。
他にも弓影と同じような者たちはちらほらいたが、それは代々の栄雅の役職に付くべき者たちなので、個人的な守りといえばこの二人が挙げられた。
長年共にいるせいか、通じ合うものも多いと栄雅は感じている。

「少し風が出てきましたね。栄雅さま、早めに帰ることにいたしましょう」
「だが・・・・・・」

栄雅は渋った。それというのもこの日のこの時間帯にはよく鬼のところへ行っていたからだ。
今日を逃してしまうと、いつ会えるか分からない。
そこで栄雅は、自分が思ったよりも鬼との逢瀬を楽しみにしている事に気づいた。

――お互いに愚痴をこぼしたり、他愛もないことを話していたりするだけなのに。
どうしてここまであの鬼に会いたいと思うのか。

（恐らくあののんびりした笑顔が癒しになるんだろうな）

ゆったりとした空気が彼の周りにはいつも流れていた。
その空気に感化されて、いつも気を張ってささくれだった自分の心もいつしか解れていく気がする。

あの鬼に会えないことは残念だったが、透影の声がいつになく真剣だったので、帰る事にした。
幼い頃から透影が世話を焼いていたせいか、栄雅は今となっても逆らえない部分も多い。
それに、自分の体調を気遣っての事だと分かっていたから、明日はきっと会いにくると誓いながら三人は帰路についた。

ユビキリ　ノ陸

「栄雅さま」
「なかなか順調みたいだな」
「そうでございますね。宇井家、次郎太の息子をきっかけに足がかりも掴めようというもの」
地道な努力のおかげで、栄雅の地位は着々と確固たるものとなっていた。
しかしそのような俗世にまみれた話ばかりしていると、やはりどこかで息抜きをしたくなるというものだ。

「透影・・・・・今日の用事はこれで済んだな？」
「はい、そう記憶しておりますが――まさか、出かけられるおつもりですか？」
「その通りだ。気晴らしでもしないと気が滅入る」
「いけません」
強い口調で止めたのは、共として影すらもつけようとしないためだった。
先日の雨に濡れたせいで、明良は風邪を引いてしまったし、栄雅も実は体調がいいとは言えなかった。
しかし、主だった症状は出ていない。頭痛も眩暈も咳もない。ただ少しばかりだるく感じるだけで、それは気鬱のせいだと栄雅は思っているのだが、透影に言わせると、顔色が良くないのだそうだ。
「大丈夫だというのに。第一、ずっと外にも出ず屋敷に篭っているのだぞ？　やっておれん」

「――栄雅さま」

もし透影の表情を読むことができたなら、眉でも顰めているのかもしれない。

それだけ同情したような声で、こちらを気遣う気配がした。

そして、意外と栄雅の外に出たい気持ちが強いと知ると、諦めて言った。

「分かりました。しかし、少しでも体調が悪いと感じられたらお戻りください」

「分かってる。ああ、弓影。お前もついてくるなよ」

「栄雅様、それはあまりに・・・・・・」

危険です、と言いたかったのだろうが、弓影は口を閉じた。

恐らく透影に止められたのだろう。

「じゃあ行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

「せめて屋敷を抜けるまでお付き合いいたします」

「ああ」

すらりと障子をあけると、こちらへ向かってくる影が見えた。

よく見るとそれは明良で、まだ少し青い顔をしている。けれど目は力を取り戻していた。

「兄上。今そちらへ行こうとしていたのです」

「どうした？」

「もちろん、お手伝いをしようと思いまして」

「馬鹿を言うな。風邪を引いたのだろう？　日ごろの無理が祟ったのだ。眠れるうちによく眠るといい」

栄雅が諌めると、明良は少しだけ拗ねたような顔をした。
「もう大丈夫です。起きれるようになったから兄上のところで手伝いをするといったら、こんなにぞろぞろついてきて・・・・・・」
「それは当たり前だ」
呆れたように栄雅が明良の周りを見渡す。
そこには明良のお付の者たちがぞろぞろと行列のように付いてきていた。
苦笑いを返しながら次々に礼を返していく。
「それに手伝いは必要ないぞ。丁度今仕事は終ったのでな。これから気晴ら・・・・・じゃない、少々遠出をせねばならん。お前は屋敷でじっくり静養する事だ」
そういうと、明良お付の者たちは目に見えてほっとした顔をした。
「それならば仕方ありませんな」
「さあさ、明良様。部屋を暖めておりますから、どうぞお戻りください」
「お菓子もご用意しておりますよ」
いつまでもお菓子で懐柔される子どもとして扱われるのだ、と嘆いて栄雅に愚痴をこぼしていたことがあった。
その時はそれだけお前が愛されている証拠だ、と宥めてやったのだが、これは確かにやりすぎかもしれないと栄雅は明良に同情し、微妙な表情を浮かべる。
すると、それを悟った明良が同じような顔を返し、諦めたようにため息をついた。
「仕方ありません。私は部屋に戻っています。どうか兄上、お気をつけて」
「うん、留守を頼む」

どうにも弟の顔が寂しそうに見えたのは、きっと彼が風邪をひいているせいだろう。
栄雅はふと双眸を細めながら口元を緩ませた。
そうして頭を軽く撫でてやってから、屋敷を出た。

「随分と天気が悪くなってきたな・・・・・・」
やはり最近は天候が悪いらしく、また空はぐずりだしていた。
本格的に降る前に、どこか雨宿りできる場所を探そうと、森の中へと入っていく。

「どう、どう・・・・・・いい子だからおとなしくしていてくれ」
雨が比較的当たらない木陰に馬を放してやると、疲れたといわんばかりに蹲ってしまった。
草木が茂っているせいで、岩陰や洞窟などが見つからずに、とうとう歩きで探す羽目になる。
そうこうしているうちに、雨はどんどんと地面に染みを作りだしていた。

「ここら辺の茂みは比較的濡れなさそうだ・・・・・・」
がさがさと奥に入り込んでいくと、雨がそれほど当たらない木陰があった。ただその分草も茂っている。
熊の足跡はなかったから、動物に出くわす可能性も低いだろう、そう思って栄雅がもう少し奥に入ると――

「――何！？」
その先に、地面はなかった。
体がまっ逆さまに、奈落の底へと落ちていく。

ユビキリ　ノ漆（前書き）

戦闘によっての流血表現、死亡などの表記がありますので、（そこまで残酷に鮮烈には書いていないつもりですが）

そのような作品を好まれない方、もしくは小学生の方は、さくっと流してください。

恐らくこの話を飛ばしても、・・・・・・状況だけは概ね分かると思います。

読んでも大丈夫だという方は、お手数ですがさらに下へとお進みくださいませ。

ユビキリ　ノ漆

「栄雅様！」

声と同時に栄雅の腕をつかんだのは、弓影だった。
それはまさに間一髪で、足元はぶらりと谷底へ繋がる空中へと投げ出されていた。
「よか・・・・・・ったぁ、怪我はありませんか？」
「弓影・・・・・・付いてくるなと言ったはずだろう」

こんな時に何を言ってるんですか、と弓影は笑った。
肌色を隠すための布がないのは、きっと人ごみに紛れてきたからだろう。
初めて栄雅は、弓影らしい年相応の姿を見ることとなって、こんな状況だというのに笑いがこみ上げてくる。

「それに、私だけじゃありませんよ。透影様、申し訳ありませんがお手を――」
「透影？」

まずい、と思った。
一人で出かけるといっておきながら、この様は何だときっと怒っているだろう。
そうして怒ったような顔と呆れた目をしながら、少し乱暴に引き上げて、否応なく馬に乗せて帰されてしまうのだろうか。
子どもの頃の自分と、当時の透影の姿が思い浮かんだ。
だが、栄雅が思い浮かべたどの顔とも、今の透影の表情は当てはまらなかった。

「栄雅さま・・・・・・そのまま落ちてはいただけませんか」
「透影様？　一体何の冗談を・・・・・・」
「どうか、安らかに」
透影は冗談を言っている顔でも無表情でもなかった。ただただ渋い顔をしながら、こちらを辛そうにして見ているだけだ。
引き上げようとしている弓影に、手を貸そうともせず。
「あなたを殺せ、と命が下ったのですよ。この状況なら怪しまれずに、事故死という事で始末できます」
「透影様、冗談にも程が・・・」
「冗談ではない」
透影の目が、そこで初めて冷徹な光を発した。
冷たい殺気がびりびりと肌を刺す。
それを察した弓影は、透影がゆっくりと刀を取り出すのを見て、栄雅を引き上げるのを諦め、とりあえず手を岩肌に固定させる。
そして自分にとっては先輩でもあり、親とも呼べるような存在を、栄雅を害する脅威とみなして同じように刀を取り出し、構える。
「栄雅様を本気で殺すつもりなら、排除します」
「弓影。お前ごときの段階で私は殺せまい。今なら逃げる猶予を与えてやる」
その口調は、栄雅が聞き慣れたどの透影の声とも違っていた。とても刺々しく、無情で、耳障りだった。
「情けをかけられる覚えはない！　タアッ！」
「く・・・・・・ッ」

「エエッ！」
「・・・・・・！」
「ヤッ」

はたから見れば、弓影のほうが優勢に見えた。
連続して技を繰り出し、透影は防戦している合間に、躓かないようところどころ辺りをうかがっているだけだ。
時間からすれば三十秒ほどのものだっただろう。
あっという間に勝敗は決まった。

「が・・・・・・ッ！」
弓影の動きがぴたりと止まる。
見ると周りに透明な糸が張り巡らされていた。
透影は息切れ一つもしていなかったが、冷や汗を流している弓影の方は浅く息を繰り返している。

「やめろ！　透影！」
「敵と戦う時は地形を利用しろ、そう教えたはずだな？」
「・・・・・・」
「これがお前の未熟さだ」
「――――ッ！」

躊躇うことなく首筋に刀を当てて、引いた。
血飛沫が嘘のようにあがり、倒れ伏した地面へとどくどくと流れ出していく。
今にも消えそうな灯火を必死に燃やしながら、弓影は栄雅のほうを向いて、にっこりと微笑む。

「――ゆか・・・げ」

そうして彼は、目を閉じた。

ユビキリ　ノ捌

「ああ、汚れてしまった」

ひゅん、と血のりをはらいながら透影はこちらへと歩いて来る。
何故か岩にしっかり掴まっているはずの手は心もとなかった。
恐怖心は感じない。けれど手に力が入っているのかさえ分からない。

「一つ聞いてもいいか？」
「何でしょう？」
透影はいつもの口調となんら変わらなかった。
「命じたのは、父上か？」
「明良さま、とでも思いましたか？　お察しの通り、兼良様ですよ」
「ならいい」
「・・・・・・？」

不思議そうにこちらを見る透影に、こいつもこんな顔をするのだ、と栄雅はこの状況が僅かばかり嬉しかった。

「疑っていない者が裏切るのは辛い。だが、裏切る可能性があると思っている者から裏切られても、少しも痛くない」
「・・・・・・前者はもしかして私の事ですか」
「他の誰かとでも思ったのか？　察したとおり、お前だ」
先ほどの透影の口調を真似てやると、苦々しげに眉を顰めながら、口を開いた。

「あなたは聡い子どもだった。・・・・・・てっきり私のことも

疑っていたと思っておりましたのに」
「初めのうちはな」
誰も彼もが命を狙い、裏切った。だが、時が経つうちに彼は人を信じることを思い出させ、信じてもいいのだということを教えてくれた。
それは紛れもない、こちらを見下ろす彼だったのに。

「・・・・・・ッ」
段々と手が痺れてきた。苦しそうにしている栄雅に気づいて、透影は屈みこむ。
そうして刀を高々と頭上へ振り上げた。
栄雅は真っ直ぐ脳天へと突き立てられる自分の姿を想像して、思わず目を瞑る。

「どうか、安らかにお過ごしください――――」

「すき、かげ・・・・・・ッ！？」
どこにも痛みが襲ってくる事はなかった。
しかし、何も掴めずに何かが崩れる音がして、体が真っ直ぐ谷底へと落ちていく。
自分が今まで掴んでいた箇所では、地面に刀を突き刺した透影が泣き出しそうな目でこちらを見つめていた。

「さようなら」

声は聞こえずとも、口で刻まれた別れの言葉に答えるように、栄雅

は微笑んだ。
それにまた応じるように、無理やり笑った透影の顔を見ながら、鬼の言葉を思い出す。
（無理して笑っていると、いずれ笑えなくなるぞ）
そこまで思ったとき、体が叩きつけられる衝撃がして、栄雅はそのまま意識を失った。

ユビキリ　ノ玖

裏切るなら、完全に憎めるようにしてくれたらよかったのに。
それなら、こんなに痛くはなかった。
あんな目をするから、許したくなる。

「今度こそ死んどるんかの・・・・・・」
「今度、こそ・・・、本気で心配している声だな・・・・・・」
夢うつつの中で、声が聞こえて目が覚めた。
体を動かしたつもりだったが、重たすぎる体は僅かに身じろいただけで、全体に鋭い痛みが走った。

「川に流されて来とったよ、どこもかしこも血だらけじゃ」
痛ましそうな声で、鬼が頭を撫でた。この感触だと血が出ているのだろう。
そういえばいつもよりも景色が赤い。
鬼の指が鮮血にまみれた。白い肌と銀の髪に、それはよく映えていて、素直に美しいと感じる。

「おんし、どうしてこんなところにおるんじゃ。屋敷でしたくもない仕事をやっとるんじゃなかったんか」
「お前に会いに来た・・・・・・けどな。雨宿りをする途中で崖から落ちたんだ」
格好悪いだろう、と栄雅は無理やり笑った。
けれど鬼は騙されずに首をふる。

「お前の仲間がいたんじゃないんか？　必ず一人は付いて来とったんに」
「なんだ、知ってたのか・・・・・・俺は全然知らなかった」
今の今まで。
何にも自分は気づけやしない。

「兼良っていうオッサンがいてな・・・・・・」
どんどん体が冷えていくのが分かった。
「自分の一文字をとって名付けた妾の子が大層好きで。とっくに亡くなった妻の息子から栄雅の地位を奪って、そいつに与えたがってた」

それは分かっていた。明良は自分も好きだったし、権力なんてものは自分にとって厄介な荷物でしかなかったから、明良に栄雅を譲るために今まで根回しをしてきたというのに。
その動きは父にとって、自分が栄雅としての地位を磐石なものとしているようにしか見えなかったのだろう。
あながち間違っちゃいない。固めたかったのは自分のためではないけれど。

「だから、俺を殺せと命じたらしい」

もしかしたら、もっと前からその命は下っていたのかもしれない。
ならばもう、どうでも良かった。
元々生まれた時から、おざなりに扱われてきた命だ。結婚もせずに一人身で生きてきたのも、誰かに執着を持たせないためだった。いつ自分がいなくなってもいいように。

「だから、崖に掴まっていた俺の手を外すために、あんなに悲しそうな顔までして見せて・・・・・・」
らしくなく、何を言っているのか分からなかったが、自分は弱音を言っているらしい。
鬼は構わずに呼吸が苦しそうな栄雅の体を起こしてやった。着物が汚れると思ったが、そんな事を気にしている様子ではなかった。

「もしかして・・・栄雅っちゅうんは、位の名前なんか？」
「・・・・・・？　ああ、藩主を務める川本家に代々受け継がれてきた、大層ご立派な通り名よ」
「なら、おぬしの名前はなんと言う？」
息子に愛情を持たなかった兼良は、奥方が男子を産んだという知らせが入ってきた時に、ふと目についた草の名前をつけたという。
「つゆくさ・・・・・・」

元服の時と同時に栄雅になった。生まれて初めて自分に名付けられたのが「つゆくさ」。
透影も栄雅が落ちる寸前に、自分が幼い頃の呼称で「つゆさま」と呼んだ。
その響きが好きで、何度も何度も困らせては、名前を呼ばせた。

「綺麗な名前じゃね・・・・・・澄み切った濃い青。ぴったりな名前じゃ」
鬼は嬉しそうにその名前を繰り返した。まるで宝物を扱うような、丁寧な仕草だった。
「なあ、露草。俺はおんしに死んでほしくないんよ」
無茶を言うな、と思った。

全身打撲の上に骨折、内臓もいってるかもしれないし、血だってどれだけ流れたと思っているのか。
第一、足先の感覚はとうに無くなっている。
今話しているのだって一杯一杯で、それこそ奇跡だ。

「みんな、みんな・・・・・・置いていくんじゃ。これ以上人が死ぬのは見とうない」

少し前自分が、「人のしがらみという奴から解放されている」と鬼に言った時の顔が思い出された。
脳裏に深く刻まれた、なんともいえない悲しい顔。それは、人との繋がりがほしいという願いだったのか。
とても人間くさい。
少し自分と似たようなものを感じ取り、照れくさくなって憎まれ口を叩く。

「勝手だな、寂しいだけだろうが」

けれどそこまで自分を必要としてくれるのが、ただ素直に嬉しかった。
寂しがりやなこの鬼は、長く生きてきたと思えないほどに純粋で、自分を慕ってくれているという。
体は冷えていったが、心は温かかった。

「勝手よ。勝手じゃろうけど、でも・・・・・・」
「生まれ変わったら、一緒にいてやるよ」
「輪廻なぞ信じとらん。もしあったとしても、おんしじゃあない」
「・・・・・・・・・・・・じゃあ、お終いだ」
「露草・・・・・・」

泣きそうな顔をされてしまった。一体自分に如何しろというのだろ

う。
透影も同じような顔をこちらに向けていた。一体如何すればよかったのだろう。

「一緒に、鬼として生きちゃあくれんか」
「・・・・・・・・・は？」
息も絶え絶えだった。声も段々遠くなっていく。
けど、鬼の顔があまりにも必死だったから、何だか可笑しくなって
――

「いいよ」
とは言ったものの、恐らく鬼には届いていないだろうなと思いながら、栄雅は眠りについた。

ユビキリ　ノ拾

目が覚めると、まず感じたのは温かさだった。
ぱちぱちと薪がはぜる音がする。
寝返りをうとうとすると、やはり体は動かなかった。

「・・・・・・なんでお前が」
首だけを動かすと、端正な顔が目の前にあった。銀の髪をした鬼が無邪気な顔で眠っている。
声で目が覚めたのか、薄っすらと目を開けていた。
「しかもなんで裸なんだ」
お互い上半身だけは裸だった。不満そうな声に対し、鬼は不思議そうな顔をして問う。

「人間は寒い時にはこうやって温め合うんじゃろ？」
「それは雪山で遭難した時だろ」

こういうところがこの鬼は抜けている。
幾ら美しかろうが、自分は男に抱きつかれて嬉しがる性向は持ってない。

「そりゃすまんかったな」
体に回していた腕を解くと、毛皮で自分の体を包んでくれる。
そうして肩と膝を支え、抱えようとする鬼に、思わず焦って声をあげた。

「お、前・・・何するんだ？」
「何って。動けんじゃろ？　鬼になっても、まだ傷が完全に回復

したわけじゃないんよ。じゃから暖炉の傍が暖かい思うて」
そういうことかととりあえず納得したものの、ふわふわ浮かぶ足も、見上げなければいけない鬼の顔も全てが不安定で、何でこうなったのだろうと、栄雅は終始悩んでいた。

「俺は、死ななかったのか。鬼になった、と？」
「今更じゃね」
もっともだ、とも思ったが、それくらい基本的なことに気づけないほど動揺して、ぼんやりしていたのだから仕方ない。
呆れた様子の鬼が話してくれるのを待つ。

「川で、おんしは意識を失ったが、心臓が動く気配はまだ微かにあった。とりあえずそのうちに、こうやってな・・・・・・血を垂らしたんじゃ」
爪を手のひらに食い込ませる形で握りこぶしを作った鬼を見て、嫌そうに顔を顰めた栄雅に、すまんと鬼は詫びる。

「嫌がるのは分かっとった。けど、あの時はそれしかなかったんじゃ」
「・・・・・・仕方ない。それでそれからどうした」
「それだけじゃ。家に運んで寝かせて、あれから六日は眠りっぱなしじゃった。そこでようやくおまんは目を覚ましたっちゅうわけで」
「あれから、六日も経っているのか？」
「うん。思ったより早かった」
血が少なかったからかの、と鬼は呟いた。
そこでようやく気づく。

「お前・・・・・・目が赤いな」
「ん？　ああ・・・・・・らしいね。飢えを感じたときは、目が赤になるという。いつもは違うんやけど」
綺麗な薄緑色をしていたはずだったが、まるで川で見た自分の血の色のように、紅色をしている。
彼が飢えを感じているということは、付きっ切りで看病をしてくれていたということなのだろうか。

「人を、食うのか？」
「食わんよ。ほかにも食うもんはあるじゃろ。肉も魚も、野菜だって食べる」
「俺に・・・・・・角はないのか？　尻尾は？」
「少なくとも、私には生えたことないなあ」
「鬼じゃないみたいだ・・・」
「じゃけ、出来損ない言うた」

鬼は奥から飲み物を持ってきた。
動物の乳のようで、僅かに甘みが足されている。

「それを飲んで、もう一眠りするといい。その頃には内臓も回復して、たくさん食べれるじゃろ」
「お前は・・・・・・？」
「私は――私も傍で眠っているよ。だからお休み、露草」
そういえば自分は露草だった。もう八代目栄雅は死んだのだ。

声の響きに不安を感じ取ったのか、鬼は安心させるように隣に寝転んだ。

隣に誰かが寝ている傍で眠る事は滅多になくて、落ち着かない気持ちと、安堵の気持ちが合わさって目を閉じる。
それにしても鬼は、やっぱり自分のことも俺といったり私といったりだ。
統一しろと言いたかったが、そう言ったらきっと「通じておるんだから、どうでもええじゃろう」と返すだろう。

「そういえば、鬼・・・・・・」
「ん？」
「鬼の、名前はなんという？」
「私ね・・・・・私の名前は、ないよ」

気に入ったのか、何度も露草の髪を梳いていく。僅かに額に触れた小指が冷たくて気持ちよかった。
目を細めながら「自分の名がない」と言った鬼は、悲しいのか考え込んでいるのかよく分からない表情のまま、どんどんとぼやけていく。
露草は「そうか」と囁いたが、やっぱりそれも睡魔が攫っていく途中だったので、名無しの鬼に聞こえたかどうかは分からずじまいだった。

ユビキリ　ノ拾壱

「具合はいいんか？」

鬼の問いには腹の虫がくうと返事をした。
鬼は笑みを零しながらええみたいやね、と食事の準備をしてくれる。

「今度は何日経った？」
「一日ちょっと。でも、歩けるくらいには回復したみたいじゃな。やっぱり新しいもんは再生力も違うんかねえ」

まずは飲み物を腹に入れろ、との教えは川本家からだった。
鬼になってもその習慣は変わらず、茶をすすってから、汁物、青菜の順に食べていく。

「さすが、藩主だった奴はこんな山奥でも順序正しいの」
「そういえば・・・・・・今、藩はどうなっているんだ？」
「代理でお父上が取り仕切っているそうだが、いずれ弟さんに譲るつもりじゃろうね・・・・・・ちなみに、おんしは死んだことになっちょる」
「そうか・・・・・・」
それで、いい。そうされることを、望んできたはずだ。

「透影が・・・俺が谷から落ちたと報告したんだろうな」
「そうなんじゃろうね。私も詳しくは知らんが」
「・・・・・・・・・・・・」
「辛いか？」
「あ、いや・・・・・・ただ、明良が」

「弟のことね？」
「明良が、幸せになったら、もういい」

鬼が僅かに小指を動かしたのを視界の端に入れながら、露草はぼんやり考えていた。
生も、死も、全て受け入れる覚悟はできた。
人間としての生が終った事は死、しかし鬼としての生を受けた事で完全な死ではなく。つくづく厄介な生涯になりそうだったが、何故だか悲観する気にはなれなかった。
自嘲するように笑った自分を見て、目の前の鬼が、きょとんしている鬼が・・・・・・怒ったようにこちらを見ている。
怒ったように？　何故。

「おんしは、己の事だけ今は考えんか。私はおまんに生きてほしい言うたじゃろ。抜け殻拾った覚えはなかぞ」
「だから・・・・・言葉を統一しろというのに」
真剣な顔も、これでは笑いを誘っているようにしか見えない。

「伝わっておる。それで充分じゃ」
拗ねたように言ってみせた鬼の顔が子どもっぽくて、また笑いを誘う。
「気持ちの整理をつけているんだ」
何も自暴自棄になって、流れるままに、何もせず生きていこうとしているわけじゃない。
その事を悟ったのか、鬼は黙ってしまった。

「明良は可愛かった。妾腹だろうが、なんといってもたった一人の弟だ。性格もいい、皆から愛された。でも私は愛されなかった。

その事を羨みもした、と思う。けれど明良が憎いわけじゃない。だから藩主を譲る準備を進めてきた。それが早まっただけだ。俺のしてきたことは間違っちゃいない」

「・・・・・・」

「後もう少し待てば、親父殿も手間をかけないですんだのに。短気だなあ」

「恨まんの？」

「恨んで解決するような問題じゃない。ただ心残りが在るとすれば、そうさな・・・・・・明良が傀儡にならなきゃいい。あれは賢い子だ。いい方向に藩を導くだろう」

鬼は眩しいものでも見るかのように、目を細めた。

「おんしはのう・・・・・・無欲なんか、寛大なんか、捨て鉢なんか、冷酷なんか・・・・・・怒っとるのか悲しんどるのかも分からん」

「何も考えてないさ。むしろせいせいしてるよ。これで仕事しなくてよくなる」

「人間は強いの」

「そうだな・・・・・・いや、俺も今は鬼だぞ」

「じゃあ鬼も強い」

「ならお前も強いんだろう」

そう結論付けると、鬼は目をまん丸にして、それから思い切り噴き出した。

ユビキリ　ノ拾弐

知らせを受けたのは、爽やかな朝の事だった。

「・・・・・・今、何と仰られたのです父上。・・・・・・・兄上が、崖から落ちた！？」

「そう言った。つまり今から全権をお前に移すことになる。これからは明良ではなく栄雅と名乗れ」

「そんな――そんなことが・・・」

とても信じられなかった。

兄は強かった。体も心も強かった。よき藩主であるために常に周りに目を配っていたあの兄が、崖から落ちるだろうか。

第一、川本家には全員に影が付けられていたはずだ。

「影は・・・・・・影はいなかったのですか？」

「その影が報告してきたのだ。二人ついていたようだが、一方はあいつを引き上げようとしているところを獣に襲われたらしい。残った方の影が命からがら逃げてきた、と」

「そんな・・・」

起きた出来事があまりに自分の許容量を越えていて、うわ言のように何度も「そんな」と呟くばかり。

嘘であってほしい。

そう思ったが、今の時点で帰ってこない兄は明らかにおかしく、何かあったのだと結論せざるを得なかった。

「でも影は・・・・・・獣に対する術も心得ているはずでしょう

？　もう一人の影は、今如何しているのですか」
「死んだ」
「えっ」
目の前にいる父の眼差しは、いつものような温かみを感じられなかった。
まるで兄と接している時のように、冷え冷えとした目をしている。
「命からがら逃げてきて、事の次第を告げると事切れてしまった。私の元部下で、優秀な奴だったんだがな、残念だ」
物が壊れてしまったような、痛みを感じていない目だった。
しかし、嘘を言っているようには思えない。
栄雅は本当に死んだのだ。
「仕事は山ほどある。悲しむのはせいぜい三日程度にしておけ。それまでに気持ちの整理を付けろ」
明良はふらふらと部屋に戻ると、一杯の熱い茶を運ばせた。
本当なら自棄酒でも飲みたいところだ。ぐいと煽ると、熱い茶が喉を通って、空き腹に染みるのが分かる。
兄は意外と猫舌で、明良が茶を飲んでいる様子を「よくそんな熱い茶が飲めるな」と感心したように眺めながら、茶を冷ましている事がしばしばあった。
「・・・・・・兄上、兄上」
屋敷の中はいつもどおりに機能している。栄雅としての兄がいなくなって一時期支障が出るものの、代わりに自分でも父親でもその仕事をすればいいだけのこと。

民のことをいつも考えていた。自分のことも気遣ってくれた。素晴らしい藩主だったのに。
そんな兄が居なくなったことで、世界が揺るがないのが不思議でならないほどだった。
兄の死を悼み悲しめる人がいないことが、明良を一層悲しくさせる。
妾腹の自分が、誰かの死を共に悲しめるほど親しくしていたのは、やはり兄だったということに気づいて、こらえていた涙が止まらなくなる。
涙が乾くまでには、もう少しだけ時間がかかりそうだった。

「そういえば・・・・・・」

ひとしきり涙を流すと、明良は以前、兄が冗談のように「遺言だ」と渡した手紙の存在を思い出した。
あの時は、これを開くのは何十年後の事だろうかと思ったけれど、兄は自分に何かがあることを予測していたのだろうか。
折りたたまれている紙を開く時間すらもどかしかったが、強張った指はなかなか上手く開けない。
苦労して開いた手紙には、出だしに「明良へ」と書かれていた。

明良へ

お前がこれを開く時、俺は死んでいるか病に伏しているか、いずれにせよ何らかの理由があって、お前に藩主を譲っている事だろう。

良い藩主になれ。

人の意見をよく聞き、それでも決定を人に委ねず、責任をしっかりと負える賢い藩主となれ。
利得ではなく未来と、人の益を見据えて行動しろ。
お前は飾りではなく、人を治めていく器を持った男だ。自信を持てよ。

そこで、過去の俺からの土産として、これを残していく。
同封してある他の紙には、お前の力になってくれるであろう人脈が書いてある。
くれぐれも漏らすな。
これは弟ではなく藩主としてのお前に譲るもので、たとえ父上にも渡すべきではない。
書かれてあるその者たちに、必ず信頼に足る人物である事をお前自らが直に示しに行くように。

あと、こまごまとした仕事があるだろうがあまり背負い込むなよ。
無理やり笑う必要もない。機嫌が悪かったら俺のように仏頂面でいろ。
俺のへそくりの隠し場所も書いてあるから、それは甘味にでも何でも好きに使え。
じゃあ、後を頼む。

兄より

「兄上・・・・・・」

驚く事にもう涙が出る気配はなかった。
初めのほうはそれらしかったというのに、最後の文で台無しだ。全く遺言らしくない。どこか旅に出るから帰るまでよろしく、とでもいうかのような軽い文面である。
これでは幾年かしたらひょっこり帰ってきそうな気配までするではないか。

「後は、お任せください。九代目栄雅、必ずや務めを立派に果たして見せます」

すらりと障子を開けた。
忌々しいほどに澄み切った青空に、笑顔を作ろうとしてふと止める。無理やり笑う必要がない。そう兄の手紙には書いてあったが、自分の笑顔の中には、そんなに不自然さが感じられていたのだろうか。
考えても分からなかったので、とりあえず兄のような仏頂面をしながら庭に出て、兄の好きだった白椿を手に取る。
夕方になるまでそのまま椿を眺めていたが、心配した影に促される頃には、柔和な笑顔が宿っていた。

ユビキリ　ノ番外伊

前の馬がいきなり走り出した。
透影も追って速度をあげながら木々を飛び渡り、時に草むらに隠れながら疾走した。
全く。露草さまは栄雅になって何年経とうともやんちゃな癖が抜けないらしい。
馬が何かに驚いたのをいいことに、制御しようともせず走るがままに任せている。これを機会に共の者たちが追って来れないところまで逃げてやろうとでも思っているのだろう。

とはいえ、透影はそれをたしなめるのは後でもいいかと考え直した。
連日仕事の連続で疲れきっていて、栄雅の目が荒んでいくのを間近で見ていたからである。
息抜きとしてはいいだろうが、一人にしておくのは安全面でも監視の面でもよくないだろう。

栄雅は開けた草原に出ると、なんとそのまま横になってしまった。
馬の世話もきちんとしているし、別に悪いことはないのだが、無防備だとしかいいようがない。
どこかいつも冷めたような目をしている栄雅は、今でこそ表情が出るようになったが、幼い頃は顔に能面を貼り付けたような子どもで、自分の命をまるで飾りのように振る舞う事がよくあった。
幼い頃からの父親と周りの状況がそうさせたのだろうが、今でも彼の心の奥底にはからからに渇いた砂漠のような荒野が広がっているのだろうか。

そこまで考えて透影は何をらしくない事を考えているんだとひっそ

り笑った。
影である自分は主人に対して意見を差し挟むべきではないのだ。
まことの主人、とされている兼良様にも。

そろそろと近づいていくと、栄雅は本格的に寝に入っていた。
この山では熊が出るというし、他にも不穏な噂がある。山賊や盗人が出ないわけではないと知っているだろうに、この人の目に世界はどう映っているのだろう。

「――――ぃ」
「つゆさま？」
「透、影・・・」

ぼんやりと目を開けたが、また目を閉じてしまった。
無理やり起こしても、ついてきたのかと微かに笑って返すだけだろうが、これほどに疲れているのなら、少しだけ寝かせてやってもいいかもしれない。
とりあえず、他の影の者たちに指示を出しに行かなくてはならない。
透影は音もたてず、その場を離れた。

「おい、おいて」
「・・・・・・？」
「死んどるんか。それとも死ぬ気なんか？」

老人だろうか？
見事な白髪のわりには背筋がすっと伸びた男性が栄雅に近づいていた。
殺気はなかったので、透影は止めることなく姿を隠す。

すると、男性は栄雅に手を触れようとはせずに、語りかけた。
怪しい人物ではないだろうか、もしかしたら見知った人物かと、そろそろと位置を変えると、その顔を見た透影は彼らしくなく声をあげそうになった。

――鬼。
『この世のものではないかのような、幻のような美しさだったと。そのように申しておりました』

かつて栄雅にそう報告したのは紛れもない自分で。
ようやく栄雅を見下ろす正体に気づいた。

「俺は死んだのか。それとも今から死ぬのか？」

栄雅の起きぬけの言葉に、鬼は困ったように笑う。
本能で鬼だということを察知していたのかもしれなかった。
けれども透影が判断したとおり、栄雅を取って食うつもりではないようで、和やかに会話を始めてしまった。
一体何を話しているのかは風向きが変わってもう聞こえなかったが、今度栄雅には「知らない人と不用意に関わってはいけない」と、子どものような説教を聞かせなければならないかと真剣に考え始める。

くすくすと笑う鬼に何か言われたのか、栄雅はふと笑った。
そしてなにやら困惑し、拗ねた顔をしてみせる。
ここまで表情豊かな栄雅は久しぶりだった。

それからしばらくして、栄雅はちょこちょこと暇を見つけては、森へと急ぐようになった。

いつでも会えるわけではなく、偶然に会った時に他愛もない話をしては帰りにつくだけで、鬼も栄雅も相手をどうこうしようというわけではないらしい。
最初に会った時も数えて三回目の逢瀬で、栄雅は鬼の住処を尋ねた。今度こちらへ来た時は訪ねてみたいという栄雅の申し出に、気分を害した様子も疑うそぶりも見せずに、道のりを教える。

どこか無用心じゃないだろうか。それとも相手が刀身と共に向かってきても応戦できるだけの自信があるのだろうか。栄雅単体ではなく複数で自分を討伐しに来るとは考えていないのだろうか。
勘繰った透影だったが、栄雅が一人だと思って楽しんでいる休息に自分がついてきていると知られるのも何だか気が引ける。
不審な動きをすればどうにか始末をつけなければならないが、今のところはその素振りもないようなので、気にしないことにした。

鬼の小屋を知り、一回の不在を経てようやく会えたその日は、かなり時間があったようで、日常生活のことやら農産物や穀物の実り具合、はたまた人間の行動予測、発言予想などの一見真面目で中身は無意味な話を喋っていたり、食事をしたり居眠りをしたりと、居心地のいい時間を過ごしたらしい。
しかも感心するべきか呆れるべきかよく分からないが、相手に深く知られない程度を見極める双方の意識が絶妙だった。藩主としての栄雅の愚痴一つとっても、知られてもさして問題にはならない程度、どこかの藩へ漏らされても詳細を知ることは出来ない程度の情報を小出しにしている。けれどそれも、鬼を疑っているとか、まだ来ていないが誰かに利用されるかもしれない状況を気遣ってというわけでもなく、恐らく無意識で。短期間のうちだが、この鬼を内では信頼しているのだろう。

その誠意ともいうべき気持ちが鬼から来たものを受け取って表して

いるのかは推察しきれなかったが、何にせよこの大胆さと寛容さを兼ね備えたこの人は、つくづく藩主の器なのだと再認識させられる。しかし、長く居られると困ったのは透影の方で、外で待っているわけにもいかない透影は忍びの者らしく天井裏に潜んだ。といっても屋敷のものほど立派な家じゃなかったので、隠れ場所にも大層気をつかう。

「こんなに話したのは初めてかもしれないな」
「ほうか？　子どもは何も言わんでも喋るように思っとったけど、違うの」
「幼少の俺は子どもじゃなかった、のかもな」
「ああ、それは何となくじゃが分かる気ぃする。あんまり可愛くなさそうじゃ」

苦笑する双方だったが、透影は反論したい自分に気づいてはっとした。
素直になれなかったのは周りのせいで、栄雅のせいじゃない。
まるで自分の弟か子どものように慈しんでいた頃の日々が懐かしく思えたが、任務に私情を持ち込むのはこれきりだと秘めると、ようやく会話が途切れるのを確認した。

「日も暮れてきたな。そろそろ帰るか」
「そうじゃね、坊やは早う帰らな」
「坊やはやめろ」

会話の中で散々年の違いを話題にしたせいか、いつの間にか栄雅は「坊や」扱いとなっていた。
本当なら敬われるべき人なのに。
嘆息しながら身を潜めていると、栄雅が小屋から出て行く。自分も静かに出て行こうとしたとき――

「さて、もう一人の『悪戯坊主』はどうしたもんかね」

しっかりと鬼の目は、こちらを捉えていた。

ユビキリ　ノ番外呂（前書き）

死亡表現、精神的に痛い表現などが苦手な方はご注意ください。

ユビキリ　ノ番外呂

一瞬にして心臓の鼓動が早くなり、ぴりぴりとしたものが体中を駆け巡った。
気づいていた？　そんなこと、あってはならないのに。
何年来とやってきた忍びの誇りは持ち合わせていたが、これからの栄雅と鬼との関係を考えれば、ここで自分が鬼の機嫌を損ねるような事などあってはいけない気がした。
床に下りると、動作を目で追っていた鬼は余裕の笑みを浮かべる。

「いつもあいつについて来とったじゃろ。守り役かね」
「・・・・・・気づいていたのですか」
「鬼はね、鼻がいいみたいじゃ。獣避けの草の匂いがする」

草の汁を僅かにつけているが、ほとんど無味無臭のはずだ。眠そうな顔をしている鬼を透影が見返すと、全て鬼は承知しているようで「じゃからあんたの手落ちやないよ」とふわりと笑う。

「やはり、貴方は鬼なんですか」
「うん・・・・・・？」
「角もない、牙もない、鋭く尖った爪もない。瞳の色と髪の色以外は、人間と同じだ」
「どうなんかねえ。――――でも、人間じゃない事は確かよ」

不思議そうな顔をした透影に気づくと、鬼はそこで始めて寂しそうな顔を見せた。
「聞いていくかね？」と時間が有るかどうか聞いてくるので、透影は迷わず頷いた。

新たに茶を淹れてくれる。
自分はもてなされる事などない身分で、しかももてなす側は鬼だというのだから、つくづく不思議な光景だと思ったが、案外居心地は悪くなかった。

「気づいたら私は居った。長い事生きているから、記憶もどんどん色褪せていきようけど。やっぱり戦ばかりしている時じゃったの」
鬼はやはり悲しそうに笑った。
言葉を切って、お茶を含んでからこちらを見た。

『本当に聞くか？』
そんな風に問いかけられている気がして、お茶を飲みながら頷き返す。
強く風が吹いて、桟に木の枝でも当たったのか軽い音がしたのを皮切りに、ぽつりぽつりと鬼は語り始めた。

「鬼」と。
いつごろからそう呼ばれだしたかは定かではないが、いつまでも若いままの容姿と、世間離れした長身、頭髪の色、瞳の色が大層目を引いた。
何日か寝なくても、食事を取らなくても元気で、傷を受けても暫くすれば治ってしまう。常人では持ち上げられない岩も軽々と持ち上げられる。熊を素手で倒し、川を割り、火を噴いた。
噂は自分の知らないところで大きく広がり、やがて不老不死だと囁かれ始めた鬼は、人々から恐れられるようになる。
それを避けて、鬼は各地を旅した。
時に山にこもり、時に人里に下りてきた。

人というのもまんざら捨てたものではないようで、やがて理解者も現れた。
共に笑い、涙し、子どもたちと遊んで、大人たちと働いた。
しかしどこかからか噂は広がってしまうので、安住の地はそれこそ百年とはもたない。
知識を蓄えた鬼は薬師となって、琵琶弾きとなって人々を楽しませた。
時には海の向こうへ渡った事もあるらしい。
異国には、鬼と容姿が似ている人々もいて、そこの言葉も遊びも、古いけれどやったことがあるのだと、少しだけはにかみながら教えてくれた。
それでもこの国にとどまっているのは、やはりここが彼の故郷だから、ということなのだろうか。

ある時、人間たちから追いかけられ彷徨ううちに酷い怪我をした事があった。
幾ら不死身かと思える再生力をその身に有していても、その力が追いつかないほどの怪我を負ってしまえば、鬼だとて死ぬこともある。
衰弱し、食べる事すら困難な状況で、一人の子どもが彼を救ったという。
自分の家族には内緒で看病してくれ、話し相手になってくれた。
村で苛められていたせいか、虐げられている者の気持ちを汲み取る優しい子だったと、鬼は懐かしそうに目を細めながら語った。

何年か経って、その子どもが家庭を持った後でも、趣味となった旅を終えてはちょくちょく会い、交流を深めるほど仲が良かったらしい。
しかし、流行り病で家族全員が死に絶え、とうとうその者だけになったとき。
いつかの反対で鬼が看病をしてやっていたが、衰弱のあまりに息も

絶え絶えで、ほとんど意識がない状態にまで陥った。
随分と年の離れたその者は、自分の子どものような存在であり、さらには自分の大切な友人でもあった。

その時、彼はふと思い出したという。
――自分の血を与えると眷族になる。
それは古い書物に書かれた信憑性も怪しい情報だったが、与えた者が呆れるほどの生命力を持っている場合、それは僅かなりとも病を追い払う助けにはならないだろうか。
その時までに、鬼は何十何百の死を見送ってきていた。時には、鬼に安楽死させてくれるように頼む者さえいた。
けれど病にかかったその者が一瞬意識を取り戻したとき、生きたいと願ったらしい。
その者に鬼が思い出したことを伝えると、迷信でもなんでもいい。このまま死ぬのなら、万に一つの可能性にかけて失敗しようが構わない。
そう言い残すと、とうとう目を開けなくなってしまった。

慌てて血を与えて暫くすると、その者の病に侵されて白くなっていた皮膚はどんどんと再生していったという。
頬に赤みが差してきて、伝説は本当だったのだと喜んだ瞬間、悲劇は起きた。
肉は盛り上がり、骨は異常に拡大していった。そして急速に体が壊死していく。
終いには至るところから血を流して絶命したのだと、鬼は静かに語った。
詳しくは語らなかったが、鬼の目にはその様が今でも焼きついているのだろう。
そこで一旦話を切って、鬼がお茶をすすった音が、透影には泣き声に聞こえてならなかった。

「不躾ですが、死のうとは・・・・・・思わなかったのですか？」
「思ったよ」
間髪いれずに答えは返ってきた。
「実行に移した事だって何度もある。けどな・・・・・・いつもいつも、あんたらが邪魔をするんじゃ」
「・・・・・・？」
「人間がな、絶対救ってくれるんよ。手当てして、傍にいて、叱って、励まして、慰めてな・・・・・・そんな奴に必ず出会う。何でじゃろうな、死にかけを拾ったって面白くも何ともないだろうに。ちいとも見返りなんか求めんのよ・・・・・・。何であんたらはそうやって与える事が出来るんじゃろう。本当に敵わんわ」

透影は何もいえなかった。
変わりやすい人の心に絶望している者もいれば、わずかばかりの優しさを糧にして生きている鬼がいる。
どちらも人から虐げられた傷を負っているはずなのに、この差は一体何なのだろう。

「じゃから、いつしか死にたいとは思わなくなったんじゃ」

――人と一緒にいるのが、一番楽しいよ。他には何も望まん。

そうやって笑む鬼のほうが、よっぽど人間らしいと透影は思った。
誰かを信じることの出来ない自分よりも、よっぽど。
暗い深淵に沈んだままの透影に気づいているのかは分からないが、鬼が恥ずかしそうに「お前さんが聞き上手なもんやから、えらく懐かしい話をしてしまった。できれば忘れてくれると嬉しいんじゃけどね」と頼むものだから、透影はとりあえず、「もちろんです」と答えておく。

「だから守り役さん。あんたが」
「透影です」
何故か、この鬼に名前を呼んでもらいたくなった。
人とは違う生をおくる彼の薄緑色の瞳に自分を映してもらいたくなる。
そうしたら、何か違うものが芽生えてくるような気がした。
「へえ。良い名じゃねえ」
噛締めるように頷く鬼に、透影も聞いてみたくなった。
「貴方に、お名前は？」
そう言うと鬼は、ゆっくりと首を振った。
「あん時を境に、呼ぶ人はだあれも居らんよ。もう、捨てたもんじゃ」
「それは、大変失礼しました」
「ええんよ。そんなことより、透影さん。あんたがあいつに、大事な坊ちゃんに近づいてほしくないと望むんやったら、私はもう会わんでもいいと思っとるんよ」
「・・・・・・」
「時折冷えた匂いをさせるけど、透影さんは坊やを大切にしとるんじゃろう？　それくらい分かる。なら、私は前みたいにどこか遠い国へ出かけていっても良い。元々、傍にいたいんは私の我儘じゃ。二度と会わんやったら、あいつもいずれ私のことなんか忘れるじゃろうし」
鬼は判断を仰ぐように間をあけた。
そこから、鬼が本気なのだと悟る事が出来た。
人が好きなゆえに人から離れようとする心まで、何もかも人と変わ

らない。

「確かに、あんなに立派になられましたが、それこそ子どもみたいな存在ですね。けれど・・・・・だからこそ分かるんです。栄雅さまは、貴方と一緒にいらっしゃる時が一番楽しそうだ」

「そうなんかねえ。愚痴ばかり言いよるだけで、何も特別なことは言っちょらんのに」

「愚痴を零されることさえ珍しいのですよ。これからも栄雅さまをよろしくお願い致します」

目を丸くしてみせた後に、「何だか嫁を貰う時の挨拶みたいじゃな」と鬼が冗談めかして言うものだから、その日、透影は何年ぶりかに笑いを抑えることが出来なかった。

ユビキリ　ノ番外波（前書き）

流血、死亡表現、精神的に痛い表現などが苦手な方はご注意ください。

ユビキリ　ノ番外波

「お土産に食べるといい」と渡された包みには栗の渋皮煮が入っていた。
鬼にかかれば誰でも子ども扱いだ、と苦笑しながら帰りの道のりを急ぐ。
あれからすぐに鬼と別れた透影は久しぶりに胸のすくような、清々しい風を味わっていた。頭上では忌々しいほどに晴れ渡った青空が広がり、燦々と輝く太陽がでんと居座っている。

自分が初めて任務をこなしたのもこんな日だった。
初めて血にまみれた日。一生消えない罪を背負った日。
暗鬱な記憶と共にある快晴の日は、無意識のうちに思い出してしまうのか若干不機嫌になるのだが、今だけはそんな気持ちも忍び寄ってこない。
今の自分なら、無茶な任務をやってのけろと言われたってできそうな気がする。もちろん、気がするだけではあるが。

「お呼びで」
「うむ」

今まで会っていた鬼とも栄雅とも違う肌のつや、白髪が幾分混じった頭髪、嗄れ声を響かせる人物は姿形こそ老いてしまった兼良ではあったが、目だけは若い頃のまま、野心に満ちたぎらつく光を放っていた。

「自然に片付けられる機会があれば、いつでもあれに手を下せるようにとは命じていたな、透影」

「実行できず申し訳ありません、なかなか良い状況に出会えませぬゆえ」
「お前ほどの腕を持ってしても、か？　どうだろうな、透影。あやつに情が移ったのではないか？」
実際透影は川本兼良の直属の配下であり、かつて幾人もの政敵を葬ってきた。
技量も経験も人一倍、冷酷さにも定評がある。
しかし、兼良が今回事故死に見せかけて殺すように命じた本妻の息子、栄雅だけは命じてから何ヶ月経ってもぴんぴんしているのだった。

「いえ・・・・・・あの方は、いつも複数の者と共におられますので」
本当に小ざかしい奴だと呟いて舌打ちをした兼良は、数秒考えてから口を開いた。
「まあいい。しかしあいつは近頃、民や名家と緊密な繋がりを作ろうとしているらしいじゃないか。何故知らせなかった？」
「勝手ながら、既にご承知の事かと思っておりました。それに大きな勢力になる気配もございませんようで」
「それはわしが判断することだ」
「・・・これは出すぎたことを。申し訳ございません」
兼良は面白くも何ともないと思っている顔で鼻を鳴らした。
「透影。もうすぐ明良の元服の日が近づいてきている事は知っているな？」
「はっ」
「そろそろ栄雅の座をあの子に継がせてやりたいのだ。そうだな、元服と同時か・・・・・・いや、それよりも少し過ぎたくらいが頃

合いか。明良の元服より一年以内に栄雅を空けるように、いいな？
　果たせぬ場合はお前が亡き者となるだろうよ」
「承知いたしました」

やはりというべきか、この日がやってきてしまった。
此度の命令には、「あくまでも自然に、不審な点を見出されない状況で」という条件がつくのをいいことに、幾ら実行をほのめかされても決行の日を延ばし延ばしにしていたが、兼良はとうとう痺れを切らしたらしい。

逆らう気はなかった。
実行する気はある。いや、やる気云々の前にしなければならない。
でもどこかで足踏みする自分を感じているのだった。
しかし、その場になったらきっと自分は躊躇わずに栄雅の君を手にかけるだろう。心の奥底にはそんな確信があった。

「弓影・・・・・付いてくるなと言ったはずだろう」

ここ暫くの間、途中までは忍びの者たちが栄雅を護衛しており、草原や森など一人になりたいからと栄雅が言って紛れる場所には、栄雅の周りの忍びの頭として透影のみが栄雅の傍についていた。
とはいえ護衛と暗殺任務を兼ねている、複雑な人物ではあったが、ひどい雨で栄雅を見失った時には若干焦りを感じた。

合流地点まで戻って、信頼の置ける者たちを四方に散らせ、栄雅を探させる。
指示を出して透影自身も見当をつけて茂みのほうへと進んでいくと、話し声が微かに聞こえた。

栄雅よりも若い忍びの声が「何を言ってるんですか」と小さく笑う。
憎まれ口を叩いた栄雅の声は力があったので、そこまで絶望的な状況に遭ったのではないようだ。

撤退のしるしを打ち上げたのと同時に、透影は安堵した。
彼の暗殺任務を請け負ってはいたが、栄雅をみすみす死なせるような事はしたくなかったのだ。
彼が死ぬ時は自分自身が手を下す時と同意であり、それ以外の力によって彼の命が失われてしまうような事があってはならない。
それは一見矛盾しているようにみえて、ずっと守ってきた彼の護衛としての役目と新たに下された命令、そして八代目栄雅への敬意の表明だったのである。
けれども後者の方は単なる後付で、本音は自分の矜持のためにそうしたいのではないかとも思っている。
そこまで考えて茂みを抜けた時、一瞬にして思案していた事柄は過ぎ去った。

栄雅は鋭い岩壁から今にも落ちようとしている。
若い忍者の支えを失えば、弓影諸共崖下の濁流に飲み込まれるだろう。ここなら、不審がられることなく八代目を亡き者とすることができる。
心が、すうっと冷えていった。

血まみれの地面など何回も見てきたが、特に赤いような気がした。
目が合った栄雅は、いつものように真っ直ぐこちらを見つめていた。
断罪しているように思えたが、生命力に溢れたあの光も、もうすぐ費える定めなのだ。
頭にしろ手元にしろ血刀をふるえば、すぐに落下していくはずだ。

「一つ聞いてもいいか？」
「何でしょう？」
栄雅はいつもの口調となんら変わらなかった。それがどうにも痛々しさを感じさせる。
「命じたのは、父上か？」
「明良さま、とでも思いましたか？　お察しの通り、兼良様ですよ」
「ならいい」
分からなかった。
何度繰り返されたか知らない裏切りが、今度こそ決定的なものだと嘆息しているわりには、穏やかな表情をしていたからだった。
黙ったままの透影に何を思ったのか、栄雅は微かに口角を上げる。
「疑っていない者が裏切るのは辛い。だが、裏切る可能性があると思っている者から裏切られても、少しも痛くない」
「・・・・・・前者はもしかして私の事ですか」
「他の誰かとでも思ったのか？　察したとおり、お前だ」
「あなたは聡い子どもだった。・・・・・・てっきり私のことも疑っていたと思っておりましたのに」
「初めのうちはな」
信頼されているのだとは思わなかった。いや、あえて気づかないふりをしてきた。
彼は人を慈しむことを思い出させ、信じぬくことは可能だということを否応にでも分からせてくれた。
それは紛れもない、こちらを見上げる彼だったのに。
どうしてこうなってしまったのだろう。
「・・・・・・ッ」

手が痺れてきたらしく、栄雅は苦しそうに顔を顰めた。
屈みこみ、血刀を振り上げる。
目を瞑った栄雅の顔が、幼いころの、「つゆさま」と呼んでいたころの顔と重なって、軌道が狂っていく。

――出逢ったことを後悔した事はない。だから。
あなただけでも、しがらみから解放されますように。

「どうか、安らかにお過ごしください。・・・つゆさま」
「すき、かげ・・・・・・ッ！？」

傷ついた姿を見たくなかった。万に一つの可能性とやらにかけてみたくなった。
年を取ると、ここまで弱くなるものなのだろうか。
自分がわざと地面を崩したせいで谷底へと落ちていく露草の姿を見つめながら、思わず出てしまった懐かしい呼称に驚いたのは何も自分だけではないらしい。

「さようなら」

刻んだ別れの言葉に答えるように返された微笑みに、無理やり笑ってみせる。
そうして濁流に飲み込まれた音を聞く前に、透影は走り出していた。

「鬼さま、いらっしゃいますか？」
「はいよ。ああ、透影さんか。いらっしゃい」

「栄雅さまを、崖から落としました」
「――何て？」
「滝壺をうまく抜けてくれれば、上流に打ち上げられているでしょう。ですから、鬼さま。他の者が見つける前に、迎えに行っていただけないでしょうか？」

鬼は何も言わなかった。
動揺していたが、やがて察したように目を伏せる。

「あんた、寂しい笑みで笑うんじゃなあ。本当にそっくりじゃ、主従揃って。・・・・・・分かった。別に構わんよ」
「ありがとうございます」
「・・・・・・死ぬつもりかね？」

言い当てられた事に不思議と疑問は湧かなかった。長年生きているのだから、多少の事は顔色や雰囲気から察する事が出来るのだろうと推測する。

「お手数をおかけして申し訳ありませんが、申し訳ついでに、傷を付けていただいても？」
「・・・ひどい人やね」
「・・・・・・」
顔を曇らせた鬼に対して、透影は困ったように笑うしか出来なかった。

にわかに屋敷がざわめいた。

「――兼良さま！」
「なんだ、騒々しい」

「お目通りをと申す者が」
「待たせておけ、わしは忙しい」
「・・・・・・影でして、長くはないかと」
「なるほど、心当たりがある。どこにいる？」
「離れの方に寝かせてあります」

兼良が行くと、戸板に血塗れの男が横たわっていた。
弱々しく平伏した後で、人払いがされているのを確かめてからようやく待ち望んでいた一言を告げる。

「崖からか。よくやった。して、他の忍びとお前の怪我はどういうことだ？」
「ひどい雨で見失ってしまいましたので、散り散りになって探しておりましたところ、あの方を助けようとした一人が獣に襲われました。崖から落ちたところを確認した私も獣にやられましてございます。申し訳ございませんが、兼良様・・・・・・外に出ることをお許しください」
「ああ。長い間ご苦労だった」
「勿体無き、お言葉に、ございます・・・」

忍びの体は調べられることがあってはならないので、同胞の者が遺体を回収するか、自分で体の始末をつけなければならない。
最早喋っている事すら奇跡に近い透影は、誰がどう手当てしても助からないのは一目瞭然で、その段階を踏むために爆薬を使う必要があった。

途切れていく意識の中で、走馬灯が駆け巡る。
爆薬に火をつけて仰向けに倒れこんだ透影の、最後の目に映ったのは、雲の切れ間から覗く青空。
何度も何度も呼ぶうちに、いつの間にか嫌いじゃなくなっていた、

澄み切った濃い青だった。

ユビキリ　ノ拾参

『あんたも難儀な人じゃね』
『宿命、のようなものです。私のような、闇を生きる者にとっては』
『闇か。ほうじゃね』
『けれども、鬼さまも栄雅さまも闇とは離れていらっしゃると私は思います。栄雅さまの先の姿を見ることはもう叶いませんが、どうか、お二人ともお幸せに・・・・・・』
『待って。その・・・・・・透影さん。私が前、名を捨てたと言ったのを覚えとる？』
『はい』
『けど、あんたに覚えてほしくなった。――月影。私は昔、そう呼ばれとったんじゃ』
『月影さま』
『うん。・・・・・なんか、久しぶりに呼ばれたら恥ずかしいなあ。有難う、透影さん』
『ではお元気で、月影さま。栄雅さまのことを、よろしくお願いします――』

物悲しい風に髪を弄ばれながら、透影との最後の別れを思い出していた。
あの時何故、彼に名前を教えようと思ったのかは、自分でも分からなかった。潔く散る彼の生き方を羨みでもしたのだろうか。それとも、誰かの中でその名を芽吹かせておきたかったのだろうか。

近隣の村でそれとなく様子を伺ってみると、屋敷の近くで大きな音がしたらしいと噂されていた。
彼の懐から火薬の匂いがしたから、恐らくそれなのだろう。
それならば、無事に屋敷にはたどり着けたのだ。きっと露草の死も公然の秘密となっている。
あの後でひっそりと屋敷を探ってみると、庭の一角で少年がぼんやりと白椿を見つめていた。きっと彼が明良で、これから栄雅になる人物のはずだった。あれならば、いい方向に藩を導くだろうと言った露草の言葉にも頷くことができた。
真珠のような涙の光を思い出していたせいで、落ち葉と枯れ草を踏みしめる音が途切れたことに鬼は気づかなかった。

「鬼・・・・・・か」
「何か言うた？」
「いや、いつまでも鬼というのは味気ないと思ってな」

露草は自由に歩けるようになるまで回復していた。傷は快癒しているし、内臓や骨など体の内部も大分回復されてきている。
そんな中、食料採集に出かけていた露草たちだったが、木の実を拾ったままぼんやりと考え込んでいる様子の露草を見て、鬼は眉を顰めた。

「・・・・・・鬼になったこと、やっぱ後悔して」
「それは違う」
「本当に？」
「誰も恨んでいないと前言ったろう？　それは俺も含めての話だ。後悔したところで何の得にもなりやしない。――俺が言いたかったのは、お前の話だよ」
「私？　ふうん。で、どがあした？」
「・・・・・・すでに口調をどうにかするというのは諦めたんだ

が。お前を呼ぶときに『鬼』だと、俺も同じだから呼びにくいんだ」
「なるほど。とは言ってもなあ、名なんぞありゃせんし」
口調を改めさせる気はとうに費えたと思っていたのに、まだ気になっていたのかと露草の頑固さに苦笑した鬼だったが、確かにどちらも鬼となった今では、なるほど。一方が「露草」という名を持っているだけに呼びにくいというものかもしれない。
なにしろ、ここ何十年も同胞に会った事がない。人間からは「鬼」と呼ばれるだけで判別できるだろうし、自分は目前の男を「露草」と呼ぶことで済ませられるから気にした事はなかったのだ。

「どうせなら、おんしが呼びやすい名前をつけるといい」
「俺が？」
「そう。太郎でもたまでも、何でもええよ」
「・・・・・・美学とか、こだわりというものがないのか」
「え？」
「いや、何でもない・・・」

この鬼はどこか抜けている。
今更な事実にため息をついた露草だったが、気づけばお互いに籠いっぱいに木の実や茸が詰まっていて、とりあえず小屋へと帰ることにした。

香ばしい匂いをさせながら焼けた木の実を手に取り、葉で包んだ鹿の肉を頬張る。
腹が膨れた露草と鬼はめいめい好きなように過ごしていたが、どこから手に入れてきたのか、鬼は外国の本を読み、露草は草紙を読みすすめていた。そんなしんとしている中でも、どこか心細くなるのか、自然と背中合わせになっている事が多く、当たり前のように鬼

が淹れてくれた茶をすすったあとで、露草は鬼の背後でぽんと手を打った。

「思いついた」
「なんじゃ？」
「お前の名前だ」
「へえ？　どんな名前よ」
「白梅」
「花の名前ね」
「お前の白い髪から、『月白』でもいいかとは思ったんだが、けれどどうにも鬼には赤が似合うと思って」
「なるほど？　血の色やね」

梅の花を支えるがくの部分には濃い赤が混じっている。
そう言うと、露草は目に見えて渋い顔をした。

「そうなんだが、残酷だと言いたいわけじゃなくて、目の色も赤になるときがあるし・・・・・・」
ぼそぼそと言い訳する露草が珍しくて鬼は笑みを浮かべたが、むっとした露草に機嫌を直してくれるように頼みながら、礼を言った。

「馬鹿にしてるわけじゃのうて、嬉しいんじゃ。ありがとうな、露草」
「気に入ったのならよかった、白梅」

「しかし、どうにも梅干を食べたくなる名前だな」と真面目くさった露草が言うので、噴き出してしまいそうになるのをこらえながら、名前のお礼にいずれ梅干を漬けてやろうと白梅は心に刻んだ。

ユビキリ　ノ拾肆

「どうせなら、各地を見て回ろうじゃないか」

そう言ったのは白梅だった。
これまでずっとこの土地に住んできた白梅が動こうと言い出すなんて、一体どういう風の吹き回しかと思ったのだが、こうして全国を回ってみれば、自分の気も晴れてくる。
そこでようやく、白梅が旅を持ち出してきた理由が分かった。

「ありがとうな」
「・・・・・・いきなりどうしたんじゃ？　風邪でも引いたか」

本気で額に触って熱を測ろうとする白梅の手を払いながら、「そんなんじゃない」と冷たく返したが、彼は自分が小屋から出て、知っている誰かに見られる事を恐れていると察したのだろう。
鈍いようにみえて、心の機微に敏感な鬼というのは、鬼の中でも珍しいんじゃないだろうか。
しかし、白梅はそれを持ち出す事はなかったし、こちらとしてもそれでいいと思っていた。

「どこに行っても私の白い髪は目立つようじゃな」
「当たり前だ。爺さんならともかく、お前みたいな若者にしか見えない奴が真っ白だったら、もう隠すしかない」
露草がそう冷たく返すと、白梅は不服そうに自分の頭に巻かれた頭巾を恨めしそうに見上げながら、団子を頬張った。

「だから山奥に引っ込んどったんじゃ。でもたまには外に出たくなるから来てみたが。随分ここら辺も変わったねえ」
「年寄りの言い分だな」
「・・・・・・すぐ露草もそう言うようになるて」
「・・・・・・・・・・・・」

――鬼は永遠の時を生きるのか。

それは、露草がずっと抱いていた疑問だった。
白梅は時々、何十年、何百年も生きていたのかと思わせるような口ぶりをする。
何か言いたげな露草の視線を受けて、いつものように白梅は穏やかに笑うばかりで、何も言わなかった。

「お兄さん、寄ってかないかい？」
「は？」

声をかけられて、振り返ると甘い匂いと派手な色彩が飛び込んできた。
たった今、後ろに誰か座ったのは気づいていたが、胸元をくつろげた着物と濃い紅の色からして、夜の仕事をしている女性らしい。
こちらが振り返ると女はゆっくりと首を傾け、僅かに伏せた目に妖しい色を乗せている。

「いや・・・・・・俺は用事があるから」
「じゃあその用事が済んだら、おいでよ。いつでも待ってるからさ」

またね、と片手をそっと胸の上に置かれる。ちらりと上目遣いに露

草を流し見てから、薄っすらと広がってきた夕闇の中へ颯爽と去っていく。自分の魅力を印象付ける事に慣れた仕草だった。

「笑い事じゃないぞ」

「え？　いや、相棒が好かれておるのを見るんは嬉しいよ。良かったなあ」

露草は舌打ちしたくなった。

遊郭と言われる場所で、女が自ら誘うのは珍しいと思っていた。僅かに漏れ聞いた話からではそこでなされる会話や、外には客引きの者たちがいるのだというくらいの知識くらいで、実際に夜の街になど行ったことはない。

何しろ、栄雅だった頃には影がいつも傍に付いていたし、そこまで興味もなかったから、色事とはほとんど無縁といって良いほどなのだ。

誘われるのは悪い気はしないが、どうやって断ればいいのか判断に迷うというのに、この鬼ときたら助けようともせず面白がるような瞳をこちらに向けるだけで、何の役にも立ちやしない。

「何膨れとるんじゃ、別に初めてやないんじゃろ？」

茶化すように聞いてきた白梅が、初めて憎いと思った。

睨みつけてやると、白梅の表情が若干強張る。聞いてはいけなかったことに、今更気づいたようだった。

「まさか誘われるのも初めてか？　っていうことは――」

「・・・・・・」

「・・・りょ、領主やったわりには、修行僧みたいやね」

それだけ言うのが精一杯な白梅だった。

笑顔を作ろうとする白梅だったが、睨み返してくる露草の前ではそれもただ虚しいだけだ。
第一何故こんなところに（とはいっても遊郭の近くというだけで、そこを目的地としているわけではないのだが）二人しているのかといえば、これも白梅が言い出したことだったのだ。
いわゆる情報が集まる場所、ということらしい。

多くの人が立ち寄る場所には様々な流行と今の情勢、いわゆる文化の一端が集められているという。
旅をしたことはないが、聞けば露草も確かにそうかもしれないと思った。
けれど、今になって露草は後悔し始めていた。
その様子に気づいた白梅が取り成すように、すっくと立ち上がって遠くの方を見やる。

「たしかこの先に美味い飯屋があったはずじゃけん、そこまでの辛抱じゃ」

そういえば美味い店がこの辺りに集まっていたはずだと聞いたのも、こちらの方に足を向けようと思った理由の一つだった。
食べ物を意識したせいか妙に腹がすいた気がして、白梅が無理やり変えた話の流れについて行ってもいいか、と露草はようやく重たい腰を上げた。

確かに飯は美味かった。
見目形は露草が栄雅として慣れ親しんだものと比べれば質素ではあったが、口に合う。何しろ白梅と露草二人きりだといつもいつも似通ったようなものばかりになるので、たまには違う食事も有りがたい。

白梅はゆるりゆるりとつまみを口にしては、少しずつ飲んでいく。
けれど肌は白いままで、顔も素面なので酒には強いらしい。
特に目立った会話もないまま、銚子を空にしていく。

時に露草も付き合いながら、心地よい眠気が来るくらいの酒量でとどめておく。やがて勘定を済ませて店を出ると、既に辺りは真っ暗になっていた。
月明かりも今宵は月が雲間に見え隠れしていて心もとない。
灯りで足元を照らしながら歩いていると、大きな花の木に出くわした。
枝垂れ梅が屋敷の外へとのびているらしい。屋敷の中から賑やかな声がしている。

「どうやら梅見をしているようじゃな」
「こんな寒い日に。もの好きもいるものだな」
「私らも人のことは言えんがね」

最もだ。
納得したのか二人顔を見合わせると、まるで少女のようなくすくす笑いに襲われた。
酒のせいだったのかもしれなかった。

「『匂いたつ　夜空に浮かぶ白梅よ
　星と見紛う　憎らしさかな――』」
「呼んだ？」
「詠んだんだ」
「あんたが梅を嫌っとるとは知らんかったわ」
「嫌いなものか。梅花が白いのを詠っているだけだろうが・・・
第一俺が詠んだんじゃないぞ」

「ふうん？　じゃあ誰の歌ね？」
「さあ、誰だったか――」

ふと風が吹いて、梅の香りを攫っていった。
懐かしいような悲しいような、そんな風に気持ちが揺らいだのはやはり酒のせいなのだ、と露草は思うことにしてゆるりゆうるり、白梅と夜道を歩いていった。

ユビキリ　ノ拾伍

白梅は便利だ。
このような言い方をすると、少し自分が非情になったような気もするが、それが正直な感想だった。
元流行、ではあってもその地方、その国の文化や常識を知っているし、言葉もある程度通じる。
白梅の人間離れ、というか日本人離れした長身と柔らかな物腰は、外国でのいわゆる紳士に繋がるものがあるのだと、露草はようやく分かった。
巧みな話術と、豊かな表情。何より優しく微笑んで小首を傾げれば女性の顔が薄っすら染まるのを、露草は何回見たことだろう。

「あら。お連れの方はどうされたんですか？」
「ああ・・・・・今日は別行動で。たしか探している本があるのだとか」
「そうなんですか、それは良かった」

良かった？
その台詞に首をかしげた露草だったが、すぐに失言に気づいた女性は慌てて首を振った。
店に通ううちに、看板娘と思われる女性と顔なじみになっていた二人だったが、そんなに慌てている様子を見るのは初めてだった。

「ち、違いますよ！　そんな、あの方はあの方でとても素敵な方ですけど・・・・・・！　いえ、何を言っているのやら。そうではなくて、丁度美味しいお菓子が手に入ったので、よろしかったら食

べられませんか？　お二人で食べるにはちょっと量が少なかったので・・・」
「いいのですか？　・・・・・・こんなに高そうな」
値段の事しかいえないのが歯がゆかった。もっと気の利いた台詞をいえないものか。
しかし女性はそんな露草の気持ちさえ分かっているように、良いんですと笑顔を見せた。

「遅かったな」
「ええ本を見つけたんじゃけどね。思ったより高かったから、買おうか買うまいか悩んでしもうて。お？　何じゃその包み」
しまった、と露草は思った。
二人で食べるには量が足りない、と言われていたのだからさっさと食べて、証拠隠滅しておくべきだっただろうか。

「女性からの贈り物かね。隅におけんのー、まあそれも分からんでもないわ。色男じゃからねえ」
「嫌味か？」
柔和な顔立ち、すらりとした体躯。
どこをどう取っても美形といえる白梅に言われると、どうにもそうとしか思えない。
しかし白梅は真面目な顔で、というか真剣さをだそうとしている顔で「まさか」と言う。
それがどうにも含みを感じて睨んでやると、白梅は我慢しきれなくなったらしい。

「私よりも露草の方が人気やないの」
「それがどうも納得いかない」
欧米諸国の中、日本人というのは黄色い猿、のように蔑視されているものだと思っていた。
それが少数派なのかもしれないが、どうにも周りの自分を見る目は違うのだった。
日本人の中では長身の部類に入る露草だったが、外国に来れば平均身長か、限界の線をいっているくらいだ。
性格も白梅のように人に好かれるような愛想が良いほうではない。
なのに。
どこか寄せられる視線が熱い、ような。
女性からは白梅との人気を二分しながら囁かれ、男性からの握手を求められて返せば、どこか握られる手が痛い。
礼儀作法で間違った事をしてしまったか、はたまた白梅と共にいることの嫉妬か、などと考えてみたが、どうも的を外れているらしい。
流石に男性から思いを伝えられる事は皆無だったが、どうにも憧れのような熱い視線と、気のいい友人が増えていくというのは明らかに前と違う反応だった。
「多分、日本人が珍しいからと思うけど」
「一時的なものだろうな。しかし落ち着かない」
「いずれ慣れるて」
洒落た店で茶を飲んでいる姿は英吉利や仏蘭西の風景にでも溶け込んでしまうような男なのに、この日本の爺みたいな口調はどうにかならないものだろうか。
二人でいるときは日本語で会話するのだが、その度に何度思ったかしれなかった。

「英語にも大分慣れてきたみたいじゃけぇ、また違う国に行ってみるかね？」
「・・・お前には放浪癖があるみたいだな」
「楽しいじゃろ？」

折角この土地に慣れてきたところだったのに、と少々寂しく感じつつも「まあな」と返す。
ちょっと眠たそうな顔をしながら、白梅は露草の返事に少しだけ得意げな笑みを浮かべた。

ユビキリ　ノ拾陸

「日本にくると変な感じがする」

それは正直な気持ちだった。
今まで色とりどりの屋根、髪、視点も違う箇所からいきなり引き戻されたような感覚を覚える。

「たまにはいいじゃろ。この機会に日本縦断でもしてみるとかいいかもしれん」
「亜米利加や露西亜なら横断縦断が分かるが・・・・・・日本は縦断なのか？」
「は？」
「いや、何でもない・・・・・」
「まあええわ。どうせなら美味しいもん、食べ行こう。『腹が減っては戦が出来ぬ』言うし」
「別に戦をするわけじゃあるまいし」
「ぶつぶつ言うとらんで、ほら」

ほら、の後で手を差し出してくる白梅を見て、露草は顔を覆いたくなった。
やはり白梅は天然なのだ。
それもたちの悪い無自覚な天然で、人好きというか女性受けする人種の一人だ。
何十年も生きているのだから、人一倍寛容で優しく、忍耐強くはある。しかし、それを払拭してしまうほどの幼さが彼には混在しているのだった。

寄せられる好意には驚くほど鈍感。けれど食欲には忠実で、決まった時間になると腹の虫を響かせる。まあ、腹の虫は本人の意思とは関係ないとは思うのだが。
女性を導くようにして手を差し出すこの性格はどうにかならないものだろうか。

「ここは日本だ。第一、必要ない」
「あ、ああ・・・・・・すまんねぇ。つい癖で」

癖！
既に習慣付いているとは、恐るべき鬼だ。
というか、本当にこれが鬼の有るべき姿なのか。いや、目の前で動物を生のまま食べられても確かに困るが・・・・・・。
自分は棚に上げつつ、露草は内心でどこかがっかりしたような、やるせない気持ちを抱えて歩を進めた。

「・・・・・いやー、困ったねえ」
「どれだけうっかりすれば気が済むんだ」

小言を言いたくはない。ないが、この計画性のなさも問題ではある。事実日本の金がないせいで飯にすら有りつけない。港についてからというもの、一日中水しか腹に入れていなかった。
その責任は露草にも確かにあるのだが、金は基本的に二人それぞれが持っていて、旅費と着物代を露草の懐から出したせいで、文字通りの一文無しなのだ。

食費は今のところ白梅が持っているはずだが、日本の金などここ暫く見たこともなかった。
銀子などなく外国の硬貨が虚しく場を賑やかすばかりである。どこ

かの好事家が珍しがって買うことや、もしくは貿易商なら両替を頼む事も出来るかもしれないが、流石に普通の民家や飲み屋が立ち並ぶこの界隈では無理だろう。

「仕方ない。野宿でもするか？」

「ここらは治安がどうなっとるかまだ分からんけえ、即決は避けといたほうがええよ」

「山暮らしをしていたんだから、山では駄目か？」

白梅は困ったように笑いながら、「あれは小屋があったけえ、山に住んでても普通に暮らせたんじゃけど。今の暗さじゃ見つけにくいがね」と言う。

考えてみれば、なるべく外国でも野宿は避けていた。鬼とはいえ避けていた方が問題が少なくていいらしい。

つくづく自分は旅をしなれていないのだと、思い知る。だからこそ白梅に頼っていたのだが、肝心の彼が日本の金を忘れたのであれば、もうどうしようもない。どうにかして誰かの家に泊めてもらう手もあるが、見知らぬ男を二人も泊めようという物好きは滅多にいないだろう。

「腹が減った」

「ほんまじゃね。・・・ええ匂いがまた沁みるなあ」

白梅は腹をさすってみたが、それで膨れるはずもない。刺激されたせいなのか、また鳴きはじめた。

「腹の虫が煩くて今夜は眠れんかもなあ。歩いてみる？　用心棒の仕事とかあるかもしれんし。最悪、川べりの草でも食べてとりあえず寝る場所確保せんとね」

「そうするしかないだろうな」

はたから見れば転落人生、とも言えるのだろう。

しかし、露草は不思議と不幸とは思わず、この生活を楽しんでさえいた。
餓死を覚悟しそうなほどに飢えたことは滅多にないし、白梅は最悪な状況を楽観させる雰囲気を纏っているので、自分もどこか感化されてきたように思えるのだ。それが良いことか悪いかは、まだ分からずじまいだ。

何度目かに二人の腹の虫が合唱した時だった。
たまたま通り過ぎようとしていた男が何事かと思ったのか、くるりと振り返った。

ユビキリ　ノ拾漆

「おい、あんたたち」
「うん？」
「何か？」

腹を鳴らしながら『何か』もないもんだ。
白梅は思わず笑いたくなったが、そうすると露草はますます仏頂面になってしまうだろう。

抑えて、白梅は声をかけてきた男を見た。
二人よりも背が低い男だったが、日に焼けてがっしりとした体は見た目からして健康そうで、傍目には自分たちよりも力強そうだ。散切り頭の白梅に総髪姿の露草が珍しいらしく、僅かに目を丸くしたが、やがて邪気のない笑顔を浮かべた。

「あんたら、腹減ってんだろ？　これでも食べるか？」
男が差し出したのは握り飯をくるんだ包みだった。
「でも、お前さんの夕飯じゃないんね？　そんな大事なもん、食べられんよ」
「問題ない。実は仕事の合間に食べるよう持たされた弁当なんだが、今日は店に寄ってしまってな。夕飯の前に食べてしまおうと思っていたところで。・・・・・・食べてくれたほうが都合がいいんだ」

よく見れば着物も仕立てがいいもので、恐らく裕福な商家の出なのだろう。刀を差せば武士にも見れるような、立派な体躯をしていた。
ということは、飯にありつけずに困っているのではないのだから、

貰っても構わないだろう。

「ほうか？　じゃあ有難く・・・」

「おい」

元藩主としての矜持が邪魔をするのか、露草は眉を顰めたが、男は人の良い笑顔で露草の手に持たせた。

「困った時はお互い様だ。今度俺が腹を空かしてたら助けてくれ。じゃあな」

急いでいたのか、露草に突っ返されるのを回避したのか、走っていってしまう。

「行ってしまった・・・・・・」

「もう返せんし、勿体無いから食べようか」

「・・・そうだな」

川べりに腰を下ろしながら月に照らされた散ってしまう梅の花吹雪を眺め、腹の虫を黙らせると余裕も出てきたようで、どうせならこの辺りを散歩がてら寝る場所を探してみようということになった。障子から漏れる灯りが揺れて、家々が立ち並ぶ道までもが揺れて見える。

時折吹く寒い風に吹かれていると、どこかで一杯といきたいところではあるが、如何せん金が無い。寒い懐をさすりながらふらふらと歩いていると、一軒の飲み屋から転がるようにして男が千鳥足で歩いてきた。

「ほいっとにぃ、やあってらんねぇよなあ、畜生・・・・・・！　お良よおぉ、俺ァもう駄目だようぃッ――」

呂律が回っていないその男は、上掛けも羽織らずくるくると回って、

道に蹲ってしまった。座り込んだまま、ぶつぶつと何か言ったかと思うと、今度は涙を零し初めてしまう。

「うっ、ううっ・・・りょーうぅ・・・・・・ぐずっ」
「・・・何だあれは」
「酔っ払いじゃね」
「お兄さん、どうされたね」
「お、知り合いが来たみたいじゃ」
「放っといてくれよぅ――」
「ありゃ、知り合いと違うとったんか」
「泣き崩れて眠ったな」
「お兄さん、お兄さん・・・寝ちゃったか。んじゃ、ちょっくら失敬して、っと」
「ちょっと待った！」

突然の大声に、酔っ払った男を介抱するふりをして財布を抜き取った男だけでなく、白梅も飛び上がるほどに驚いた。
けれど酔っ払った男は動かずに、眠りに入ったままでううと唸る。

「そこの！　意気消沈しているものから盗みを働くとは何事か！財布を置いてさっさと去れ！」
「ちっ！」

くすねたまま逃げ出そうとした男だったが、すぐさま追いついた露草が足をかけて転ばせ、腕を捻り上げる。
男が悲鳴を上げながら財布を取り出すと、冷ややかな目をした露草はちらりと視線を道の先へと向ける。その意味に気づいたのか、悔しそうな顔をして男は走り去っていった。

「いやあ、お見事お見事。腕は衰えてないってことやねぇ」

「お前こそ弱くないくせに。ちっとも動かないのは最早怠惰としかいいようがないな」
「私はまだまだよ。身を守れる程度位で丁度ええじゃろ」
白梅はへらりと笑った。
別に自分だって目の前にある全てを救えるとは思っていないが、これくらいなら動いたっていいはずだ。白梅は鬼として生きてきたせいなのかどこかひねているような、人を食ったような、どこか敬遠しているような、よく分からない雰囲気を纏わせるのだ。傷ついているのか望むのを諦めたのかは知らないが、何かが欠けているようにも思えた。

とはいえ、自分がどうこうできる領域にあるとも思わない。
人のことは傍観するくらいで、結局は自分が出来る範囲で動くしかないのだ。

「おいっ、お前。起きろ！」
「んー・・・りょぉお」
「私はリョウではな・・・うぁっ！」

頬にいきなり贈られた温かさが、いいようのない不快感を生み、一気に鳥肌が立つ。
白梅は固まってしまった肩へ、慰めるように手を置いてみた。

「・・・大丈夫？」
「・・・・・・起きてくれ。頼むから」

項垂れた露草の顔は、今にも泣き出しそうに見えた。

ユビキリ　ノ拾捌

「いやー、それでわざわざ届けにきてくださったんですか。これはすみませんねえ」

にこやかに微笑みながら頭を下げる目の前の男は、酔いつぶれてしまった男の兄なのだという。

目の辺りに笑い皺ができており、人がよさそうな雰囲気を感じられる。顔の形は違うものの、どことなく間延びしたようで尚且つ眠たそうな雰囲気だけは、自分の隣にいる白髪の男と似たところがあるかもしれない、と露草は頭の隅でぼんやりと考えていた。

「ほら、清治郎。しゃんと立ってお礼言わんね。この方たちがここまで連れてきてくださったんよ。・・・せいじ！」

「・・・せーち、五月蝿い。寝かしてぇ」

むにゃ、と目を擦った弟の姿を見て肩を落とした姿は、とてつもなく疲れて見えた。しかしそこには、父性のような物も感じられる。

「申し訳ありません。ちょっと悪酔いしてるみたいでして」

「いえ、気にすることはありません。こちらもたまたま通りがかっただけですので」

「しかし、何や辛い事でもあったんですかねえ。自棄酒でも飲んどったみたいでしたから」

「・・・そうですか。ちょっとこいつもいろいろ複雑で・・・」

「清一郎」

「父上」

奥から出てきたのは清一郎と呼ばれた目の前の男よりも老成した男だった。探るような目を隠そうともしていない。

「・・・はて、どなただったかな？」

「お初にお目にかかります。夜分遅くに申し訳ありません」

「そう、ですか？　おや、それでは何故」

「清治郎が飲み屋で前後不覚に陥っているところをこの方たちが助けてくださったとか。全く、情けないことこの上ない」

「清治郎！　しゃんと立たんか！」

「ひえ！　ち、父上！」

言っていることは親も兄も同じなのだが、やはり前者の方が威力が数段違うらしい。清治郎と呼ばれた男は、今までの泥酔が嘘のように背筋を伸ばして、走り去って行った。

「待て、清治郎！」

「あーあ、だめだありゃ。父上、あいつ完璧に寝ぼけてますよ」

「らしいな。お客人、聞けばあれの恩人でもあるらしい。どうですか、一晩だけでも泊まっていかれませんか？　無駄に屋敷だけは広いですから、部屋だけは余っております。まあ、料理のほうは、いまいちですがな」

「母上に叱られますよ」

「構わん。聞いていないのだからな」

「はあ・・・あ、失礼しました。私は花咲清一郎と申します」

「同じく、花咲塔十郎と申しまして、この子達の父親です」

「私は、川・・・河野露草と申します」

「私は河野白梅いいます。以後お見知りおきを」

「おや、ご兄弟ですか？」

「そんなところです」

咄嗟に川本の姓を名乗りそうになったが、幾らなんでもそれはまずい気がして咄嗟に河野に改名する。白梅に苗字なんてものがあるのかは疑問だが、何も同じ名字にしなくてもよかろうに。
ちらりと横目で見やると、白梅はにやりと笑い返した。

「渡りに船、って感じやね。料理に期待せんでみたいに言われとったけど、別に麦の冷汁とかでも今の私らには有難いし」
「寝る場所を与えてもらえただけでも確かに有難い。しかしさっきの弟君、お兄さんが言うには事情があるみたいなことを言っていたが、一体如何したのだろうな。落ち込みようが半端じゃなかったが」
「まあねえ。男がむせび泣くって言ったら親友の死か、職で失敗したか、もしくは女と相場が決まってるらしいけど」

「・・・さすがに鋭いですねえ。すいません、立ち聞きするつもりやなかったんです。今の白梅さんの台詞しか聞いとりません。お夜食になりますけど、軽めのもんを用意させていただきましたんで、食べはります？」
「ありがとうございます」
「どうせなら差し支えなかったら私らに弟さんの話、聞かせてもらってもええですか？」
「は・・・」
「いえ、そんなお家騒動とかややこしい問題やなかったら、他人に話すと楽なるかもしれん思いまして。言えんような話やったらさっぱりと忘れてください」
しばらくぱちぱちと瞬きを繰り返していた清一郎だったが、やがて人がよさそうな顔をさらに目じりを深くさせて頷いた。

「まあ、飯の種程度にはなりますかねえ」

ユビキリ　ノ拾玖

え、私も戴いていいんですか？
酒があったほうが話がしやすいだろうって？
いえ、まあ・・・そのとおりですけどね。ではお言葉に甘えて頂戴します。

まあそんな古い歴史やないとは思うんですけど、ちょっと昔からこの土地にはご存知の花咲家と、栗町家いう二つの家がありましてね。もう一つは同じ通りにある、隣の家なんです。

やけどここの家は、ご覧にならはったら分かる思いますが襤褸でしてねえ。一応武士階級なんですが、無駄に広い土地が立派なように見せてるだけで、暮らしはほとんど庶民と変わりません。
あっ、しまった。だ、大丈夫ですよ。お客さんを泊めて、一家迷わないくらいの生活はしとりますから、気になさらないでください。
いや、本当ですから。

そんでこの「咲き屋敷」・・・・・はあ、そうなんです。庭に花の咲く木ばっかり植えておりまして、花盛りには大したもんですよ。名前にもちなんで咲き屋敷なんて呼ばれておりますが、女子といえば母と下女くらいしかおりませんから、完全に名前負けですわ。

ああ、話がそれてもうた。
清治郎の話でしたね。なんで咲き屋敷と食べ屋敷の話をしたかいいますと。
え？　そうそう、栗町家は「食べ屋敷」言われとります。名前が栗

でしょ。して、実のなる木ばっかり植えとりますからねえ。桃とか梅とか杏とか。栗とか椎とか団栗もやったかな？　いや、すごいもんですよ。飢饉の時には皆期待してるわ、冗談めかして言うとります。

当家は野菜と芋くらいしか植えとりません。田んぼもねえ、家族分の米と麦くらいで。もうちっと何とかせなあかんかなあ。

ええと・・・ほんまに私、気を抜くと話それますね。

で、その食べ屋敷に住む栗町家とはですね。家が隣同士っちゅうこともあって、私含め子どもらは幼馴染なんですよ。

こっちはむさくるしい男ばっかりですけど、あっちは私と同じくらいの長男と、十くらい歳の離れた妹さんがおるんです。お良さんいいましてな。

可愛い子ですよ。気が利いて明るいし、頭もいい。少し気が強くて口やかましいのが玉に瑕ですが、商人の娘としては立派なもんです。

「なるほど、それが弟さんの言ってらした娘さん」

「そうなんです。しかし娘というには少々年を取りすぎておりまして、行き遅れなんて囁いている者たちもいますがね。家族もやかましく見合いを勧めていたようですがなかなか首を縦にふらんらしくて。・・・ですが」

白梅が僅かに微笑をたたえたまま首を傾げると、清一郎は一瞬曇らせた顔を上げて再度話し始める。

「近しい者たちからするとね。どうにも好いた人がおるんやないかな思うんです」

「心に決めた人意外とは添い遂げない。芯の通った娘さんだ」

「確かにねえ。ほんで、弟の話に戻りますが。清治郎もどこから

も嫁さん貰うてないんです」
「・・・・・・？」
不思議そうな露草の視線を受け、清一郎は僅かに頬を染めながら手を振った。
「ああ。私はここん家の相続権放棄しとりましてね。蘭法医を志してる親不孝者ですわ。そんで清治郎が正式にはここの跡取りですから、どっかの家に婿養子に行くなんてこともないんですけど。私も弟もずっと勉学と剣術に打ち込むばかりで、こんな年になってしまいまして」
「清一郎さんは蘭学に打ち込んでなさるから一人身。けれど弟さんは剣術だけが理由じゃなさそうですねえ」
「お察しの通り。ここまで一人寂しくいるんはお良さんに惚れておるからやないか、とこういう次第で。いや、お恥ずかしいかぎりです。露草さんには迷惑かけて、ほんますいませんでした」
「いえ、私は構いませんが。お二人・・・ではない。お良さんの気持ちはいまだ明るみにはなっていないのですから。清治郎さんは随分と奥手なのですね？　それとも身分の差などが問題なのですか？」
士農工商、からいえば武士ならある程度の自由は許されるはずだ。農民と共になりたいというのなら周囲からの反対もあるだろうが、商人の娘、しかも名字帯刀の大店の娘とあらば不足はないだろう。それは分かっている、といった様子で清一郎も頷いた。
「咲き屋敷と食べ屋敷。一見対になってて、えらく整ってるように見えますけど、実は犬猿の仲でしてね。なんや先祖の禍根が未だに根付いとるらしくて。親父たちがそれを聞いたら憤死しそうなほどですわ」

「さきほどの、塔十郎さんもそうなのですか？　・・・寛容な父君だと拝見しましたが」
「それはもちろん。あ、寛容に関しても・・・まあ、もちろんなんですが。食べ屋敷の噂を聞くだけで眉を顰めてその場から立ち去ってしまい、顔をあわせれば毒づきあいの連続です。とてもじゃないですけど、栗町の娘さんを好いてる素振りなんか見せたら、怒り狂うでしょうね」
「けど、ご兄弟揃って食べ屋敷のお良さんと、そのお兄さんとも仲良いんですねえ？　どっかで聞いたねえ、こんな話」
「・・・・・・？　ああ、敵対する家同士の恋人たちか？　そうだな、ろめおかろくろがどうとかいう話だったか」
「あれ悲劇やったもんねえ。全然参考にならんし」
ううむ、と口をへの字に曲げて唸り始めた二人を見、慌てて清一郎は立ち上がった。

「すいません、悩ませてしまったみたいで。別にお気になさらないで下さい。二人とも大人なんですから、良い人が見つかれば結婚するでしょうし、納得できなければできないでどうにか生きていく子たちです。それよりお膳、下げさせますね。長話聞いてもらって有難うございます。私まで酒戴いてしもうて、ちょっと喋りすぎたみたいですね。どうぞ今宵だけの話に留めておいてください。あとで布団も整えますので、ごゆっくり」
ぱたんと障子を閉めた後、きしきしと廊下を歩いていく足音が段々小さくなっていく。

「一宿一飯のお礼に縁結び、なんていきたいとこやけどね」
「無理だろう。せいぜい両家の仲を悪化させて終るのが落ちだ」

「かもしれんね。・・・けど、先祖の禍根で犬猿の仲・・・って、何なんじゃろ？」

同じ方向に揃って首をかしげた自分と白梅の行動を見て、やはり感化されてきているのだと、どこかくすぐったい気持ちのまま、露草は床についた。

どこかでさわさわと、竹の葉のなる音が聞こえたような気がした。

ユビキリ　ノ弐拾

「桜の海、桜の雲って感じじゃね・・・・・・」
「幻想的な風景ではあるな」

花咲の屋敷の一角には大きな桜の木があった。
いつだったか通りを通っていた時、梅見に興じていたのはもしかしたらこんな家だったのかもしれない。
今宵は桜を見て酒でも飲もうかと家族総出で花見のための準備に取り掛かっている。
ばたばたしている屋敷の外、塀ごしに桜を見ていると、横からすまなさそうな声をかけられた。

「煩くてすいません。年がら年中何かしら花は咲いておるんですが、『愛でてこそ花』というのが家訓というか、習慣になっておりまして」

口元を緩ませ、いかにも人の良さを顔中で表現している清一郎はさらに目元を下げた。

「団子とお茶、質素では有りますが寿司と酒も用意する予定です。今夜、まだお時間があるようでしたら楽しんでいかれてください」
「ありがとうございます。いや、泊めてもろうたうえに朝ご飯まで頂いて。かえって気ぃ遣わせたんと違いますか？　」
「まさか。人数が多い方が楽しいですからねえ」
「せー・・・・・・じゃない、兄上。その方たちが、昨夜の？」

揃って振り向くと、幾らか緊張した面持ちの男がこちらをちらちらと横目で見ながら、清一郎を見返した。
少し呆れを交えながら、清一郎はゆっくり頷く。

「そう。河野白梅さんに、河野露草さん」
「どうも」
「・・・・・・」

紹介された順に挨拶し、礼を返すと、清治郎は針金でも入っているのかというほどにぴしりと背筋を伸ばしながら一礼した。

「昨夜は醜態を晒していたにもかかわらず、助けてくださり有難うございました！」
「い、いえ・・・」
「暖かったし。酒もようすすむ日やったからねえ」

へら、と笑った白梅の言葉に、嫌味に聞こえるんじゃないかと密かに危惧した露草だったが、清治郎は気にしたそぶりは見せなかった。

「いえ、自分は銚子二本くらいしか飲んでないんです」
「え？」
「こいつは相当な下戸でして。少し飲んだだけですぐ顔が赤くなるんですよ」
「お兄さんは？」
「私はそれに輪をかけて酒に弱いです」
「けどお酒は好きなのよね、家族揃って」
「お良！」

琥珀色の洒落た簪を髪に挿し、浅葱色の着物を着こなした娘が興味津々といった様子でこちらを見つめていた。

ユビキリ　ノ弐拾壱

「まあ、清ちゃんたちのお客さま？　お侍さんと、やっぱりそちらもお武家さん？」

町人にしては鋭い雰囲気を持ち、商人にしてはのほほんとした雰囲気を持っている二人が珍しいのか、繁々と観察していたが、やがてはっとしたようにすいませんと囁いた。

「お良ちゃん？」

「じろじろ見てしまって・・・またはしたないなんて怒られちゃう。お武家様方、あいすみません」

「お気になさらず」

「散切り頭に総髪の二人組なんて珍しかろう。気のすむまで見て構わんよ」

見た目以上に真面目で寛容な二人にますます興味を弾かれたのか、お良は目を輝かせる。

「お武家様はどこの出でいらっしゃるんです？　私はここから出たことがないから、なんだか新鮮だわ」

「そうじゃねえ。色んなとこをまわっておったから、もうどこの言葉かよう分からんくなってしもて」

「へえ！　じゃあ、港町なんかも行ったことが？　海の向こうの人を見たこともあるの？」

「見たことも喋ったこともあるなあ。他の国に行ったこともあるし」

「すごいすごい！　もしかして、お武家様じゃなくて先生なの？

ややわぁ、頭悪いのがばれてしまうし。あ、でも清ちゃんおるからちょっと安心や」

どういう意味や、と顔をしかめて見せた清治郎に、そういう意味やと返すお良の掛け合いには、年季を感じる親しみが見え隠れしていた。

「けどこんな凄い人たちと知り合いなんて全然知らなかったわ。清兄さんも清ちゃんも教えてくれんかったし。出し惜しみしとったん？」

じろりと横目で睨みながら、拗ねてみせたお良に慌てた清治郎とは反対に、清一郎は困ったように笑みを返した。

「昨日知りあったんよ。つぶれたせーじを送ってくださってね、昨夜からうちに泊まって・・・」

「せーち！」

遮るように叫んだ清治郎を少し目を丸くしながら見つめると、お良は大人びた笑みを浮かべた。

「なあに、またお酒でひっくり返ったの？」

僅かに頬を赤くしながら俯いた男の顔から正解を読み取ったらしく、ほどほどにしなさいね、と窘めるように釘をさすのを忘れない。

「清ちゃん相手にしてる場合じゃなかったわ、そういえば。これね、兄さんがそろそろ花見する頃だろうから、こっそり持っていけって」

「これはすまんねえ。お客人もいるし、なんやええ酒買ってこよう思てたんやけど」

「丁度よかったみたいね。・・・ええと、名乗るのを忘れてまして失礼いたしました。わたくし、栗町良と申します」
「どうもご丁寧に。私は河野露草と申します」
「私は河野白梅いいます」

にこりと白梅が笑うと、お良も笑いかえす。しかし、頬を染めてはいなかった。
ちらりと清治郎を見た後で、また清ちゃんがひっくり返らないように見てあげてくださいね、と悪戯めいた笑みを浮かべたお良は、清治郎に噛みつかれる前に「ほんとの事やないの」とぴしりと黙らせた。

「えらいしっかりして、可愛い娘さんやねえ。清治郎さんが惚れるのも分からんでもないわ」
「・・・・・・ッ！」

爆発しそうな勢いで顔を真っ赤にさせた男女を見た後、ぴったり同じ仕草で顔を青くした兄と弟を見ていた露草は、同じく隣でその様子を眺め、爆弾を落としてくれた白梅を蹴飛ばしてやりたくなった。

ユビキリ　ノ弐拾弐

「そんな、せ、清ちゃんがほほ惚れっ、惚れるわけ、ないですよっ」
「そ、そそそうですよ、白梅さん。往来で何堂々と暴露してはるんですか」
「暴露やないでしょ、清兄ちゃん！」
「あ、ああ。ごめんね。そやった、そやったね」

息の合った慌てぶりに、思わず清一郎とお良のほうが恋仲にあるんじゃないのかと疑いそうになったが、その疑念を遮るように、清治郎は意を決したように顔を上げた。

「いや・・・俺は、お良に惚れとる」
「「はぁ！？」」

またもや息の合った問い返しに一瞬怯んだ清治郎だったが、顔を赤くしながらお良に詰め寄った。
爪が皮膚に食い込むほど握り拳をつくりながら、
「夫婦になってくれ」
清治郎がそう言った瞬間に、その場の時間が止まってしまったかにさえ思えた。

「あ痛た、何するんじゃ」
「何するはこっちの台詞だ。状況を悪化させるって言わなかったか？」
「あの様子じゃ、好いておるんは二人とも同じやろ。なのに遠慮

して今まで進展せんかったんじゃ。なら荒療治も必要や思て」
のほほんと構えているように見える白梅だったが、奥底では常に無数の気持ちを推し量っているのかもしれない。
「・・・そうかもしれないが」
言葉に詰まってしまった露草を見ながら、茶化すように白梅は語尾を上げた。
「でも本音言うと。ただ面白いかな思うただけなんやけどね？」
「白梅・・・お前な」
三人の中でようやく緊張から解けたのはお良だった。
「嬉しい・・・」
「ええ！？」
勢いとはいえ、自分から告白しておきながら、清治郎は飛び上がりそうなほどに目を丸くする。
「じゃ、じゃあ・・・」
「うん、私も清ちゃんが・・・・・・好き、かも」
「『かも』ってなんだよ、『かも』って！？」
「だって、いきなりなんだもの！」
見てるこっちが恥ずかしくなりそうなやり取りは、もはや痴話喧嘩にしか聞こえなかった。

ユビキリ　ノ弐拾参

「お良、父上がどこで道草を食ってるんだとそろそろ言い始める頃・・・おや、あんたたちは」
「あれ？　昨夜はありがとうございました」
「馳走になりました」
「いやいや、腹のほうは大丈夫でしたか？　作ったのが何せ、こいつだから・・・って。何やってんだい、お良も清治郎も二人して。えらい顔が真っ赤だね？　とうとう告白でもしたか？」

隣の屋敷から出てきたのは、昨夜握り飯を譲ってくれたあの男だった。
日に焼けた顔を笑みの形に形作ると、二人の顔を覗き込む。笑んだ顔で細められる目が人懐こそうな柔らかい光を放っていた。

「隆！」
「お兄ちゃん！」
「え？」
「隆ちゃん、図星。まさにその瞬間」
「はー。長かったなあ、ここまで」
「そやねえ」

しみじみと語り始める兄二人に、年下の二人は慌て始めた。

「ちょ、ちょっとお兄ちゃん？」
「せーち？」
「変な事言わんといてよ」
「大丈夫、大丈夫」

「そーよ。五つの頃から好きやったなんて、言わんから」
「言うてるー！　わざと！？　わざとやね、せーち！」
「ち、違う！　ちゃうて！　ほんまほんま！」

家長となっていてもおかしくない年だが、些か天然が入っている様子の兄と、頭の回転が速そうな弟の立場が逆転しているのか、それとも弱みを握られているぶん弟のほうが弱いのか、と不思議な心地で見守っていた露草は、知らず知らずのうちに笑みを浮かべていた。

兄弟同士で争いを繰り返す一族や、実の親子が殺しあうような話もある中で、こんな存在は稀有だともいえるのかもしれない。
今となっては到底無理な願いだが、こんな風に自分も言い合う経験をしてみたかったと、微かな羨みと寂しさがふとよぎる。それを見透かしたかのように、ぽんぽんと優しく叩かれた頭の上に、反射的に手をやった。

「痛い、痛いて。なんね、えらい不機嫌やね」
「兄弟同士はほのぼのしてるが、どうするんだこれから」
「うーん。親の反対で諦められるほどの思いやったら、それまでっちゅうことやし」

そのやり取りが聞こえたのか、良と清治郎が甘い雰囲気を一変させた。
それを絶ち切るように、清一郎と和やかに会話していた男がこちらを振り向く。

「ああ、そうでした。俺は栗町隆吉。良の兄貴です」
「これはどうも。河野白梅です」
「河野露草と申します」

「おや、そちらもご兄弟ですか？」
「はは。まあ、そんなもんですわ」
「清一郎、そろそろ露草殿と白梅殿をお呼びし・・・何をしている」
塔十郎は通りで話していた六人、正確には栗町家の二人を見て顔を顰めた。
「あ、あの・・・父上」
「清治郎。家の者たちが宴の支度で走り回っているときに、一人女子と現を抜かすとは。いいご身分だな？」
「そうではなく、私は・・・・・・！」
「当主としての心構えが未だ足りないと見える。こい、清治郎。性根を叩きなおしてやる」
ひい、と清治郎は声にならない悲鳴を上げて青ざめた。
清一郎は止めたそうに腕を上げかけたが、眼力で有無を言わさず連れて行かれる。
「それでは、失礼」
隣人としての礼儀か、それとも客人に対する非礼を詫びてか、塔十郎は一礼してから去っていった。
とぼとぼと後ろをついていく清治郎の背中が哀愁を漂わせていた。

ユビキリ　ノ弐拾肆

「行ってしもうた・・・」
「相変わらずだな、そちらのお父上は」
「そっちもあんまし変わらないやろ。まあ、分からんでもないけどね」
「・・・どういう意味だ？」
「長男にはいろいろあんのよ」
「お前は蘭法医だろ？」
「まだなったわけやないのに、気が早いなあ」

清一郎は意味ありげな笑みを浮かべると、弟と父親がどうしてるか見てくると言い残し、歩いていってしまった。

「清一郎殿？」
「露草さん、白梅さん。もう少ししたら準備が整うと思いますから、楽しみにしててくださいね。またね、お良ちゃん、隆ちゃん」
「あ、ああ・・・」
「お兄ちゃん。清ちゃん大丈夫かしら？」
「それを確かめるために清一が行ったんだろう？　大丈夫さ、あんなんだけど一応長男なんだから・・・」

あんな、とは随分な言い草だが、そういえるほど親しいということなのだろう。
それよりもさっきの言葉が気になるようで、ちらちらと家の奥をうかがいながら、隆吉がお良の肩を軽く叩く。
「ほら、早く家に入らないと親父殿にどやされるぞ」

「あ、待ってよ」
「じゃあ、えー・・・・・・白梅さん、露草さん。また」
そういえば、さっきお握りでお腹がどうとか言っていたわね、なんてちくちく言い合っている兄妹の後姿を見送りながら、とりあえず白梅たちも中に入ることにした。

「踏み込みが足らん！　立て！」
「は、はい！」
「こりゃ、宴の直前まで続くかもしれんなあ・・・・・・」
「清一郎さん」
「あ、これはこれは。お見苦しいものを」
道場の入口の壁にもたれ、身を隠すようにして中の様子を伺っていた清一郎が振り向くと、露草が背後に立っていた。

「おや、白梅さんは？」
「あいつなら料理を見てくるとか言って・・・男ながらに料理を作るのが好きらしくて」
「それは向上心がおありになっていいことですね」
「ところで、清治郎さんは放してもらえなさそうですか？　栗町家と話しただけで、いつもあんなに？」
「いやあ・・・・・・なんでしょうね。父上ももしかしたら感づいてるのかもしれないですね」
「お良さんのこと、ですか」
清一郎は返事の代わりに、悲しそうな笑みを浮かべた。
いくら家同士の深い禍根とはいえ、弟の恋はうまくいってほしいのだろう。

「私も準備のほうを見てきますね」

それじゃ、と辞していく背中を見送り、親子の方に再度向き直ると、清治郎がくたくたになりながらも未だ木刀を振るっていた。僅かに息を切らしつつも、息子を打ち据えるかのように猛攻を続けていた塔十郎はようやく満足したらしく、木刀を壁にかけた。

「お前には覚悟というものが見えん。家というものの重さを噛み締めねば到底後は継げぬぞ」

「ご指導っ、ありがとうございました！」

平伏した清治郎の頭を暫く見つめていた塔十郎は、やがてくるりとこちらへ向かってくる。

露草がこちらにいたことには気づいていたようで、驚く素振りもなく会釈し、前を通り過ぎていった。清治郎がへたへたと針金を曲げ、道場の冷たい感触を味わっているのをちらりと見遣ったが、露草は塔十郎を追うことにした。

「父の姿」を知ってはいても、「あるべき父の姿」を知らない露草の何かが、花咲塔十郎の覚悟とやらを聞いてみたくなったのかもしれなかった。

ユビキリ　ノ弐拾伍

「随分と手厳しくあられるのですね」
「露草殿・・・」

さっきは驚いた素振りなど見せなかった塔十郎だったが、物思いにふけっていたのか、僅かに体を固まらせた。

「これは失敬。都合が悪いようなら、お暇・・・」
「いえ、こちらこそ失礼。少々昔を思い出していましてね。いきなり今に引き戻されたようで、自分でもよく分からない心地がするのですよ」
「昔、ですか」

塔十郎はふと笑った。

「そういえば、清治郎さんのことですが」
「あれが何か？」
「いえ・・・、清治郎さんは誠実そうな方ですから、色事などには無縁だろうと思いまして。ご当主になられるのでしたら、些か心配ではないのかと。私が言っても詮無いことですが」
「あれは、頑固な子です」

一体誰に似たんだか、と呟いた塔十郎の顔を見つめ続けることなく、そして不自然になりすぎないよう無難な相槌を打っておく。

「あの年になってまで、誰も娶ろうとしない。清一郎に関しては

既に諦めているのですが」
「お二人とも、先を見据えておられるのでしょう。清治郎さんも秘めた決意をお持ちのようですし」
「露草殿は慧眼の持ち主でいらっしゃるようだ」
いや、結構誰にでも見破ることができるような、とは口に出さないほうが賢明だろう。
苦笑しながら言った塔十郎を見ると、どうやらお良のことは薄々感づいているようだった。
「清治郎さんは、その・・・心に秘めた方がおられると、お見受けしますが」
「食べ屋敷の娘さんでしょう」
「やはり、ご存知でしたか」
「清一郎は隠すのが上手いが、清治郎はすぐ顔に出る。清一郎は歯を食いしばって耐えますが、清治郎は泣きながら耐えます。・・・・・・馬鹿息子ですよ、どちらとも。足して割るくらいが丁度いいんですが」
親の口調だった。厳しくて優しい父親の姿だ。
口では辛辣な物言いをしていても、やはり心配なのだろう。
「気づいてはいるのですがね。代々の因縁ゆえに、栗町以外の娘さんにしてほしいというのが本音です」
「咲き屋敷と食べ屋敷のご家族が対立しているとは、清一郎さんからお聞きしました。・・・・・・昔に何があったのか、お聞きしてもよろしいですか？　その、立ち入ったことならば無理にとはいいませんが」
ここまででも相当に家の事情に踏み込みすぎている。気を悪くして

もおかしくない状況だったのだが、清一郎しかり現当主の塔十郎しかり、昨日会ったばかりだというのに、気を許してくれているらしかった。

「伝統でいえば栗町も花咲も同じなのです。どちらも同じ時期に川本の殿様に拾い上げられ、立派に家として存続できるようになりました。花咲家初代当主の方雪に子が出来なかったため、自らの末の子、約進を花咲家の養子にして、家が途絶えぬようにしてくださったのも川本末久様です」

慣れ親しんだ川本の家。
末久は五代目栄雅であり、露草の曽祖父にあたる人物だった。会った記憶はない。

「いきなりですが、露草殿はこちらに住んでいたことがおありで？」

塔十郎の切れ長の目が一層鋭さを増した。
探ってくる、心の奥深くまで。
露草はつ、と背中に汗が伝う感触を思い出していた。

ユビキリ　ノ弐拾陸

「いきなりですが、露草殿はこちらに住んでいたことがおありで？」

「・・・本当にいきなりですね」

「詮索など不躾だとは承知していますが」

「いえ、皆様からいろいろ聞かせて頂いている私こそ不躾なのですが。お察しの通り、一時期こちらで暮らしておりました」

「そうですか・・・」

塔十郎は目を伏せた。何かを思い出しているかのように、時折頷きを繰り返す。

自然と露草の目線も揺れた。

「露草殿は、私が憧れていた人にそっくりなのです。川本家の、以前の栄雅様に」

露草は唾を飲み下そうとした。けれど出来なかった。

あなたはまだお若いので、ここに住んでおられたことがあるとしても顔も覚えておられないとは思うのですが、と続けた塔十郎に笑えばいいのか、頷けばいいのか分からなかった。

「以前の栄雅様は若くして亡くなられました。・・・けれど、若くても優れた藩主でした。人心を掴んでおられた。力や金ではなく、本当に人との関わりを持とうとしておられた。信頼を勝ち得ようとするその姿勢は弟である今の栄雅様、そしてそのご子息にも受け継がれてゆくことでしょう」

悲しそうに、しかし未来に希望を持った目をして、塔十郎は顔を上げた。
露草はその目を直視したものの、目線はどこか彷徨う。
自分の過去を過去として、別人の口から再確認する事、自分が憧れられていた事実、自分のいない場所で確かに流れていた時間、そのどれもが露草に突き刺さっていく。嬉しいようで、心の奥のどこかが痛かった。

「敵対している栗町と私も、かつてはそれなりに会話を交わしていたのです。しかし、以前の栄雅様と今の栄雅様では力量が違う。今議論したところでどうもできませんが、お二方が生きておられた頃は、どちらにつくかでよく揉めておりました」

そういった動きがあるのは知っていた。
けれど露草にも明良にも対立する気はなかった。むしろ露草と対立し、明良と対立させようとしていたのは父の兼良だ。

「今の栄雅様はお父上の言いなりになる危険があった。だからこそ難色を示すものが多かったのですが、如何せん大っぴらに言う事も出来ますまい。個人同士の、内密の話からどんどんと話がこじれていきましてね」

塔十郎は恥ずかしそうに頭をかいた。

「それに・・・川本家を藩主とする花咲家ですが、一つだけ掟があるのです」
「掟？」
「ええ、栗町家の守護という掟です」

「川本家への恭順を示しながら、主は栗町だと？」
「そういうわけではありません」

どう違うのだろう。
自分に仕えているふりをして、兼良からの密命を果たそうとした透影の姿が思い出された。

ユビキリ　ノ弐拾漆

「栄雅様と栗町家の今の当主、梅太郎が二人同時に溺れていたならば、まずお助けするのは栄雅様です」

「なるほど、絶対の守護ではないのですね」

「理解していただけましたか。栗町の守りという掟がいつ頃からできたのか――恐らく栄雅様に取り立てて頂いた頃なのでしょう。この地に移り住んだのは両家ともほとんど同時期と聞いています。ということは、花咲も栗町も友であった可能性が高い。栗町に恩を感じていたのか、栗町が大切なお役目を言い渡されたのか・・・・・・、彼らの守りという役目が花咲家には代々受け継がれているのです」

初代当主、花咲方雪の個人的な情か、それこそ密命を言い渡されていたのか今となっては分からず終いだが、どこかで糸が絡みあっているのだろう。

「それゆえに、花咲家は必要以上に栗町家に近づく事を避けるのです」

「何故です？　親しいほうが守りやすいのではないですか？　距離を置かれて動向を見失ってしまうよりも」

「四六時中監視しているわけではありませんが、近くにいたほうが守りやすいのは確かです。しかし、時に守りというのは栗町個人の意に反してでも救い出さねばならぬ状況に陥るでしょう」

意に反する救い。

例えていうなら、命を天秤にかけねばならないとき。

例えば親。例えば子。例えば恋人。例えば友人と。例えるならきりがない。恐らく救い出す優先は血筋の濃いもの。家を存続できる権利を持つものからだ。
なんとなく分かる気がした。厳しさを押しやった優しさだけで力強さは得られない。

「清一郎は蘭学を学ぶと言い出した。あの子は内からの守りです。清治郎は剣を極める。あの子は力による外からの守りです。そして幼き頃から近くで育ったことは、心を守ることになる」
清治郎はまだこの掟を知りません、と塔十郎は苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「ただでさえ、私はこの掟に疑問を持っています。いくら花咲の守りに気づいていないとはいえ、交流がまだ続いていたと思われる祖父、約進の時代」

――約進。川本家からの養子。
繋がりは薄いものの、露草にとって全くの無関係とはいえない。

「梅太郎の祖父が約進を裏切って、多額の金を騙し取ったというのです。私が元服を迎える前に父は他界しましたが、生前何度聞かされたか分かりません。裏切られた、だが守れ。目の前にいる幼馴染が私にそんなことをするはずはないと思いながらも、当主として生活し、剣術の稽古をするうちに自然と距離があき、時間も経ちました。そうして栄雅様のことで完全に仲違いしたままです」
疑いの種を差し挟むことで、割り切れない青さを消し去る。それは塔十郎の父親にもなされたことだったのだろう。

露草は知らないうちに息を詰めていたらしく、重い気持ちを除き去るように、ため息を吐いた。

「私は、そんなに似ていますか。前の栄雅様と」

「え？　あ、そうですね・・・」

いきなり話題が戻った事に瞠目しながらも、塔十郎は同意した。しかし彼が亡くなってから、数十年が経っている。それに本当なら先代の栄雅は自分より若干年上のはずだ。目の前にいる青年はどう見ても自分より年下で、なのに息子ほどの年齢の年下の者として対する事が出来ないのは他人だからだ。塔十郎はそう思っていた。

「ならば、その栄雅様の言葉としてお聞きください」

「は？」

不可解な波が襲ってくる。

そんな予感が塔十郎の胸に渦巻いていた。

ユビキリ　ノ弐拾捌

その前に、少しばかり昔話をする事にいたしましょう。

あるところに、二人の友人がいました。
友といってもある道場で剣を交え、同じ屋根の下で同じ師に教えを受けただけの、半ば腐れ縁のような二人でしたが、それでも飾らずに物を言える、数少ない貴重な友人同士であり続けました。

ある時、一方の男は武勲をたて、目覚しい活躍をとげました。殿様は大層彼を気に入って仕官にし、屋敷を持たせる事にしました。
異例の出世、特別に目をかけられての褒美でしたが、その者は人好きのされる性格だったので、周りの家来も納得せざるを得ない、つまりは異論を申し立てる者などいないうえでの殿様に重用される一族が誕生しました。

そして一方の男は知略に長けていました。
策を張り巡らせ敵を篭絡し、一部を取り込むことに成功し、敵対する部族を一掃しました。けれど、そのやり方は誇りある殿の家臣としていかがなものかと反発する者たちの手前、殿様はもう一方の男ほど褒賞を与える事が出来ませんでした。
その男はそれでも別に気にしませんでしたが、ある時壊滅させたはずの部族の生き残りが恨みを捨てきれず、その男の家族を人質にとりました。
解放してほしくば、男の命を引き換えに差し出せ。
犯人の要求を聞いて、当たり前のように彼は腹を切ろうとしました

が、友人はそれを押しとどめ、加勢も連れず男と共に二人で犯人の隠れ家へと乗り込んでいきました。
曰く、恨み潰えぬものならば、面と向かって首を取るといい。正々堂々の真っ向勝負、どちらかが死んでも真剣勝負の場では仕方がない。

先の戦での成功をやっかむ者たちが噂するところによれば、家族を人質に取られた男は陰険でがめつく、大した力もないのに人をこき使って不当に勝利を得たのだと陰口を叩かれていました。
それを鵜呑みにしているのと、自分の一家を殺された恨み、両方抱えた犯人は暫く唸っていましたが、やがて男に剣を向けました。

「・・・それで？　その男はどうなったのです？」
「勝ちました」

無性に熱い茶をすすりたくなった。
一時息をついた露草と共に、塔十郎も話に聞き入っていた時の緊張をほぐしながら、人を呼んで茶を持ってこさせる。

「二人の友人というのは・・・・・・栗町君近と花咲方雪ですか」

両家の初代当主の名を挙げたが、露草は何も言わなかった。ただ静かに微笑むだけだった。
これ以上追究してもきっと言わないつもりだと悟った塔十郎は諦めて、微かに顔を傾ける。自分に出来るのはただ話を聞くことだけだ。
過ぎてしまった遠い過去の話、本当ならひっそり紡がれるはずだった、けれど暴かれる事のないはずだったその話を。

けれど、その男の勝利と引き換えのつもりか、潜んでいた犯人の仲間により家族は殺されました。
一人残され打ちのめされる男は、殿様の御前に呼ばれて栄誉を褒め称えられましたが、到底笑えるものではありません。
優秀だった息子も貞淑な妻も亡くし、茫然自失となっていた男をどうにか叩き起こしたのは、やはり友人でした。発破をかけ、どうにか生きる気力を取り戻させ、彼の功労を正当に評価してくれるように殿様に談判しました。息子を失ってまでも家臣として忠誠を示したとして、殿様は彼を仕官に取り立て、自分の末の子を養子として育てるように命じました。

その時にどんなやり取りがあったかは分かりません。けれど見捨ててくれなかった友人への恩を生涯忘れず、後に友人一族を気にかけるようにとの一言を遺してこの世を去りました。

「殿様は・・・慈悲深い方ですね」

自分の子を与えるほどに、家臣を気遣うとは。その後の地位まで半ば約束したようなものではないか。
塔十郎はそう思ったが、露草はなんともいえない笑いを浮かべた。

「本当に、そうでしょうか？」

ユビキリ　ノ弐拾玖

褒美として、忠誠を示した失意の家臣に与えた自分の息子。それを人は美談ととる。
だが、元々要らない末の子を体よく押し付けたという可能性はないのだろうか？

川本家に流れる血はとても清いとはいえない。戦国の世にあってのし上がってきた成功の裏でどんな血を流しているか、分かったものじゃない。
露草が幼い頃、川本兼良が父親である定良の弟、つまりは叔父の花咲約進を疎ましがっていた記憶がちらつくような気がしたが、突き止めようとすると霧散してしまう。

「どういう意味でしょう？」
「その話題を掘り進めても、意見の相違が見られるだけでしょうから、話を元に戻す事にします」
鋭い眼光に、塔十郎は反発する気持ちをかき消されてしまう。渋々頷いた。

「養子として迎えたその子は強く、賢い子でした。父親に心を完全に許したとは言い難いものの、言いつけにはよく従いました。そんな彼と友人になったのは、養父の友人の息子でした」
この話を自分の家族と栗町家に例えるなら、約進は栗町家の二代目当主、君近の息子である小次郎と友人になったという事である。
名前を伏せられてはいたが、少しは親しみの持てる話だ。これが先

の栄雅とどう繋がるのか全く分からなかったが、塔十郎は続きを聞くことにした。

「その子が大人になったとき、やはり友人も大人になりました。友人は蛍という娘と共になり、自分は千代という名の娘と伴侶になりました」

塔十郎は、はっとした。
栗町家の蛍という娘は知らないが、千代という名の人物なら、約進の妻であり、自分の祖母であるからだ。やはりというか、今更というか、これは両家の話だ。それと川本家を絡めた話。

「蛍と暮らしていた友人はある日自分の妻と共に、件の養子の彼の屋敷へとやってきました。酒でも酌み交わすかと迎えてみれば、旧交を温める雰囲気でもない。何用かと一言問えば友人は妻と共に、床に頭をこすり付けんばかりに伏しながら、金の無心に来たのだと一言だけ言いました」

「・・・・・・それが、梅太郎の祖父ですか？」

祖父の約進を裏切ったという、栗町家への疑いは明白なものだったわけだ。
子どものように先を急ぐ塔十郎に、露草は小さく肩をすくめてみせた。

ユビキリ　ノ参拾

「黄邦家、という一族をご存知ですか？」
「きくに・・・・・・いいえ、不勉強で申し訳ない」
「いえ、今となっては子孫がいるのかも分からない家です。その黄邦家から蛍は嫁いだ。けれど実兄の葉鳥が今危篤状態にあるという。出来る限り華々しく送り出してやった娘の家に、迷惑をかけるわけにはいかないと意地を張っていた実父、崎二朗でしたが、とうとう後一月ばかりの命となってしまった息子の姿を見て、堪えきれなくなった。既に栗町家の実権を握っていた娘の夫に、薬代を貸してもらえないだろうかと文を寄越したものの、その当時の娘の家は金がなかった」
「栗町家に金がなかった？　あ、いえ・・・」

栗町家は今や裕福な商家だ。
塔十郎は幼少の頃からの刷り込みもあってか、話の腰を折ってしまったことに渋面を作りながら、慌てて続きを促す。

「殿様への捧げものをしたとか、戦や屋敷の修繕のために使ったとか、何かの事業に失敗したとか・・・何かしら理由はあったのでしょう。とにかく財政は良いとはいえず、一家が食べ、尚且つ奉公している者たちに僅かな給金を支払ってしまえば、もう金は残らない。娘の実家に送ってやれるだけの金は捻出できないから、無心に来た」

金の無心、という表現が絶妙だ。
あくまでも下手。こちらの勝手なのだから、断っても構わない。そ

んな蛍と、夫である小次郎の気持ちが汲み取れる。

「黙ってその話を聞いていた千代は、貸してあげましょうと夫に言いました。彼らには何人も息子がいて、裕福とまではいかなかった。けれど貸してやることにしました。しかし、その金の行き着く先は明かすことが出来なかった」

「何故です？」

「蛍の実兄が罹った病は、到底治ることのない恐ろしい病とされていたからです」

コロリ、労咳。思い浮かべれば幾らでも病は出てくる。

淡々という露草の口調に、塔十郎は息を飲んだ。

「妻の実家に気を遣って、何に使うのかは伏せるままにしておいた。けれど費用を捻出した先を突き詰められればすぐに暴かれる。だから、友人は提案しました。騙し取られた事にしてほしいと」

「・・・・・・な」

汚名は全て、自分の家に。

その潔さは紛れもなく、誇り高き武士のものだ。

「蛍の実兄の病は完治したと聞きます。しかし、友人の家は傾いていき、刀まで売らざるを得ないほどになった」

刀を捨てる。

仕官に取り立てられてはいない時期にそうなったのだろうか。

仔細はよく分からないが、もしかするとその時期に武士である事を諦めたのかもしれない。

「そうして、友人の家はやがて物を売り始めた。野菜から工芸品、輸入品・・・代が進むにつれ店は大きくなっていき、やがて食べ屋敷とまで呼ばれるようになり」

露草は一旦、言葉を切ってちらりと塔十郎を見据えた。

それから、温くなってしまった茶を一口すする。

「そして、約進の家は咲き屋敷と呼ばれるようになりました」

ユビキリ　ノ参拾壱

「・・・・・・」
「美味しいお茶ですね」
「・・・あ、ああ。もっと持ってこさせましょうか？」
「いえ、こき使っては申し訳ない」
ず、と茶をすする音が部屋に響く。

塔十郎は、聞いたことを反芻しながら、目の前の人物は一体誰なのだろうかと考えていた。
真相は既に闇の中に埋没しており、今の話が本当かは分からない。けれど、話自体は筋が通っているような気がした。そして、どこか親近感を感じるような口調でもある。
その疑念をすでに露草は理解していたようで、一息ついた後、薄く唇に笑みをたたえた。

「以上が、貴方のお父様から聞いた話です」
「・・・・・・・え？」
「露草。おや、塔十郎さんも。美味しそうな草もちを先に頂いたけん、食べんね。清一郎さんと清治郎さんは実に手先が器用ですねえ」
「え、あ、ああ・・・小さい頃から妻の真似をするのが好きな息子たちで」
緊張感をすっかり無くしてくれる白梅に、じろりと横目で一瞥をくれたが、当の本人は餅を頬張りながら、ただでさえ白い肌を粉でさらに白く染めていた。

勢いに押されて塔十郎も食べ始めたが、毎度の事ながら美味しいと素直に感じる。

「露草殿、その話は一体、いつ・・・というか。貴方は」
「ですから、塔十郎殿」
「はい」

思わず塔十郎は姿勢を正した。

「昔の禍根とは方便なのです。強い絆で結ばれるのもまた結構なこと、そうは思いませぬか？　・・・・・・と、栄雅様なら言うでしょうね」
「はっ、はい・・・」

塔十郎が自然に礼をしようとする体を押しとどめていると、露草はどこか遠くを見るような目をしながら、すいませんと囁いた。

「なぜ、謝られるのです」
「私が・・・伝えられたら良かった」
「露草？」
「遣り残した事はないと思っていたのに、二つの家族間にひびを残したまま、私は放ってしまったのですね」
「露草殿・・・」

塔十郎は段々と鮮明になっていく、栄雅の記憶が目の前にいる青年と重なっていくのを感じていた。
背が高く、彫りが深い顔立ちだった。あやふやな記憶だが、どこか愁いを帯びた瞳は確かに同じだ。そうして硬く尖った石のような雰囲気を持っていたと思っていたが、今はどこか角が削れているよう

な気がする。だから昔の彼とも言いがたかった。
栄雅と言い切ろうとすれば昔の記憶が邪魔をし、栄雅ではないと言い切ろうとすれば心のどこかでそれは違うと反対する。

「よくは分からんけど、不可抗力なんじゃろ。おんしのせいやない」
「栄雅様、なのですか？　本当に・・・」
久しぶりに聞いたその呼称に白梅は目を見張り、いたずらっ子のような顔をしながら人差し指を縦にし、口にあてた。

ユビキリ　ノ参拾弐

「なんでお前が肯定するんだ」
「え？　だって私がその原因みたいなものやし」
「原因なんて大層なものか。行程の一つだ、厚かましい」

憎まれ口を叩いてはいたが、白梅に責任をかぶせないための言い草だったようで、白梅は傷ついた様子もなく、ただにこにこと笑っている。
ほれ、と差し出された草もちを頬張った露草、いや、かつての栄雅だった人物を見ていると、その視線に気づいたのか、塔十郎へと向き直る。
そうして、彼は自分の身に起こった事を簡潔に教えてくれた。

聞けば、鬼と知り合い、暗殺されかけ、救われ、命を繋ぎとめた代わりに人としての生の時間を止めた、と語る。
信じられないことばかりではあったが、それならば納得できるような気がした。
目の前の鬼二人は上手そうに餅を頬張っている。恐ろしい姿形でもなく、人の心を持ちながら、自分の息子の幸せを願って遠い遠い過去を語ってくれた一つの存在だ。

「それにしても、今日は驚いてばかりです。花咲、栗町の話を知っておられるとは。栄・・・いえ、露草殿が教えてくださらなければ、私は一生誤解したままでした」
「太一郎殿・・・お父上は私の父、兼良には今の話を打ち明けてはいなかったようです。当時栄雅になったばかりの私に、いきなり

その話を聞かせて、『もしかすると私は貴殿に牙をむく日が来るかもしれません』ときた。いや、剛胆な方でした」

苦笑する露草の話に、塔十郎は懐かしそうに目を細めた。

「そうですね。確かに父は厳格でしたが、芝居が好きで突拍子もないことばかり言っていました。幼心にも驚かされたことがあったような気がします。きっとこの話も私が大人になったときに聞かせるつもりだったのでしょう」

「なら、今度は塔十郎さんが清治郎さんたちを驚かしてやる番じゃね」

にやり、と笑った白梅に、塔十郎もにやりと笑い返した。

露草はちらりと「なかなか良い性格をしている二人だ」と思ったが、それはそれで悪くない。

ユビキリ　ノ参拾参

「清治郎、清一郎。ちょっといいか」
「はい。何でしょう？」
「清治郎、お前にどうかと思っている娘さんがいる。今夜の花見に呼んであるから、思う存分交友を深めるといい。清一郎。清治郎が逃げ出さないように見張っておけよ」
「は、はあ・・・」
「父上！　俺・・・私はっ」
「すでに決めた事だ。文句はないな？」
「・・・――はい」

身を翻し去っていくその背中の後ろで、残された息子たちはひそひそと囁いた。

「阿呆、なんで言わんの。お良ちゃんに告白したときの勇気をもう一回だけ出しいっ」
「ほんなら、せーちなら言えるん？　無理やろ！」
「けどこんままやったら好きでもない人と一緒ならなあかんよ。そんなんお良ちゃんにも悪いやないの。折角お良ちゃんだってせーじのこと好きだって言ってくれたんに」
「・・・でも」
「・・・そんなんやったら花見にお良ちゃん誘い！　んで、悪いけど私はこん人と一緒になるって娘さんに直接断ればええ！」
「ん・・・・・・、うん」

ようやく決心したのか浮かない顔で、しかし静かに決意を秘めた顔で清治郎は頷いた。「ていうか、人のことばっかり気にしてないで

せーちもさっさと嫁貰えばいいんに」と聞こえよがしに呟くのも忘れなかった。

「どうやった？」

「だめや・・・・・あいつ、どっかに出かけとるらしい。なんか隆と一緒に呼び出されたとか家の者が言いよったけど」

「隆ちゃんと？　・・・・・・うーん、なんやろね」

このままでは好きでもない人と政略結婚させられてしまう。それが当たり前の社会にいるとはいえ、冗談じゃない。

清治郎は何としてでも、お良を花見に連れて行き、相手に叩きつけてやるのだと意気込んでいた。当初の目的から若干脱線しているような気もしてきたが、そこまでは構っていられなかった。

やっとお良を捕まえたのは、花見まであと一刻、という時間だった。

「お良、今夜家に来てくれ！　後生だ！」

「ええ？　何よいきなり」

「実は・・・見合いさせられるかもしれん。親父が今日相手にどうかと思ってる娘連れてくるって言ってて、だから・・・・・！」

「清ちゃん、ごめんね」

「お良？」

「今夜は、どうしてもはずせない用事があるの」

「・・・・・」

「だから、ごめん」

妙にさっぱりした顔でお良は振り向かずに清治郎に背を向けた。

所詮、女子の情などこのようなものなのだろうか。しかし何十年も

抱いてきたこの思いをすぐ諦めきれるほど、自分は賢くも潔くもない。

清治郎は一人ででも縁談を何とかしてぶち壊してやる、と意気込んで道を引き返し、屋敷の中へと戻っていった。

ユビキリ　ノ参拾肆

「えっ、お良ちゃん来んの！？」

何やっとん、と呆れ顔で呟く清一郎にはお構い無しに、清治郎はとにかくどうにかして見合いを避ける術を模索していた。
頭が残念な振りでもしてしまえばぶち壊しになるだろうか？　よほどのことがない限り女性のほうからは見合いを断らない。ということは、そんな「よほどのこと」をしてしまえば万事解決に違いない。いっそのこと兄に女装でもさせてやろうかとまで考えた。
些か浅はかではあるものの、なりふり構っていられる状況ではない。

「こんばんは。良い夜ですね」
「ほんに、綺麗なお月さんに温かい色した花びらがよう合いますわ」
「あんさんはお酒持っとったら、なんでもええんちゃう」

あっはっは、となされる会話は終始軽い調子だった。程ほどに赤い顔をして笑いあう人々とは裏腹に、清一郎と清治郎だけは引きつった笑みを浮かべたままだ。
そんな二人を横目で伺いつつ、露草は落ち着かない気持ちで酒盃を空にしていく。そしてそんな露草を見た白梅がやはり酒を煽りながらこちらへと近づいてきた。

「せっかく美味しいお酒頂いて、花見してるのに。そんなしかめっ面しよったら桜が泣くんと違う」
「えらく今日は詩人だな。桜に感化されたか」

「桜は人を惑わす、って聞いたことあるけどね」
「よく言う」
いつもより手厳しい露草の一言を、白梅は困ったように笑いながらやり過ごしていく。
露草が内心落ち着かないわけは、先ほどから塔十郎の姿を見かけないためだ。幾らなんでも家長がこの場に姿を見せねば締りがつかない。いずれやってくるだろうが、この場に一緒に伴って連れてくるだろう人物が、一体どんな娘なのかと不安がっている清治郎たちが危なっかしくて見ていられなかったからだ。これではある意味生殺しも同じだった。
可哀想に。
清治郎は己の行く末、つまりは添い遂げるべき伴侶を受け入れられずに、意に沿わぬ相手を押し付けられるのだから渋い顔のまま、けれど決意を秘めた眼差しで戸口をじっと見つめている。まるでそこに親父様がいるとでも言っているかのように、何度も生唾を飲み下しては、清一郎にしきりに飲み物を勧められていた。
「ようこそお集まりいただきました、皆様」
ようやくの登場に、場の雰囲気が変わる。
どこか重厚な雰囲気と何かの期待が入り混じったような空気だった。
「久しく見かけなかったな。元気にしておったか」
「お前こそ、便りも寄越さずに」
「塔十郎さん、これ食べてくださいな」
「これも奥様に差し上げてくださんし」
「ああ、これはすまないね」

咲き屋敷の花見とくれば、世間の正月のようなものといえる。長らく会わなかった親類や友人、近所の様々な身分の人たちを招待しては交流を深めるというもので、思い切った言い方をすれば身分を問わない舞踏会のようなものだった。
懐は寒くとも、人との絆だけは保つべし。
貧乏侍と言われるような有様ではあったが、人徳と誇りだけは持ち合わせている。それが花咲家だった。

その長である塔十郎が、今宵だけは上機嫌で隣に女性を連れていた。背格好からして塔十郎の妻ではないようで、若い女性らしく着物に鮮やかな朱の大輪が縫いとめられている。
とうとう息子さんに縁談が持ち込まれたか、と人々が祝う雰囲気に包まれる一方、清治郎と清一郎はそれ来たもうお終いだと、まるで腹を切るような心持ちで、二人を見つめていた。

一体どんな人なのか。たとえどんな美人でも気持ちは揺らぐ事はないけれども、どんな娘かと興味を抱いていた清治郎なので、遠くから見ようと若干背伸びをしてみる。だが塔十郎に入れ知恵されたのか、可愛らしい着物にちっとも似つかわしくない被り物を被っているせいで、女性の顔がすっかり隠れてしまい、全く見えずにいた。

ほんのり紅をのせた口元が薄っすらと微笑んだように見えた。
不覚にも胸をときめかせてしまった清治郎が、慌てて首を振るのを見て、塔十郎がにやりと嫌な笑いを浮かべ、またそれを見てしまった清一郎と露草は、苦笑いさえ浮かべることが出来なかった。

ユビキリ　ノ参拾伍

「清治郎、来なさい」
「――！」

呼ばれた途端、全身にぴりぴりとしたものが駆け巡ったかのようだった。さあやってきた。とうとうやってきてしまったこの時が。

固まりながらも足を踏み出す後ろで、清一郎が冷や汗を流す。清一郎は彼なりに罪悪感のようなものも感じてしまう。どうか弟の長年の恋が実りますように。そのために、どんな些細な事でもいいから娘さんが気に食わないことがありますように。

およそ長男らしくない願いだが、今年の宴だけは上手くいってもらっては困るのだ。だってそれは望んでもいない婚約の成立と同義だから。

「お前ならもう分かっているな。わざわざここに連れてきた意味を。さあ、ご挨拶を」
「ですが、父上。私には決めた人が――」
「挨拶を」

有無を言わさない父親の鋭い眼光に、挨拶くらいならと折れてしまうのが悪い癖だった。

項垂れながら、それでも女性の前で情けないところを見せるのもどうかといつものように背筋を伸ばす。

「は、初めまして。某は花咲清治郎という者で――」

「・・・・・・・くっ」

抑えきれなくなったように娘が手で口元を隠した。身を震わせているのは、どうやら笑っているようで、くすくすと笑い声が響く。

「なんだい、ありゃあ」

「さあねえ」

「清治郎さん、なんかやらかしたかね」

「清治郎さんだからねえ」

ぽかんと目を丸くさせた人々は、声量を抑えてひそひそと囁きだした。ちなみに補足しておくと「清治郎だから」という語は侮辱ではなく、不出来な子を見守る親のような言い草であった。

そんな中「彼だから」と称された当の本人は既に飽和状態のようで、おろおろと父親と目の前の娘を交互に見やるばかりである。息子の様子を見て、塔十郎でさえ豪快に笑い出した。屋敷から料理を運んできた母親も、どうやら何かを察したらしく、笑み崩れている。

「ごめんなさい、笑ってしまって。だって――あんまりにも緊張されているものだから」

ころころと笑う娘はようやくそれだけを言うと、塔十郎のほうに顔を向けた。促されて塔十郎も笑いを収める。

「もう、いやだわ」

「くっくっく、いや。不出来な息子で申し訳ない。こんなのでいいなら貰ってくれるかね」

「ええ、それはもう・・・・・・ッ」

ぽかんとした顔から真っ青に色を変化させたのが可笑しかったのか、

さらに眼前の二人は笑い出した。
しかし、幾らなんでも出会って即夫婦になる決意など無茶が過ぎる。
「父上、とそこの娘さん。悪いが私には心に決めた人がいて、だからその・・・貴方とは一緒には」
「分かってるわ、そんなこと。っていうか大概鈍すぎるよね、清ちゃん」
「は・・・・・・・え？」
戸惑うように辺りをうかがえば、事情を知らない者たちさえ数名口元を押さえていた。
白梅にいたっては隠そうともしておらず、露草は頭を抱えながらもやはり口元が緩んでいる。一人清一郎だけはほっとした顔をしていた。

「ち・・・ちうえ？」
「間抜けな顔を晒すな。どれだけ鈍くて行動が遅かろうが、いい加減気づいているだろうに。第一、私がお前の思い人を知ったのがいつだと思っている」
「私よ、わたし」
「お良！？　何で、お前・・・今日ははずせない用事があったんじゃ」
「だから。外せない用事でしょ？　清ちゃんをびっくりさせる、とっておきの」
「してやられました、父上」
「おう、清一郎。お前が結婚する気なら誰かいいのを見繕ってやるぞ。今回の件で四方八方に声をかけたからな」
「いいえ。私は遠慮しますけど。そろそろ清治郎が一杯一杯みたいですよ」

嬉しいのか怒っていいのか分からない表情のまま、清治郎は固まっていた。
塔十郎が隙を見て白梅を覗き見ると、白梅は握りこぶしをつくって親指を上に立てていた。意味は分からなかったが、笑顔を返しているので“上出来”の合図だろうと察する。
その様子を横目で見ながら、お良が頬をつついたりくすぐってみたりと清治郎に悪戯を仕掛けていた。

「ちょっ、やめろ！」
「あら、だって清ちゃん固まってるんだもの」
「んー？　ということは、清治郎は俺の義弟になるってわけか！・・・・・・なんだかいつもと変わんねーな」
「まあ元々全員の弟って感じやったもんねえ。けどそれで言ったらお良ちゃんが私の義妹になるんか。ああ、それは嬉しいかも」
「じゃあ俺たちはある意味兄弟だな」
「そうなるねえ」

呑気に笑う兄たちを横目に、ようやく落ち着いてきたらしく、清治郎は恨めしげに父親を見やった。

「父上・・・・・・謀りましたね」
「お前には散々手をかけられてきたからな。せいぜい驚かしてやるのも悪くはないだろう」

にやりと笑う父親を前に、そしてにこにこと嬉しそうに笑う兄と母親、加えて祝福する友人たちに最愛の女性が傍にいるとなってはぐうの音も出ない。清治郎はいかにも仕方がないという風に、肩を落として笑み崩れた。

「おー、幸せそうな顔しとるねえ」
「こちらは一件落着、か」
「こちら？」
「ああ、いや・・・こっちの話だ」
「ふうん」

呼応するように甘く温かな風が二人を包み込む。
気が早い友人たちが祝杯だと騒ぐ、咲き屋敷の灯りは一晩中絶える事がなかった。

ユビキリ　ノ参拾陸

「さて、あとはあいつだけだな」
「あいつ？」
「隆吉殿たちには悪いが、これを聞いたら真っ赤になって飛び出してきそうな狸親父が隣にいるだろう」
ぐ、と言葉に詰まった年下勢を見て、不敵な笑みを浮かべた塔十郎が見ていた先は、栗町家との境だった。そう、こちらがもし賢しい狐と称されるならば、あちらは狸。そんな恰幅のいい姿をした、隆吉とお良の父親梅太郎のことである。
「親父殿、ですか」
「父様、絶対許してくれなさそう・・・」
しゅんと俯いたお良に感化されたのか、雰囲気も若干落ち込む。
「なあに。何年かかっても説き伏せてやるさ。私を甘く見るなよ、坊主ども」
「父上・・・」
にやりと笑った笑いが、まるで芝居のようにさまになる、嫌な笑い方だった。頼もしい悪の大親分のごとき笑いに、清一郎でさえ本人の目の前で父親の顔を笑ってしまいそうなほどだった。
そして白梅と露草が彼らを見たのは、その笑いが最後となる。
いずれ、清治郎とお良の結婚式が開かれるだろう。その時にまだこ

の地にいたなら様子を見に寄ってみてもいい。
しかし短い逗留だったが、彼らとは深く関わりすぎた。特に塔十郎には最大の秘密まで明かしてしまった。いくら信用がおけるとはいえ、秘密を抱えさせたまま長く近くにいることは負担をかけるだろう。それにそろそろ二人の放浪の虫も焦れていた。

「お待ちください――お館さま。外出されるときは誰かをお付けくださいと、何度申し上げたらお分かりいただけるのですか」
「私は先人の教えに従っているだけだ。ついてこれないならお前だけ帰ってもいいぞ？」

男が一人、歩いていた。
口が開いているか開いていないのか、はっきり分からないくらいの角度で、しかし確実に話していた。周りですれ違う人々は、その呟きに気づいていないようで、不審の目を向けることなく男の隣を通り過ぎていく。
その光景を見て、白梅はぽつりと感想を漏らした。

「密やかすぎるねえ」
「なんだ、お前にも聞こえるのか？　あれは特殊な発声法だぞ」
「そういう露草にも聞こえてるんじゃろ」
「当たり前だ。あれは川本家と各々の影との連絡手段の一つだからな」
「影？　ああ、透影さんみたいな――」

言ってから露草の視線を受け、白梅は珍しく内心で焦っていた。動揺と同時に、小指が神経質な速さで動く。

古傷、と世間では言われる年数が経っていようと、露草の中では未だ新しい傷かもしれない。なるべく塩を塗りこまないように、川本家の話を持ち出すようなことがあっても、透影の話は持ち出さなかったのだが。
そんな気遣いを察したのか、露草は何を考えているか分からないような目でじっと白梅を見つめていた後、ふと口の端をあげた。

「お前は無神経だと思っていたけれど――」
やはりまずかったらしい。ひどい言われようだ。困った笑みを浮かべようとした白梅の顔から視線を外して、そのまま続ける。

「変に気遣い屋だな」
「変は、余計と違う？」
「そうか？」
「そうよ。そうとしか言わん」

くすくす、と笑いまじりに言葉を交わす道端の二人に、男はふと目を向けた。僅かな焦りが顔によぎる。
感情の揺れを隠すようにして俯くと、男は再び歩き出した。

ユビキリ　ノ参拾漆

「『露草らしい』といえば『らしい』けどね。おんしは皮肉しか口にせん」
「じゃあもっと『らしい』ことを言ってやろうか。『言葉を少しは統一しろ』」
「うわ、懐かしいねぇ」

示し合わせたように二人ともなく歩き出した。
漂う雰囲気がどこか違うことにお互い気づいていたが、敢えて何も触れずにそのままを保ち続ける。何かを探りあうような、試しあうような、ぎりぎりの線を渡っていく。
取り留めのないことを口にしながらも、真剣には考えておらず、視線も微妙に結び合わぬままで歩を進める。先ほど誰かと会話していた男が露草の横を通り過ぎた。瞬間、鼓動が大きくなったことに気づかれてしまっただろうか。

男は数歩離れた所で立ち止まった。気づいたように身を硬くし、何か考えるような素振りをしてから振り返る。しかし、先ほどすれ違った二人組の姿はもうなかった。ぼんやりと印象に残っている袖の色が、角を曲がって行った気がしてその後を追う。

「立ち止まったよ」
「・・・ああ」
「久しぶりじゃ」
「ああ」
「追いかけてくるかもね」

「ああ」
「待ってあげんの？」
「・・・・・・死んだ奴がか？」
「死んでたらここにはおらんじゃろ。変わっただけじゃ」

緊張しているのか、露草は唾を飲み下す。いつものように茶化す事もなく、白梅は露草の左肩を強く握った。少し痛かったが、むしろ正気に戻してくれるくらいの強さで、かえって嬉しかった。

「少し離れたところに行こう。人気がない、いい場所があるんだ」
「わかった」

男は早足で後を追った。小走りで追っても追いつかない。総髪の後姿と角を曲がる袖の色だけが、妙に焼きつく。
やがて諦めの色が見え出した頃、また前にいる人物は右に曲がった。もうここで見失ってしまったら当初の目的を果たして帰ろう。そう自分に言い聞かせて角を曲がる。

曲がると、総髪の男は今までのように消えうせることなく、確かに立ち止まってこちらを振り返っていた。
その姿を認めた瞬間に、勝手に体が歓喜に打ち震える。有りえない、絶対に有りえない、のに。

「――ッ！　・・・・・・下がれ。屋敷に帰るんだ」
「しかしそれでは」
「なら離れたところで待っていろ。決して会話を聞いても、姿を見てもならない。いいな」
「かしこまりました」

渋々、諦めた様子で影は男のもとから去っていった。
目線を上げると、自分から数十歩離れた先で総髪の男が佇んでいる。
そしてそれからさらに離れると、何かの社があり、その石段に白髪で散切り頭という、なんとも目立つ風体の男が座っていた。

「兄上？」
呼びかけると、総髪の男は戸惑ったように身を震わせ、逡巡して答える。

「大きくなったな、明良」
そう言って、露草は微笑んだ。その笑顔が長年一緒にいる相棒の表情と酷似しているとは、露ほども気づかずにいた。

ユビキリ　ノ参拾捌

「本当に――どうして・・・・・・」

その先は続かなかった。
どうして、ここにいるのか。どうして、いなくなったのか。どうして、今頃現れたのか。どうして、生きているのか。どうして、姿が変わっていないのか。もし妖怪ならばどうして、姿が見えるのか。そして、今まで如何していたのか。

疑問符だらけであろう頭の中を無理やり押さえ込み、口をつぐむ。目を伏せた姿が、一緒に過ごした頃と面影が重なって、露草は懐かしげに目を細めた。

「『留守を頼む』。それだけ言って消えてしまわれた」
「うん」
「手紙にも、『後を頼む』とだけ」
「土産も書いてあっただろう？」
「ええ。おかげさまでいろんな者と知り合うことが出来ました。本当に――曲者ばかりです」
「そうだろうな。苦労して、努力してきた顔だ。・・・うん、いい藩主になったな。明良」
「もっと、兄上から学びたい事がたくさんあったのに」
「かもしれない。だが、俺から学ぶ事なんてありはしないよ。あれから何年経っている？　藩主として働いてきた年数はお前のほうがもう長いだろう」
「そういうものではありません」

「・・・・・・そうか」

それきり黙ってしまって、どちらとも話を続ける事が出来なくなってしまった。

言いたいことはあるはずなのに、むしろ積もり積もった話が喉までつかかっているというのに、全く口から出てこない。

「何じゃろう、ちいとも兄弟の再会らしくない会話やねえ」

呑気な声が割り込んできた事に、明良は緊張の色を見せた。先ほどから兄が事情を隠そうともせずに傍においているのだから、何かしらの繋がりがあるとは思っていた。だが、兄の友達なのだから寡黙だと勝手に思い込んでいたのだ。

「兄弟らしさを求められてもな。年月が経っているのだから子ども扱いするわけにもいくまい。第一、会話が見つからないし」

「なんかあるじゃろ。こんな国行ってきて美味いもん食べた、とか」

「そうだな、仏蘭西での料理は美味かった。独逸の肉料理とかも」

「こんな国のこんな景色が綺麗じゃった、とか」

「帰ってきてからの日本の桜がやっぱり綺麗だな。特に咲き屋敷と呼ばれるだけあって花咲家の桜は見事だ」

「だからそれを、弟さんに話しちゃり言うてんの。私に言ってどうするんじゃ」

「・・・聞こえてたよな？」

「ええ」

「じゃあそういうことだ」

「どういうことじゃ・・・」

本当に珍しい白梅の突込み姿と、これまた始めて見る兄の拗ねた顔がどうにも可笑しくて、明良は笑い出してしまった。

「その御仁は・・・風体もそうですが、性格もかなり変わっていますね。いや、大変失礼ではありますが」
弟がまさかこの人に突込みを入れられるなんてと心の中で挿んだことには気づかず、味方を得たとばかりに相槌を打つ。

「どんどん言ってやれ、明良」
「何じゃ、こういう時だけ兄弟揃って。弟さんもおんしに似て性格悪いんか」
「『も』って何だ、『も』って。その前に明良を馬鹿にすると俺が許さんぞ」
「あーもう、ほんに面倒くさい奴じゃのう。軽口を本気にするけえ、好かん」

これは参った、という顔をして頭をかく姿に愛嬌が感じられて、兄弟は揃って笑みを浮かべた。

ユビキリ　ノ参拾玖

「そういえば兄上、今まで如何してこられたのです？」
一番初めに口をついて出たのは、その疑問からだった。
露草のほうは別段隠す事もないので、正直に告げる。
「こいつと旅をしてきたんだ。各地を放浪し、海の向こうにも渡った。異国の言葉だって少しは話せるようになった」
そうじゃね、と頷く白梅を覗き見ながら、二人を羨ましく思った。遠方に異国に精通した人物がおり、その友人から古い言い伝えや文化の一端などを見聞きする機会があったからだ。
明良はさらに重ねた。
「では、何故急に姿を消されてしまったのか、お聞きしてもいいですか？」
「それは――っ」
これには詰まってしまった。明良が信頼していたはずの父親に殺されかけたとは口を避けても言えやしない。
長考の末にようやく口から出たのは、「とある事件に巻き込まれて」と真実に先端だけ掠っているような返答しか、露草は与える事が出来なかった。
「命を危うく落としそうになって、そこを救ってくれたのがこいつというわけだ。それ以来ずっとこの白梅と共に旅をして暮らしている」

「兄上は・・・・・・」

兄が言っている言葉は真実かもしれない。
だが、その説明は全て表しているのではないという確信があった。
周りの者の甘やかしを良しとはしない兄だったが、彼自身も何だかんだで明良には甘かった。

ということは、自分に関係するものが起こした事件だろうか。その中でも特に衝撃が大きいものは裏切り。
一重に事件といっても巻き込まれたわけではなく、自身が事件の当事者で誰かの裏切り、それもとてつもない残酷さが秘められているように感じられる。

そこまで考え、当時の彼の周囲を鮮明に思い出すことが出来た。
彼の傍にいたのは、自分。常時近くにいたのは影。兄が接していたのは信頼できる貴族や民の有力人物。それを快くは思っていなかったであろう古参の者に、自分たちの父親――
唐突に恐ろしい事実に行き着き、身震いしそうになるのを心の中だけでとどめた。

思考が終って兄の顔を見たが、そこには悔恨も悲嘆も見受けられない。
例えば自分が無理に事件の真相を聞き出そうとしても、琴線に触れない程度の当たり障りのない言葉でしか語らないだろう。もしもここで自分が栄雅としての愚痴をこぼしても、困った顔も嫌な顔もせず、当たり前のように話を聞いて同情し、癒してくれるだろう。そんな自分と兄を、白梅という男はやはり隣で笑って見ているのだろう。二人をどんなに困らせても、彼らはどこまでも許容してくれるのだろう。

これから先――、自分と彼らとの線が交わる機会はない。どれだけ時が経とうと、どれだけ間近で生活しようと離れていくばかりで、唯一介入できた瞬間は、遠い昔に完全に失われている。どう足掻いても自分は無力なまま生きていき、彼らは自分が追いつくことの出来ない厳しさと優しさを内包したまま、二人で生きていく。

そう悟った時、明良はわけも分からず苛立ちを感じた。

ユビキリ　ノ肆拾

明良の感情が揺れた一瞬を白梅は見逃さなかったが、それを露草が感じ取る前に、平静さを取り戻してしまう。
嘘をついている、と続けたいのを堪え、「ここに戻ってきてくださったのですか」と問いかける。それは自分の希望とはかけ離れている大きさで、囁きと呼べるくらいの微かなものだった。

「残念ながら、違う。俺はもうここを出て行く。二度とあの家に帰るつもりはないよ」
低音の声の響きは、優しいながらも心を抉る力があった。
「そう言われると思ってました――どうぞ兄上、お元気で。・・・・・・というか、兄上は生きていらっしゃるのですか？」
「は？」

不意打ちに思わず、ぽかんと口を開けた露草の間抜け面は、生涯きっと何度も思い出すだろう。
それを裏打ちするように、横で瞠目していた白梅が爆笑する。目の端に浮かんだ涙を拭いながら、若干震えた声でわざわざ確認するまでもないことを聞いてくる。

「露草。お、おんし、生きとるかね？　」
「当たり前だろう。ついさっき、俺が死んでたらここにはいないと言ったのはお前だろうが」
「そうやけど。その姿見りゃ幽霊じゃ思うてもおかしくないが。なんせ二十年くらいは当に経っているからのう」
「三十年近いだろう」

「あれ、もうそんなん経った？」
「経ったと思うが・・・・・・明良？」
「経ってますね」
「ほらな」

どうだと言わんばかりに勝ち誇った目でこちらを見返してくる露草に、こんな性格だっただろうかと首をかしげながら白梅は苦笑するしかない。
血を分けた相手に久しぶりに会ったことで、気安さを感じているのだろう。
始終小難しい顔をしている露草にとって、それはいい傾向だと思えた。

「相棒、とでもいうのかな。実はな、明良。こいつは人間じゃないんだ。そして俺も人の理を外れている」
「いきなり本題から入るね」
「もうすでに正体はばれているのだから、隠しても仕方あるまい」

そう悲しげに俯いてから、露草は説明した。
死にかけの自分がどう救われたか、どう介抱してくれたか、どう気遣ってくれたか。それは全て露草と白梅の話で、明良にとって二人を無性に遠い存在へと変えていくのみだったが、ずっと姿形が変わらない自分の兄の言葉に必死に耳を傾ける。

「お話は理解しました・・・・・・といっても随分と無理やりな話ですね。傷の回復までは許せても、永久の命まで与えるものなのですか？　それに貴方・・・」
「白梅いいます」
「白梅さん、あなた自身はどれくらい生きているのですか？」

「そうやねえ・・・記憶は曖昧じゃね。少なくとも百年は生きとるけど、もしかしたら三百年くらいは生きてるかもしれん」
「桁が違うな」
「そんなに長い時を過すなんて、正気を保つのにも苦労します。それを考えれば、とても芯の強い方なんですね」
「なんじゃ、今度は二人して褒めて。煽てたって何もあげるもんなかよ」

白梅は照れたように握りこぶしをつくったり開いたりする。
そんな子どもっぽい仕草を見て、ふと表情が重なる二人はやはり兄弟なのだと感じさせる瞬間だった。

ユビキリ　ノ肆拾壱

明良は疑う素振りを見せることはなかった。
不安そうな眼差しを向けてはいたものの、白梅に対しては堂々と質問を重ねている。
兄の言葉だからと全面的に信じているのかもしれないし、はなから偽りだと決め付けているのかもしれない。もしくは、同じような話を以前に聞いたことがあるのかもしれなかった。
迷うような表情を浮かべ、意を決した顔で再度露草を見つめる。

「吸血鬼、という存在をご存知ですか？」
「何だそれは？」
「ばんぱいあ、って奴じゃ。血を吸った人を自分の眷属にして使役するとかなんとかいう伝説がある」
「これは私が勝手に推測した事にすぎません。白梅さんは吸血鬼の類では無さそうですし、血を吸ったわけではなく与えたということですから通常とは違いますが・・・兄上を眷属にしたと仮定しても差し支えはないでしょう。実際傷が癒えて、命が永らえましたから。けれど、それなら許容できる範囲ですが、吸血鬼について私が聞いた話では、眷族を利用してさらに仲間を増やそうとするとか」
「・・・・・何が言いたいんだ？」

話の着地点が見えないことに焦れて、露草は続きを促した。

「つまり、白梅さん自身か兄上自体に人を惹きつけるような、そういう仕組みが働いている可能性はないのだろうか、ということです。杞憂に過ぎないのかもしれませんが。先ほど見た兄上は、確か

に何度も思い返した昔のままの姿なのに、すぐに兄上だと気づけなかった。どこか違う雰囲気を感じて・・・・・・いえ、やはり兄上が人外という話があまりに衝撃的だったので、突拍子もないことを申しました。忘れてください」

「・・・・・・」

露草はそんなものお前の言うとおり杞憂に過ぎない、心配性だなお前はと笑い飛ばしたかった。

だが、できなかった。

なぜなら異国の地で女性や男性に話しかけられ、友好的な素振りを見せられた回数があまりにも多かったからだ。日本人がただ物珍しいからの行動かと思っていたが、眷族ゆえの餌の仕組みが働いているとしたら、一体自分は他人にどう見えているのだろう。

「餌、か」

「そんなつもりはなかったんやけど・・・」

「分かってる」

急に落ち込んだ空気に、図らずも正解を指摘してしまった事に気づいて、明良は気まずげな表情をした。

「血は吸わないんだろう？」

「ああ」

「じゃあ俺も吸わないんだろうさ。それだけで十分だ。人に嫌われるより好かれるほうが行動しやすくなる面もあるだろうしな、まさに生まれ変わった気分だ」

「兄上・・・」

「変わったねえ。昔は自分ひとりで立っているような顔しとったんに」

「そうか？」
「そうよ」
「――・・・・・・・」

会話が交わされるたびに、疎外感を感じてしまう明良に気づいたのか、白梅はにっこりと笑いかけた。

「心配やろうけど、必ずお兄さんを幸せにします」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「あれ？　何で固まってんの？」
「・・・お前、なあ」
「天然ですか」
「ああ。こいつを友人とも相棒とも呼びたくなくなってきたな。もう何でもいい。一時他人のふりをしたいほど恥ずかしい」
「なんでじゃー」

あきれ返り、鳥肌まで立てそうなんとも言えない顔をした兄に、本気で不思議そうな顔をしている白梅。
いつの間にか苛立ちも忘れ、彼なら兄を任せても大丈夫だろうだなんて、明良まで白梅の調子に感化されてしまう。

微かに風が吹いて、目の前から桜の甘い香りが漂ってきたことに、なぜだか涙腺を刺激されるような気がした。

ユビキリ　ノ肆拾弐

「もう一つ聞いてもいいですか」
「ええよええよ。この機会じゃ、何でも聞いときー」
「だからなんでお前が答えるんだ。それで、何が聞きたい？」
「何故、ここに立ち寄ってみようと思われたのですか？」

この質問にはちょっとだけ期待が含まれていた。
明良の中で兄は憧れの対象として刻まれている。関心事に自分のことも含まれていたら、やはり嬉しい。

「その前に明良、お前がどうしてここにいたのか尋ねてもいいか？」
「あ、はい」

逆に聞き返されてしまった。
かつて栄雅であった兄なら別段隠すような事でもあるまいと、素直に理由を説明する。

「川本家の影についての文書があったのです。『影の構成の中に、花咲家の者を入れるように』と。ご覧になりましたか？」
露草が頷くのを確認し、また後を続ける。

「先代の当主、花咲太一郎は早くに亡くなり、今の代に引き継がれてからも影を差し出していません。記録を見れば先代の前、花咲約進の代に息子が一名影に加わっています。忍びの里から人員は足りていますが、記録が残っている限り、何らかの約定が結ばれたの

だと思い、花咲家自体に詳しい事情を聞こうとして赴いた次第で」

わざわざお忍びで話を聞きたがったのは、大事にしたくなかったからだろう。

影のことは川本家の家族と直属の者たちしか漏らさない決まりで、極秘事項の中でも最たるものであるからだ。

「本当なら、お前に宛てた書状に私が信頼を寄せていた者たちの名を連ねたことも、するべきじゃなかったが。あの時は時間がなかったからな。今となっては仕方がない。あれはもう廃棄したか？　・・・よし。それでも、これだけは書面にするわけにはいかなかったからな。家族の者たちが守り通した秘密だ。それなら相応の敬意を払って取り扱うのが決まりだろうよ」

長くなる、まだ時間は大丈夫かと聞いた時にはすっかり日が暮れ、いつ影が屋敷へ引っ張っていこうとするかも分からない時刻だった。しかしこの時を逃せば、一生兄と会話をする機会は失われる。そう確信していた。失われていたと思っていたものだ。再度逃すわけにはいかない。一晩だけでも学び、一晩だけでも歓喜と惜別に浸るのだ。

「大丈夫です。お話ください」

「しっ、ちょっと待って」

ゆらりと風が揺らいだかと思うと、栄雅付きの影が姿を現す。顔を伏せ、こちらの顔を見ないまま語る。

「お話中、すいません。灯りを用意しております。・・・どうか場所を移っていただけないでしょうか。ここでは夜風がお体に触り

ます。人払いをした小屋が近くにございますので」
近づくなと言っておいたのに、と明良は渋い顔をしたが、露草と白梅はそれもそうだと苦笑いした。
「・・・仕方ない」
「気遣ってくれたんじゃね。優しいねえ。ここ何年もそんな経験した事なかったなあ」
「頑丈だからな。大体今のはお前じゃなくて明良のために言ったんだぞ」
「――ッ！」
栄雅の元の名を呼ぶ、しかも呼び捨てで呼ぶなどということは、栄雅よりも低い立場であるはずの流れ者には到底無理な話だ。それなのに何の躊躇も咎めもなくその音を発した事実に、影は身を硬くした。
「会話を聞いても、姿を見てもならない。いいな」
「かしこまりました」
再現されたやり取りに、詮索するなという意を汲み、影は背筋を伸ばす。
押し黙ったまま小屋まで案内した後、完全に気配を消した。
「申し訳ありません。若い影でして」
「いや、あれくらいの影がいい」
露草は目を細める。
影にしては心配性な気がするが、人間味を感じられる方が栄雅には

いいだろうと思う。それにどこか弓影や透影の姿が思い起こされた。

ユビキリ　ノ肆拾参

「丁度影の話だったから、場所を移る頃合いだろう。さて、花咲家の影についての話だったな」
「はい」
「白梅。塔十郎殿にした話を覚えているか。あれと似た話をもう一回する。寝ててもいいぞ」
「ああ、そりゃ眠くなりそうじゃ。じゃあ私はこっちにいるよ」
入口近くの柱にもたれかかると、目を閉じてしまう。
「何かあったら起こして」と返したものの、きっと完全に熟睡してしまう事はないだろう。

話は自分たちの曽祖父の時代にまで遡る。
川本末久が時期をずらして仕官に取り立てた二人の男たち。
功績をすぐに認められた男、栗町君近と、頭脳を妬まれて功績をすぐには認められなかった男、花咲方雪。
妻も子も失って悲嘆に暮れた方雪を支え、末久に談判してまで名誉を回復させた君近。
その働きにより忠誠を認められ、末久から失った息子の代わりとして方雪に与えられた川本家の末の子、約進。
そこからは花咲塔十郎にも話してない事だった。

「約進は非凡な才能を示した人物だったらしい。末久の長子、定良よりも優れていた。それゆえに持て余されていた。養子として川本家から花咲家に移されることに対して、本人の意思がどうだった

のかは今となっては汲み取れない。だが本家の者に、後に川本家を乗っ取るかもしれないという不安を抱かせたのだろう。末久の次の当主、つまりは私たちの祖父であり約進の兄である定良は、後に約進の末の息子を忠誠の証として川本家に差し出すよう命じた」

末の子は特に可愛いものだっただろう。それを差し出せということは人質として預かるという事だ。その子を栄雅の守として使うという。否応にも家の立場を思い知らされる事になる。

しかし反乱を起こすのにも何かと資金が必要だが、友人の妻の家のために援助をしたことから、川本家を乗っ取ろうという気は、約進にはなかったんじゃないのかと露草は考えていた。

「約進の次の当主である太一郎には、跡継ぎが一人しか残らなかったために、そのまた子どもから影を差し出すことになっていた。しかし、その役目を伝える前に亡くなってしまい、仔細を知る者はいなくなったというわけだ」

「父上からも花咲家から影を取るようにとは言われていましたが、そこまで詳しくは聞きませんでした。兄上はどうしてそこまでご存知なのですか？」

「私の影を覚えているか？　あれが花咲家から差し出された影だ。父上よりは年下で、私よりも一回り以上は年上だったな。彼は六男で、生まれてすぐに川本家に仕えだしたらしいから事情はよく分かっていないようだったが、元が花咲の生まれだということは知っていた。私が民衆の主だった者たちと交流を図っていたのは知っているだろう。そのうちの一人に花咲家の五男である九次郎殿と長子である太一郎殿もいたんだ。そこから花咲約進と川本定良との間で成された密約や、花咲家と栗町家との繋がりを知った」

あの書状に花咲の名前を書かなかったのは・・・・・・いろいろと

厄介な人たちだったからな、と気まずげに弁解した露草の言葉に察した素振りで、明良が頷く。

「栗町家・・・食べ屋敷ですか。今は仲違いしていると聞きました」

「そうだ。視野を広げているようだな。約進と栗町家の当時の当主である小次郎は親と同じように友人だったが、小次郎の妻の実家で病人が出て、薬代が必要になったらしい。しかし栗町家では足りないから花咲家に援助を申し込み、流行り病のための出費だということを明らかにしたくないため、騙し取られた事にしてくれと小次郎が頼んだ。それをきっかけに表立った両家の交流は途絶えた。しかし、次の代の花咲太一郎殿と栗町花一郎殿も親友だったようだ」

はたからみれば不器用な人間の集まりだが、本人たちにしてみれば最善だったのだろう。

「またその次の代、つまりは今の当主である塔十郎殿と梅太郎殿も友人らしいが、今はこじれているようでな。けれど塔十郎殿は栗町家との事情を知っているし、彼らの子どもである清治郎殿とお良殿が近々祝言をあげるから、ゆっくりと仲が回復していくだろう。・・・・・とまあ、私が栄雅だったころに聞かされた話を思い出して、今両家がどうなっているのか確認しようと、ようやくこの地に戻ってきたというわけだ」

「そうなんですか・・・・・」

「で、もちろん今の栄雅さんがどうなっているかも、露草兄ちゃんは見に来たかったんよな」

「え」

「余計な口を挟むな。というか寝たんじゃなかったのか」

「寝られるわけがないじゃろ。露草のことやけ、必要事項だけ伝

えてさっさとさよなら言いかねんけえ」
「・・・・・余計なお世話だ」
「そんなん言うて、後で絶対後悔するやろ。」
ぐ、と言葉に詰まった露草を見て、「ほれ見てみぃ」と意地悪そうな顔で笑う白梅を明良は繁々と見つめた。

ユビキリ　ノ肆拾肆

「どうした？」
「いいえ、ただ――」

露草が首を僅かに傾げると、明良は黙ってしまった。その沈黙がどうにも居心地が悪く、なかなか自分からも切り出すことが出来ない。白梅にしても助けてくれる様子はなく、傍観者に徹するつもりらしかった。

「ただ、兄上が『露草』と呼ばれていたので。今はそう名乗っていらっしゃるのですか？」
「それか・・・流石に栄雅と名乗るわけにはいかないからな」
「そうですね」

明良の名を呼ばれることなど、絶えて久しい。
個々の存在としての自分が段々希薄になるようで、最初は誇らしくもあり悲しくもありと、呼ばれるたびに違った感情が胸によぎったものだったが、すでにそんなものは過ぎ去ってしまった。

けれどその感情を覚えているからこそ、目の前の人物が名前を持っていることが嬉しかった。兄、として呼ぶばかりでどう語りかければいいか分からない状況は、どうにも寂しい。
それに名が呼ばれるたびに、ここに唯一無二の存在としているのだという安心感がじわりじわりと押し寄せ、嬉しかった。その名を呼んだことが自分じゃない事の悔しさを差し引いてもだ。

「目に入ったものを、あの人が適当に名付けたらしいが・・・・・・今となってはいいと思う」

個人を識別する記号ではなく、それ以上のものをのせて名を呼ばれる。

そんな単純な事で嬉しそうな顔をする露草に、弟ながらさらに喜ばせたくなって、初めてその響きを口で転がしてみた。

「つゆくさ兄上・・・・・・いい感じです。平凡なようなのに、非凡さが隠されているようで、ぴったりです」

「お前は俺を買いかぶりすぎだ」

「まさか」

とんでもない、といったように明良は肩をすくめて大げさに否定して見せた。そんな動きが子どもの頃の無邪気な笑顔とどこか重なる。一方で露草は、名前をすっかり気に入った様子の明良を苦笑しながら眺め、ため息をついた。その仕草は毎日公務で疲れていたかつての栄雅が一休みする時の癖に似ていた。

そんな二人の向こうで、白梅はにやにやと笑った。彼はやっぱりそれまでと何も変わらないようだったけれど、いつも凪いでいた彼のまわりには、確実に波跡が増えているようだった。

「やはり、偶然はあるものですね。必然と私は言いたいところですが」

「・・・・・・？」

揃って首をかしげた二人に、明良は続けた。

「私の子どもです。白露と名付けました。つゆという響きではあ

りませんが、本当にこの名前でよかったと今思いました。川本露草のように、真っ直ぐ育ってくれることでしょう」

「はくろ、か。純粋さが表れている」

「露草に似たら性格捻じ曲がるんとちゃう？」

「言ってくれるな。それをいうならお前の名前も入ってるぞ。『しら』と読むわけではないけどな」

「あ、ほんとじゃ！　ならやっぱり素直で優しい子に育つよ。いやー、安心じゃねえ」

そのままぎゃあぎゃあと言い争いを始める二人を見て、若干不安になったことは秘密だが、こんな気が置けない友がきっと出来るのだろうと、明良は我が子の未来を思い描いた。

ユビキリ　ノ肆拾伍

その日、小屋で一晩を明かした。
露草の悪口や思い出話で盛り上がり、旅の道中の話を語り、藩内での苦労を愚痴る。
眠気は襲ってこなかった。この一夜だけと決めていた。もう一晩過ごせば、栄雅として立場が悪くなるからとはただ単に後付の理由であって、本当はもう一晩明かすと、きっと離れがたくなってしまうから。

だから素っ気無い味の水を飲んで、いつの間にか小屋の外に置かれていた握り飯を早々に口に放り込んで、また語った。
そしてまだまだ語り足りなかったけれど、名残を惜しむように立ち上がった露草は、すでに高く上った陽を恨めしく睨みつけるようにしながら切り出した。

「出て行くときは明良、お前から行け。時間を空けて別々に出て行ったほうがいい」
「さよならする時も、もっと何か言い方あるじゃろうに。ほんに口下手やね」
「お前はいちいち五月蝿い」

再度交わされる軽口も、何度目か分からなくなっていた。そのせいか、白梅と露草がどれだけ親しく会話や視線を交わそうと、微笑ましく感じてくるのだから不思議だ。
幼い頃の父親が、露草に対して取っていた態度の意味も今なら分か

る。そのために画策してあの事故がおきたのか、事故が利用されたのかは不明だが、兼良が何らかの形で関わっているのは明白だ。けれど、そのために弁解するのも謝罪するのもどこかちぐはぐで、何より謝ろうとする素振りを感じるのか、露草は全て会話の主導権を握っていた。

「それでは・・・・・・」

「ああ――元気で」

視線を交わす、その瞬間が腕を引き止める動作にも思えて足取りが鈍る。

「兄上は苦労性のようです。白梅殿を見習って、大雑把に生きてください」

「「なんだ（じゃ）それは」」

気分がいいとはとてもいえない顔で、二人は顔を見合わせた。一人は悪巧みでも潜めていそうな瞳をして、一人はとてつもなく不味いものでも飲み込んでしまったような表情だった。

二人の見事な斉唱に呆れながらも嬉しそうな笑声を漏らし、明良は栄雅として外に通ずる引き戸を引こうとした。

向けた背に一言だけ投げかけられる。

「幸せに、なれ」

不器用な一言は、やはり嫁入り前の娘か妹に贈られるようなもので。その言葉は夜っぴて語り明かした名残なのだろうけれど、赤面する事はなかった。同じようにぼやけた思考の中で慈愛を感じ、明良は今度こそ粗末な小屋を後にした。

ユビキリ　ノ肆拾陸

「行ってしまったよ」
「・・・ああ」
「元気そうじゃった」
「ああ」
「白露も、元気で幸せに生きてくれるとええね」
「ああ」
「・・・話すのは、あれくらいで良かったん？」
「・・・・・・明良は、栄雅だ。俺ごときに時間を費やしているわけにはいくまい？」
「現実はそうやね。けど栄雅じゃったお前さんがそんな悲しい事を言うなよ。たまには我儘言ってみたらいいんじゃ」
露草は俯いたままだったが、やがて搾り出すように言った。
「一晩中話したんだ。喉が痛い。もう語ることなんてない。満足だ」
これが本音だ、と挑戦的にこちらを見上げる瞳は揺れていた。
「そう」
白梅はその顔をちらりと覗き、そして軽くため息をつく。それに反応してか、露草のまとう空気が剣呑なものになっていく。
「・・・・・・全く。子離れがいつまで経ってもできん、親のようじゃね」

悪気はないのだろうが馬鹿にされているような口調に、露草は頬が紅潮するのを感じた。
味方と呼べるべき人物を常に見極め続けていなければならなかった、息がしづらい川本の屋敷で過ごしたのは、人格形成において最も重要な時期だ。
気を許せる者など、それこそ透影と弟の明良だけだっただろう。それならば依存といってもいいほど、彼らのことを気にかけるのは全く不自然ではない。露草だって冷血漢ではないのだから、縁とする人物が必要なのだ。まして、そのうちの一人はとうに亡くなっているのだから、弟が可愛く見えても仕方がないこととといえた。
――しかし、すでに成人して三十年近くたっているのだから。
そんな白梅の呆れなど分かりきっているが、目に浮かぶのは幼かった頃の明良だ。再会して思い描く像が更新されたとはいえ、自分を慕ってくれる気持ちは変わらなさそうなので、やはり可愛いことには違いない。
だが、本当は白梅の言い分に賛同している気持ちもあったのだ。もっと砕けた言い方をし、もっと感動を身振りで伝えながら。
実際それを実行すれば、もはや露草とは呼べなくなるだろうから、やはりこのような形の再会しかなかったのだろうと露草は思考を打ち切った。
「そうだ、悪いか」
「・・・開き直りよった」
珍しく白梅を脱力させたことに若干優越感を覚えたが、彼ら二人の微妙な力関係が変わることはない。
これから先もずっと、白梅に振り回され疲れさせられる日々が続い

ていくのだった。
もっとも、白梅に言わせれば逆の意見であったのも確かだ。

ユビキリ　ノ肆拾漆

甲高い連続音が辺りに響いていた。
排気ガスと食べ物の匂いが混在する横では一人の男が佇み、寒い冬の日だというのに薄手の服にロングコートを羽織っただけの格好でぼんやりと空を見上げている。

こんな場所で食べ物を売ろうとするなんて、店主はよほどの物好きか、それとも気が触れているのかもしれない。

けれどそんな意見が正当性を主張するには些か分が悪かった。
何しろ売る状況の適正云々を論議するより先に、売れる場所と予算を検討したらこの地所が合致したのだから。第一、今の時代にそんなことを気にするほど繊細な人間がいるはずもなかった。

「ほれ、温かいよ」
「・・・ありがとう」

さりげなく言ったつもりだったが、目の前にいる男はにやりと笑った。気恥ずかしいのでそっぽを向きながら、差し出された包みを奪い取る。

「甘いな」
「餡子は苦手じゃなかろ？」
「まあな・・・・・・それより、白梅」
「うん？」
「いい加減、その口調を止めたらどうだ」

「まだ言っとるん、それ」

つい先日、彼らは日本へと到着したばかりだった。パスポートなどは長年培ってきた人脈の中でどうにかしたが、最近の欧米事情には詳しくとも、日本のこまごまとした地形にはまだ慣れない。目的もなくぐるぐると歩き回って、ようやく食べ物屋を見つけて甘い菓子を購入する。そのように辺りを散策している時には、やはり時代が変わっても白梅のような銀髪は珍しいらしく、好奇の視線を集めてしまう。その視線は外国でも見受けられるので、本人たちは全く意に関せずといった様子だが、事情を知らない者たちからすればその場慣れしている感じがモデルか俳優か――、有名人ではないかと期待をかけたくなる。

けれどどこに行っても故郷、という感じなのですっかりいつもの調子を取り戻し、最早おなじみとなったやりとりを繰り返すも、白梅に口調を改める気はさらさらないらしかった。

「お前の容姿に加えて、さらにその口調が目立つんだ」

時代を考えろ、時代をと恨めしげに繰り返される小言も、白梅はどこ吹く風だ。

「といっても。癖になっとるけえ、今更変えられんよ」

「気持ちは分かるんだがな・・・」

やろうと思えばやれるくせに、と露草は愚痴るのを忘れなかった。威圧感を出そうとしたり、高位の人物に対する時だったり、所謂標準語や格式ばった物言いを苦もなくやってのける。使い分けることが、彼には可能なのだ。それを長年一緒にいる露草は知っていた。以前はてっきりどこかの方言が身についてしまって、それ以外話せないのだとばかり思い込んでいたが。

「いろんなものに慣れておくゆうんは、損にはならへん」
「・・・・・・俺が、慣れないんだ。お前の中では整理が出来ているのかもしれないが」
「ええやん、方言いうてもいずれ混ざると思うよ」
「そうやって俺はいつまでも言いくるめられるんだよな」
こうやって諦めるのがいつもの調子で、やはり今回も同じだった。
それは予想していたので、しつこく掘り下げる事でもない。

以前は散切り頭が目立っていたが、今では日本人男子のほとんどが散切りなため、総髪姿の方が目立つ。髪がかなりのびた白梅と露草、二人とも今は髪を結った総髪姿だった。いずれどこかで切ってもらわなければと思いながら、面倒で結局このままでいる。
それに、髪が長いとそれなりに利点もある。寒いときに髪を下ろせば少しは温かい。とはいえ、その利点を挙げているのは白梅だけだったが。

髪を垂らしておくなどという髪型は女子のようだと、露草は頑として受け入れようとしなかった。白梅の髪形については既に諦めたようだが、この調子ではたとえ北の大地で雪に埋れようと髪を垂らすなど考えもしないだろう。
けれども本当に命の危険性が感じられる場合には、自分がきちんと説得せねばなどと、かなり的外れな助力の仕方を決意していたのはもちろん白梅である。

最近では、相棒という言葉で二人を括ってもいいほどになってきていた。
露草は家族と決別し、未練がないとは言えないだろうが本人の言うとおり後悔はしてないようだったし、目の前と横をしっかり見るよ

うになった。それは人間的な意味でもだ。

ちょっとずつだが白梅という存在が認められて、頼られているようにも感じる。それは世界での身の振り方という白梅が持つ主導権だけの話ではない。少しだけだが精神的な弱さを一方的に感じ取るだけでなく、本人自身が晒しているように思えるときもある。そんな僅かな変化が、まるで何十年、何百年と持っていなかった家族の繋がりのようにも思えて、嬉しいことこの上ない。

彼の天邪鬼な性格は分かっているので、わざわざそれを言う事はないだろうけど。

そんな白梅に心を許し始めているのを露草自身も自覚しているようで、それに反発したい気持ちを抑えているようだった。というか、どこか諦めて開き直っている節さえあった。

「今度は肉まんが食べたいねえ。甘いものばっかりやと、どうにも飽きてしまう」

「お前が率先して甘いものを買ってくるんだろうが」

甘党の明良につられたのか、露草は案外甘いものが嫌いではない。それを知っているからこそ白梅がわざわざ買い求めている、なんていう裏話もあったのだが、そんなことを知る由もないのだから露草が口を引き垂れても仕方がない。

かくいう白梅にもやり過ぎた感は否めなかったので、毎度の食事に栄養のつくものをきちんととれる環境を早々に整えなければ、と半ば主婦じみた思考をめぐらしながら、白梅はまた甘い匂いのする菓子を頬張った。

ユビキリ　ノ肆拾捌

「寒う」
「まあな。だが芬蘭ほどじゃない」
「でも人が多いからこそなんじゃろうけど、雪と比べると殺風景って感じもせん？」
「鉄の塊と、雪の塊か。俺にとってはどっちも変わらん気がする」
「情緒ないねえ」

白梅の指摘に反論することなく、露草は微笑みだけを返した。
自嘲の笑みでもなく、賛同の笑みでもなく。

「だが、俺にとっては本当なら見ることの出来なかった景色ではある」

――本当なら、崖から落ちたときに存在自体が消えていた人物。本当なら、何も感じられなくなっていた体。

だからどっちも変わらないというのも、満更間違いじゃあないなんて呟く横顔はどこか寂しげにも満足げにも見えた。
露草の様子がいつもと違うことに勿論気づいていたけれど、白梅はどうすることもできなかった。
それでもあのときの自分の勝手な行為が彼にとって負担となっていたのか、これでも内心考えてはいたのだけれど、きっと間違いではなかったのだろうと完結させる。少なくともそう思いたい。

いずれは、そんな事まで腹を割って話せるような気安さが流れてくれるといい。けれど、後悔はしていないと言い切った彼ならば、そ

んな些細な悩みなど一蹴してしまうだろうという事も予想できた。
ここまで長く共に生きた存在はなかった。ずっと一緒に時代の移り変わりを見て、語れる人物。
これからも共にいられるといい。これからも、ずっと。

寒風が体の中を通り抜けていく。凍るような冷たさは朝方特有のもので、澄んだ朝陽が待ち遠しくてたまらなかった。
でも、こんな暗い朝方の風景も嫌いじゃない。未だ人々が眠っていて、息吹が感じられるような朝方の空気が何ともいえない爽快感を生む。
そう常々思っていたのだが、相棒は寒さに弱いらしくコートとマフラーの位置をしきりに気にしていた。

「お前は大雑把なイメージがあるんだが、案外神経質なんだな」
「おんしも神経質なイメージやけど、結構大雑把やね」

ぷるぷると震える様子がチワワみたいで可愛い、なんて感覚は勿論持ち合わせていないので、ただ景色と一緒にぼんやり眺めていたのだが、返す言葉はほとんど鸚鵡返しで唇も紫色なところを見ると、よほど寒いのだろう。

「仕方ない・・・・・・これでも巻いとけ」
「何」

ばふ、と自分のコートを羽織らせる。ぴゅう、とさらに風が自分の素肌を撫でるように吹いた所為で確実に体温が下がったが、震えを悟られるわけにはいかないと痩せ我慢する。

「露草・・・それじゃあんたが寒かろう」

「寒くない。体を動かしていれば問題はない。だから歩くぞ」

やっぱり寒いんやないの、と呆れ気味に返す白梅だったが、自分がどうにか巻きつけたコートは手放し難いようで、きっちりと両手で前を閉じ合わせていた。

ユビキリ　ノ肆拾玖

当ても無くぶらぶらと歩いていた。ろくに手もちがないまま空き腹を抱えてうろつき回るというのは、かなり前にもこの国で経験した事だったが、これが標準装備だとはいいたくない。
早朝の散歩は二人にとって馴染み深いものだった。昼間からいい年をした男性が外を歩いていたら、少なからず好奇の目に晒される。だが地形を覚えるのには見て回った方がやはり早いので、人の目を気にしないでいい早朝はまさにうってつけの時間だった。

ちち、と気の早い鳥が露草の肩にとまる。
薄く東の空は白みはじめているのだろうが、未だこの辺は夜中といってもいいほどの暗さなのに、どこにでも変わりものはいるらしかった。

「動物にも好かれるようになるとは、やっぱり私のせいかねえ」
「・・・・・・さあ、それは何ともいえないが。動物は嫌いじゃない」

嬉しそうに声を鳴らした鳥の頭を人差し指でつついてやると、大慌てで飛び去っていった。

「こら」
「ごめんごめん、苛めるつもりはなかったんやけど」

飛び去ってしまった鳥を見送りながら、露草は寂しそうに空を仰ぎ、なかなか姿を見せない朝陽を恨むかのようにため息をついた。

「白梅」
「・・・ん？」
どこと無く予感のようなものを感じて、白梅は若干間をあけた。それを気にせず、露草は足元をぬらす草についている露をじっと見つめている。

「俺は、旅に出ようと思う」
「・・・・・・旅、ね。今みたいにじゃなく？」
「一旦、一人になりたいんだ。お前に頼らず、あの地で」
あの地、とはまさにあの地。祝福されない生を受け、望まれた死を経験したろくでもない思い出ばかり残る地か。
あそこのどこがいいのだろう。露草を苦しめるばかりの、どうしようもない思い出。彼が唯一執着しているものと言えば、弟の記憶。

「川本家を見てくるんじゃったら――」
「違う。お前だって分かっているだろ」
「ん」
「誰もいない地になろうが、ちょっとだけ滞在してみたい。またここに戻ってくるから」
白梅はにやりと笑った。その笑いが少し不気味に思えて露草が無意識のうちに後退ると、ちょっぴり傷ついた様子で、でも楽しげな様子でこちらをじろじろと観察してくる。

「な、なんだその笑い」
「なんか、いいなあ。私のところに戻ってくるって言い方。空間

っていう意味やろうけど、家族ーって感じがする」
「うん――？」
はた、と気づいた。もしかしなくても今、自分はとても恥ずかしい事を言った気がする。
彼にしては珍しく顔を赤らめた。それを指摘しなかったが、期待していたのが丸分かりだ。
「馬鹿」
「ええよー、馬鹿でも何でもー」
にやにや笑いを収めようともしない様子に若干腹が立つが、後の祭りで。
「戻ってきてな、ちゃんと。そん時にはもっと笑えてるとええね」
「最初に会った時もそんなことを言っていたな。どうなるか責任は持たないが――そうなるといいなと、自分でも思うよ」
本当に今日は珍しいこと続きだ。
双方の思いが重なっていた事には気づかず、彼ららしくないやり取りを続けて、あっさりと別れた。
何年経とうが、きっと同じように逢えると信じて。

ユビキリ　ノ伍拾

「約束する時はね、こうやってやるんじゃ。指きりげんまん、嘘ついたら・・・」

遊女の約束の真似事だと知っていたが、白梅のあまりの無邪気さに思わずのせられて、右手の小指を差し出す。彼の指先はいつでも冷たかった。

「しかし、家族といっても親子なんか、それとも兄弟なんやろかねえ・・・・・」

白梅は別れるとき、確かにそう独り言を漏らした。
その時は無視して歩いていったが、今頃になってぼんやりと思い出して、歩を進めていく。

親子ならば雰囲気的に自分が親なのだろうか。あんな手のかかる子どもはいなくていい。単純に年齢でいえば白梅なのだろうが、彼が誰かを育てる図が想像できやしない。どちらかというと子どもと一緒になって遊んでしまって叱られるタイプだ。
なら兄弟はどうか。あんな人を振り回すような兄貴はいらない。それで片付いてしまった。
けれどはたから見れば疎ましがりながらも、家族として認めている図そのものだということには気づいていない振りをする。

露草は歩き、時には電車を使い、白梅と一緒にいるときと負けず劣

らずのんびり移動した。どうせ時間だけは無駄にある。
緩やかな坂道に差し掛かり、ずっと歩き尽くめだった露草は、道横に置かれていたベンチに腰掛けた。開けた視界の中にはのどかな田園風景。向こうには蜜柑らしき果樹園まで見え、手前では収穫を終えた稲穂が小さな家々のように積まれて乾燥させられていた。

うろこのように転々としている秋の雲を眺め、時には排気ガスくさい歩道橋を渡り、一人で料理屋の食事に舌鼓を打ち、ふとした瞬間に隣にいるはずの人物を思い浮かべ、何ともいえない気持ちでまた食事を再開する。
時には回り道をしながら、有名な観光地を廻ってみる。ある地では、何十年も前に来た時と微かにしか違いを見出せずに、とても嬉しくなった。

ある日には早朝のいつもの散歩に出かけてみた。
年寄りは朝早くに起きるようになるというから、これもそうなのだろうかと思ったが、それに当てはめると白梅は赤ん坊並みになるので、やはり人それぞれ、いや、鬼それぞれなのかもしれない。
そんなくだらないことをぼんやり浮かべ、白い息をじっと見つめながら、線路の上を歩いた。今の時間は貨物列車くらいしか通らない。それに山に囲まれていて空気もいいし、道が開けて見晴らしがいいので、朝陽が綺麗に見える。

目線はどこまでも続く線路の上を辿りながら、聴覚と触覚は靴底に当たる石の感触を無意識に追っていた。こんな風にのんびりして過ごす時間が常になってしまったが、人間だった頃はこれでもつかの間の休息すら持てない日々がほとんどだった。命を狙われている明確な不安や恐怖まではなかったが、奥底には警戒すべきだと分かっていて、本当に安らぐ時間は大人になって力が付いたころにようや

く持てた。なのに、その時間もすぐに虚像だったと思い知らされる事になったのだが。
それが今では気を抜き放題。やはり近場の人間の影響は大きいのだと、常々実感させられる。

そんなことを考えているうちに、露草はぴたりと歩を止めた。視界の端に何かが映った気がしたのだ。そしてそれは、どこか人間のような予感がして、同時に胸騒ぎを覚えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3403x/

ユビキリ

2012年1月3日05時46分発行